

# 大河ドラマの主人公

歌麿や写楽を導いた「反骨の出版人」とは？

大河ドラマ

『べらぼう』

～葛屋重三郎の夢～

がもっと楽しくなる

# 葛屋重三郎

江戸のメディア王と波乱万丈の生涯

喜多川歌麿

大田南畝

山東京伝

葛飾北斎

東洲斎写楽

Special Interview

大河ドラマ

『べらぼう』

～葛屋重三郎の夢～

横浜流星（葛屋重三郎役）

葛屋が活躍した地

吉原を往く

天才絵師の面影を探しに  
歌麿と商都・栃木

志気英邁にして、細節を修めず、人に接するに信を以てす

「住む」より「楽しむ」**BESS**の家

は、愛だ。

まぬ  
問貫けの八コ 新登場





# まぬけに

権力より、スピードより、大切な人との何げない時間がどれほどだいじか。

Special Interview

大河ドラマ『べらぼう～葛屋榮華乃夢斬～』  
横浜流星さん（葛屋重三郎役）

大江戸四才人絵詞

葛屋重三郎

山東京伝

喜多川歌麿

東洲斎写楽

第一章

葛屋重三郎

吉原より頭角を現す

寛延三年（1750）

葛屋重三郎、吉原に出生

宝暦十年（1760）

徳川家治、将軍に就く

安永元年（1772）

吉原にて耕書堂、開店

明和の大火

安永三年（1774）

『目千本』の発行

第二章

葛重、再起を図る

浮世絵のパワー

写楽の正体

文／浅野秀剛（大和文華館館長、あべのハルカス美術館館長）

寛政三年（1791）

歌麿の美人画、北斎の役者絵

key person 葛飾北斎

寛政六年（1794）

東洲斎写楽の発掘

key person 東洲斎写楽



『姿見七人化粧・びん直し』

すがたみしちにんけしょう・びんなおし

髻（左右の髪の毛の生え際）を整える町娘。鏡を使って表情を出しながら美しい襟足まで見て取れる巧みな構図だ。歌麿は遊女だけでなく市井の美人も描いた。

喜多川歌麿筆 18世紀  
東京国立博物館所蔵 出典: ColBase (<https://colbase.nich.go.jp/>)

70	62	52	46	42	38	36	34	32	30	28
田沼意次と松平定信の時代 文／山村竜也(歴史作家)	歌麿と商都・栃木「栃木県」 天才絵師の面影を探しに	吉原を歩く「東京都」 葛重を育てた夢の色町	風刺的作品と出版統制 key person 山東京伝	流行する狂歌会への参加 key person 大田南畝	喜多川歌麿との出会い key person 喜多川歌麿	『娼妃地理記』の遊び心 天明元年(1781)	『青楼美人合姿鏡』 安永六年(1777)	黄表紙本の発展 安永五年(1776)	『籬乃花』と吉原 key person 平賀源内	蘭学の発展

112	108	98	60		102	94	90
厳選グッズ通販 時空旅人SELECT SHOP	葛重時代の名品を観に美術館へ	浅間の噴火と天明飢饉	吉原細見の見方	COLUMN	版画工房を訪ねる 美を生み出す伝統の技	葛重以降の江戸文化 key person 十返舎三九／曲亭馬琴	『身体開帳略縁起』 key person 北尾重政



江戸の賑やかな文化が、この男によつて華開く

## 葛屋重三郎役 横浜流星さん

大河ドラマ『べらぼう〜葛屋重三郎 夢噺〜』の主人公・葛屋重三郎役は俳優の横浜流星さん。江戸のメディア王、葛屋を演じる抱負を語った。

よこはま・りゅうせい

1996年神奈川県出身。2011年俳優デビュー。近年の出演作はドラマ『着飾る恋には理由があって』(2021)、『DCU』(2022)、映画『きみの瞳が問いかけている』(2020)、『線は、僕を描く』(2022)、『正体』(2024)など。第48回、第49回報知映画賞主演男優賞、第47回報知映画賞助演男優賞、第46回日本アカデミー賞優秀助演男優賞などを受賞。大河ドラマは初出演。

情に厚く、誰かのために動ける男  
葛屋と二緒に二年間を走り抜ける

横浜流星さんは今回がNHK初出演にして、大河ドラマ初主演だ。オファーをもらった感想は―

「大河ドラマは俳優として目標の一つでした。とても嬉しかったですが、驚きの方が大きかったです。なんで自分が？ と思いました。でも、撮影が始まって作品と向き合うようになったら、この作品は良い意味で大河ドラマらしくない。だからこそ自分を選んでいただけたのかと感じました。

大河ドラマは堅いというイメージでしたが、葛屋の物語はビジネスストーリーで展開がスピーディ。陽気な登場人物が多い。エンターテインメント作品になっているので、どの世代の方が見ても楽しめます。とくに自分と同じ世代の人に見てほしい。大河ファンも、そうでない方にも葛屋の魅力をお

届けするのが自分の使命だと思っています」

脚本は『おんな城主 直虎』(2017年)の森下佳子さん。舞台は江戸時代中期、主人公の葛屋重三郎。彼をどんな人物ととらえているのか。

「葛屋は誰もが知る人物ではありません。ただ、彼は江戸のメディア王、出版プロデューサーとして大きな功績を残した人です。葛重という人間は情に厚く、責任感があって、新しいものに挑戦して失敗してもへこたれないメンタルを持っています。彼の一番の魅力は、自分のためではなく、誰かのために動けることです。そういう人間は強い。力が何倍にも大きくなるし、ほかの人の協力を得られる。自分も葛屋のように誰かのために頑張る人間でありたいと思います」

もうすぐ横浜さんの葛屋が躍動を始める。

「葛屋はとても人間臭い男。情ないところも含めて、共感性の高い人物です。見ていただく方の目

線の先にいるので、感情移入がしやすいと思います。監督からは明るくと言われています。共演する渡辺謙さんからはとにかく真っ直ぐ全力でやればいいと、力強いお言葉をいただきました。脚本の森下先生の描く世界で、葛重として明るく自由に生きられたら、と思っています」

物語の初めは吉原が舞台になる。共演の小芝風花さんは幼なじみの役だ。

「葛屋は恋には鈍感な男で、それが彼の良いところ。自分は鈍感にやっているので皆さんでツッコミながら(笑)見ていただけたらいいと思います」

渡辺謙さんの田沼意次との対決も見どころだ。「葛屋の行動力には毎回驚かされていますが、田沼意次にはっきりと意見が言える葛屋には人間としてリスペクトしています。森下先生が登場人物をしつかりと描いているから、どの人物も生き生きとして魅力的な人物になっています」

# 江戸のメデイア王になる！ 萬重の波乱万丈の生涯



18世紀後半という時代、江戸の町を萬重は全力で疾走していく。

「想像するしかないですが、戦のない、平和な時代だったのではないかと思います。ただ、派手な戦がない代わりに、商いが戦になっているので、エンターテインメント性が高いドラマなんです」

撮影で苦労しているのは江戸時代の所作や江戸言葉だという。

「萬重はコテコテの江戸っ子で、べらんめえ調の江戸言葉を話すので、言葉のニュアンスをどう表現するかなど難しいことが多いです。監修の方に教えていただきながら、萬重らしい言葉に、自然に馴染めるようになったらいいですね」

一年間の長丁場の撮影が始まったところだ。

「この一年、一つの作品に取り組み、萬重と向き合うのは自分にとっての挑戦です。役者にとってはぜいたくで幸せな時間。見ていただく視聴者の皆さまに愛される萬重でありたいと思います」

江戸の出版界で成り上がっていく萬重。頂点に立つ時もある、挫折もある。視聴者は萬重とともに泣いて、ともに笑う一年になりそう。

萬重こと萬屋重三郎は出版プロデューサーとしてお上に目を付けられても“面白さ”を追求。歌麿の美人画や写楽の役者絵を売り出して大成功する。涙と笑いと“謎”の痛快エンターテインメントドラマ。

2025年  
1月5日  
放送開始!

## 大河ドラマ 「べらぼう」 ～萬重榮華乃夢断～

【総合】日曜 午後8:00 /  
【再放送】翌週土曜 午後1:05  
【BS】日曜 午後6:00  
【BSP4K】日曜 午後0:15 /  
【再放送】日曜 午後6:00  
作:森下佳子  
制作統括:藤並英樹、石村将太  
出演:横滨流星、安田顕、  
小芝風花、宮沢氷魚、  
里見浩太朗、渡辺謙 ほか

# 葛屋重三郎

## 江戸のメディア王と波乱万丈の生涯

麗しい美人絵で外国でも評判を博した喜多川歌麿

謎の天才絵師として知られる東洲斎写楽

江戸の浮世絵の文化を彩る彼らの影に

一人の敏腕プロデューサーがいた。

その名を葛屋重三郎。

華々しい夜の街・吉原に生まれた葛屋重三郎は

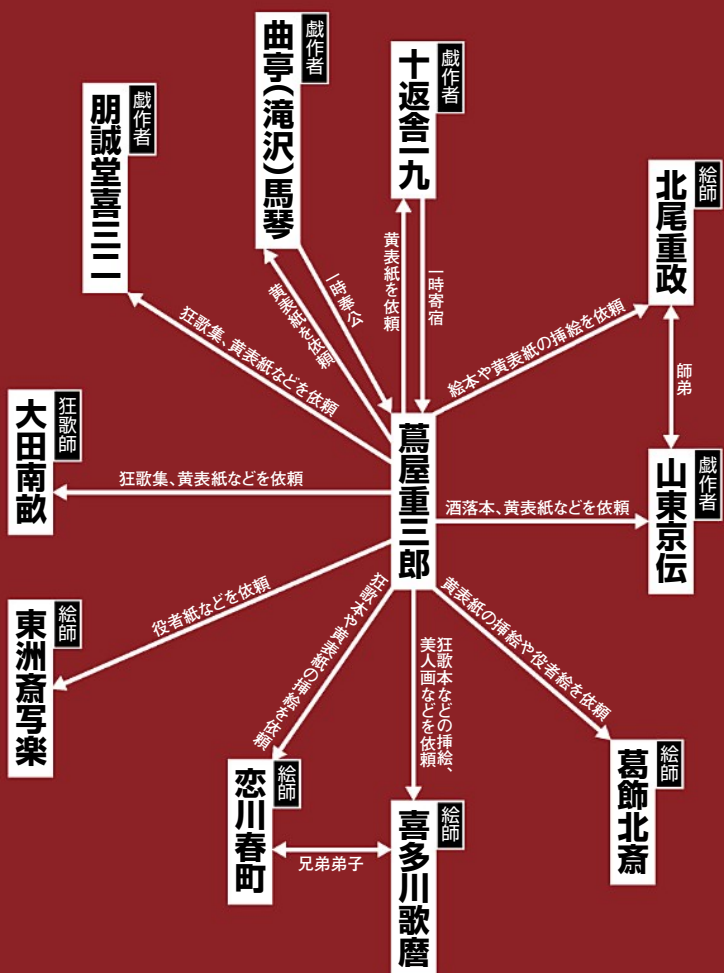
多くの芸術家たちと出会い、

ともに最先端の流行と名作を、

そして今に続く日本の文化を生み出していった。

さあ、お待ちかね、

お江戸の芸術が、葛屋によって華開く！





喜多川歌麿が手がけた傑作「雪月花」の一つ「吉原の花」。時期になると吉原には桜が運び込まれ、人々は花見に興じた。吉原で生まれ育った葛重もこのような景色を見ていたのだろうか。

「吉原の花」(部分) 高橋錦模製画、栃木市蔵、橋本江戸時代(寛政3~4年、1791~1792)頃、紙本着色、橋本「大工」の筆、二宮美術館蔵、江戸時代、コレクターのコレクション。



# 大江戸四才人絵詞

狂歌、黄表紙などが流行した天明、浮世絵が流行し始める寛永。葛屋重三郎はそれら生み出す天才たちの旗手となった。  
文／上永哲矢 絵／菊池さしみ（北伐）

## 葛

重こと葛屋重三郎の経歴を知るに際し、まずもって驚かされるのが、江戸吉原で生まれたことではないだろうか。その年——寛延三年（1750）は、江戸時代の真ん中を過ぎたところ。天下泰平を謳歌、暇を持て余した武士が金のある町人と親しんで、彼らに和歌や漢詩あるいは狂歌に戯作といった知的な遊びを教えた。その場こそ吉原であった。「あふぎや（扇屋）へ行くので、唐詩せんらい」

唐詩選のような漢籍にも通じる教養がなくては、吉原遊廓では恥をかく——。川柳にそう読まれるほど文化的な場所では葛屋は育った。父の丸山重助は吉原の勤め人で、叔父や義兄が茶屋の経営者。その環境が葛屋に商才や勘を養わせた。人の本音と建前を嗅ぎ分ける能力、人情の機微を察する術も磨かれていっただろう。喜多川家への養子入りを経て、安永元年（1772）、二十二歳の葛屋は叔父の店に初めて本屋を出店。その後、自分でも本をつくるようになり、遊女評判記『一目千本』をはじめ『吉原細見』を出

吉原が生んだ不世出の本屋

# 葛屋重三郎

つたやじゅうざぶろう

寛延三年(1750)～寛政九年(1797)

厚い人望と広いネットワークで  
偉大な作品を世に送り出す

版。人を呼び込むために街の行事を企画するなど精力的に活動した。この若き才人には、自分が吉原を背負って立つというぐらゐの気概があったのではないか。天明三年（1783）、日本橋に進出して「耕書堂」を開業する。山東京伝、朋誠堂喜三三らの洒落本、恋川春町らの黄表紙に喜多川歌麿、東洲斎写楽の浮世絵などを次々と世に送り出す。だが寛政九年（1797）に四十八歳で没。実子はなく、彼の店を継いだのは番頭の勇助であった。正法寺にある墓碑には「其の巧思妙算、他人の能く及ぶ所にあらざるなり。遂に一大賈（大商店）をなす」と石川雅望による銘文から人となりが読める。人間が感情をさらけ出すミステリアスな場でもあった吉原。余人からみれば、その街を知り抜く葛屋もミステリアスな存在だったであろう。「江戸のメデア王」という後世の評も言いえて妙。だが、その素行に芸術家肌の様子はあったろうか。彼の実像は実直に生きた人で、人を樂します術に長けた本屋の主人であったということに尽きるのではないか。





## 父

は伊勢から深川に出てきた質屋。その質屋の長男として生まれたのが京伝だ。蔦重と同じ江戸生まれ、遊廓育ち。ただ大きく異なるのは、京伝が生まれた深川（江東区）の岡場所是非公認の私娼屋が集まった遊郭だった。

格式があり敷居も高い吉原に対し、手軽に遊べる深川とでは客層にもかなりの違いがあった。後年、吉原の花魁おいらんを二度も身請けして妻にしているように、だからこそ吉原には生涯にわたる執着があったのかもしれない。

幼くして御家人（武士）の行方角太夫に手習いを受けたが、このとき父から貰った文机を生涯にわたって愛用した。「耳もおち足もくじけてもろともに世にふる机なれも老いたり」と、晩年には耳が遠くなり、足腰も弱った自分をこの机に例えている。仲間との飲み食いも常に割り勘。派手に遊ぶ一方で、普段は儉約に努めていたらしい。

意外にも、最初は絵を志していたようだ。浮世絵師の北尾重政に師事して絵を描いている。早くから文才と画才を発揮

蔦重とコンビを組んだクリエイター

# 山東京伝

さんとうきょうでん

宝暦十一年(1761)～文化十三年(1816)

黄表紙、滑稽本、随筆に留まらず、  
挿絵まで手がけるマルチな才能

し、黄表紙『開帳利益札遊合』の挿絵を描いてからは戯作者として本文をも書くようになる。二十歳過ぎの天明二年（1782）、蔦屋重三郎と知り合い、彼の手引きで吉原に遊ぶ。『手前勝手御存知商売物』で大田南畝にも認められた。黄表紙、合巻、洒落本、滑稽本、狂歌、俳句、随筆などほぼすべての文学に通じ、幼い頃から音曲を習い磨いた才能も如何なく発揮。その後も蔦重とは一緒に日光・中禅寺に旅行するなど親交を深めた。江戸一ともいえる売れっ子になるが、黄表紙の絵が原因で過料処分。戯作をやめようと思いつく京伝を思いとどまらせたのが、ともに処分を受けた蔦重だった。入門を志願してきた曲亭馬琴（滝沢馬琴）の頼みを断るもそばに置き、蔦重に紹介して蔦屋に奉公させるといったこともしている。寛政五年（1793）、銀座に煙草入れの店「京屋」を開業。煙草入れを主軸にみずからデザインした煙管きせるを売る。包装紙を絵巻にし、キャッチコピーを綴るなど画期的な商売でも客を喜ばせた希代のアイデアマンでもあった。

**葛**

屋重三郎の本名と同じ喜多川（北川）姓を名乗っていた歌麿。葛重は丸山家から養子入りした人だったが、歌麿がどこに生まれたのか、最初から江戸にいたのか、どこからか流れて来たのか。まったくの不明である。年齢は葛重と三歳ほど離れていたともいわれ、その活躍の時期から十歳程度の差があったともいわれる。ともかくも安永の終わりのころから天明のはじめ、歌麿は葛重の宅に居候していたというから、ほぼ身内に近い立場だったのではないだろうか。

山東京伝が葛重と知り合った天明二年（1782）、歌麿もようやく世に出てくる。その秋、上野の忍が岡（現在の上野公園）で戯作者たちが集まり会合を設けた。大田南畝、恋川春町、明誠堂喜三二など錚々たる面々であったが、当の歌麿はまだ無名。葛重が歌麿を売り出すために仕掛けた宴だったとも噂される。彼らの集まりで名乗っていた狂歌名は「筆綾丸」。『葛唐丸』と名乗った葛重とは、まるで兄弟のような匂いすら感じさせる。ただ歌麿の才能は、戯作よりも絵描きと

美人画の大家。春画にも傑出

# 喜多川歌麿

きたがわうたまろ

宝暦三年(1753)? ~ 文化三年(1806)

葛重の元、当世最高の美人画で  
一時代を築いた売れっ子絵師

して發揮されており、大田らが出した狂歌集などに挿絵を描くようになる。

天明六年（1786）、葛重から狂歌絵本として『絵本江戸爵』が出ていた。

歌麿が描いた絵に狂歌師らが賛を寄せるもので、これまでもとは逆の発想から生み出されたものであった。葛重は以後、狂歌師側から製作費をもらい、言ってみれば同人誌のようなかたちで出版物を次々と発刊するようになるが、歌麿はそれらの挿絵を一手に引き受けている。『画本虫撰』『潮干のつと』『銀世界』などである。

寛政期になると、葛重は歌麿に美人画を描かせてプロデュースする。全身像はもちろん、ことに首から上をメインにした「大首絵」が画期的で人気を博した。背景を省略して表情や内面の感情をも窺わせる、それまでの常識を打ち破るものであった。以後、歌麿といえは美人画。そして春画である。吉原育ちの経験に裏打ちされた肉感たっぷりの春画。ことに明治時代にやってきた外国人たちの心を掴み、春画を指して「ウタマロ」と称されるほどの代名詞になった。

特集  
大江戸四才人絵詞





## 東

洲斎写楽とは何者か……。彼は  
葛重や歌麿以上に謎のベールに  
包まれた存在である。確実にいえるのは、  
その活動は寛政六年（1794）五月か  
ら翌寛政七年（1795）一月までの約  
十カ月に限られている。その数も一四五  
点ほどが確認されているに過ぎない。そ  
の版元はほぼ葛屋重三郎。彼が見出した  
お抱え絵師というべき存在である。表情  
もポーズもダイナミックかつデフォルメ  
された大首絵。それは後世の人が江戸時  
代の絵を想像するに真っ先に連想してし  
まうほど強烈なインパクトを残した。  
だが当代においてのウケは悪かった。  
売れなかった。歌舞伎ファンより何より、  
描かれた側の役者が嫌ったのだという。  
大田南畝は「これは歌舞妓役者の似顔を  
うつせしが、あまり真を画かんとてあら  
ぬさまにかきなさせし故、長く世に行は  
れず一兩年にして止ム」（『浮世絵類考』）  
と評した。役者としては自分を美化して  
くれば良いのに、欠点までもくつきり  
浮かび上がらせては困るというのだ。  
これが良くも悪くも短期で活動を止め

大首絵で絶大なインパクトを残す

# 東洲斎写楽

とうしゅうさいしゃらく

生没年不詳

10カ月というわずかな期間で  
時代を騒がした謎多き天才

た理由とも思われるが、わざわざ南畝が  
批判したぐらい人々の印象に残ったのも  
事実であろう。

写楽の素性。その手がかりを示す史料  
の一つが斎藤月岑（1804～187  
8）が記した『増補浮世絵類考』にある  
「俗称斎藤十郎兵衛、八丁堀に住す。阿  
州侯の能役者也」というものだ。蜂須賀  
家の記録には、確かにその名前の能役者  
がいたことや、十郎兵衛の菩提寺とされ  
る法光寺の過去帳に文政三年（182  
0）三月七日に五十八歳で死去したこと  
が記されている。いったい十郎兵衛とい  
う人が本当に絵描きの写楽であったのか  
だろうか。

写楽はどこへ消えたのか。若くして急  
死した説、歌麿あるいは京伝、北斎あた  
りが画風を変えて偽名で描いた説。ある  
いは唯一の版元である葛重自身が写楽と  
して筆をとったのではないかという説：  
「古くからさまざまに検証されてきた。  
いずれにせよバイト感覚や片手間に描け  
るレベルの絵ではないことが、余計に後  
世の我々に首を捻らせる理由であろう。」



写真は、軽井沢での弊社施工例及び建売物件

### 絶妙なバランスで日々を感じられる特別な場所。

軽井沢は、東京から1時間強の郊外住宅としてより良い自然環境とインフラの中、充実した生活が送れる特別な場所。

昨今、オフィス以外でも柔軟に働くテレワークが注目されています。

時間や場所にとらわれないからこそ、充実したライフスタイルが送れる軽井沢。

そして今、郊外の理想をかなえる住宅がリーズナブルな価格で取得できます。

最適な住処に軽井沢への移住がおすすめです。

SEARCH ログリゾート

GO



株式会社ログリゾート  
〒223-0053 神奈川県横浜市港北区綱島西 2-9-5

0120-922-994  
FAX 045-545-4156

軽井沢・ハレ島にモデルハウス付。詳細はHPをご覧ください  
URL <http://www.logresort.co.jp/>



## 第一章

寛延三年(1750)～寛政三年(1791)

# 葛屋重三郎 吉原より頭角を現す

江戸のメディア王、葛屋重三郎は吉原に生まれ育つ。  
その吉原のガイド本をはじめ、一気に名編集者へとほり詰めるが、  
幕府の政策による規制の手が徐々に忍び寄る。

文／上永哲矢(P18～P37)、阿部文枝(P38～P51)

寛延三年(1750)

重助と津与の子として、江戸吉原に生まれる

宝暦七年頃(1757)

喜多川家の養子になる

安永元年(1772)

吉原大門口五十間道の葛屋次郎兵衛の軒先にて貸本屋を営む

安永三年(1774)

初の刊行物となる遊女評判記『目千本』を刊行

安永四年(1775)

吉原細見『籬の花』を刊行

天明元年(1781)

黄表紙『身貌大通神略縁起』を刊行。

歌麿との最初のタッグとなる

天明三年(1783)

『五葉松』刊行し、以降吉原細見を独占。

通油町へ移転

天明五年(1785)

狂歌会を催し『狂歌百鬼夜狂』を刊行

天明八年(1788)

『画本虫撰』を刊行

寛政三年(1791)

山東京伝の洒落本三作が発禁処分となり、

葛重も身代半減の処分を受ける



### 『恒例形間違曾我』

いつものかたまちがいそが

奥に座るのは、この本の作者である戯作者の朋誠堂喜三二。ここには彼から本作を手渡される葛屋重三郎の姿が描かれている。黄表紙では時折、作者や版元などが、巻頭や巻末に登場することがある。

喜三二作 北尾重政画 天明2年(1782)  
国立国会図書館蔵

寛延3年

1750年

江戸最大の遊廓で産声をあげた葛屋重三郎

# 葛屋重三郎、吉原に出生

大江戸・吉原に生を受けた葛屋重三郎。詳しい記録がなく、極めて不明瞭かつ、おぼろげな彼の前半生だが、江戸の政情や吉原の状況から様子を炙り出してみよう。



七歳のとき父母が離婚  
喜多川家に養子入りする

葛屋重三郎が生まれた寛延三年（1750）は桜町上皇が崩御し、翌年には大御所・徳川吉宗（八代將軍）が六十八歳で世を去っている。

さほど特筆すべき事件もない、江戸時代のうちでも平和な時期といえた。

葛重の父は丸山重助。だが、この人については尾張出身という以外、よくわかっていない。吉原に住み込みで働く奉公人だったとみられる。母は江戸の人で旧姓は広瀬、名は津与という。この両親の間に生まれた子が柯理<sup>からまる</sup>、のちの葛重であった。兄弟がいた形跡はない。葛重が七歳を迎えた年、両親が離婚。津与は家を出て行き、母と別れて暮らす寂しさを柯理は後年、述懐している。

柯理は尾張屋という引手茶屋を営

## 『青楼絵抄年中行事』

せいろうえいしゅうねんじゅうぎょうじ

四季折々の吉原の風俗を喜多川歌麿の絵を交えて伝える。享和4年(1804)正月、上総屋忠助刊。十返舎一九著、喜多川歌麿画による吉原の風俗絵本。上下2巻。妓楼内の賑わいの様子を伝える。

十返舎一九著 装屋歌麿(喜多川歌麿)筆  
享和4年(1804) 国立国会図書館蔵



## 『伊達模様見立蓬萊』

だてもようみだてほうらい

薦重が初期に出した黄表紙の一つ。その最後の一コマに描かれる舞台の幕を開けるのは、薦重本人とみられる人物。黄表紙は大人向けパロディ漫画的な書で薦重は10点刊行した。

安永9年(1780) 国立国会図書館蔵



大の要慎



## KEYWORD

### 『吾仏乃記』 あがほとけのき

江戸の戯作者・曲亭馬琴こと滝沢興邦(おきくに)が刊行した5巻5冊の書。滝沢家の家父として、子孫の繁栄を願って綴った家の記録(家記)である。馬琴(1767年生まれ)は一時期、薦屋にて働いていた。

### 引手茶屋 ひきてちやや

吉原遊郭や深川などの岡場所、遊客を遊女屋に案内するために置かれた茶屋。遊客を遊女屋へ送り迎えしたり、酒宴を世話した。一流の妓楼(遊女屋)は直接に客を店に上げず、必ずこの茶屋を通すしきたりがあった。

む叔父(姓は喜多川)に引き取られる。その喜多川家に養子入りして丸山から喜多川へ改姓。「薦屋重三郎」なる通称の由来も明らかではないが、養子入り後そう名乗ったと思われる。「耕書堂(薦重)の主人に叔父あり。尾張屋と云い、新吉原仲の町なる。七軒第一の茶屋にて。其の家すこぶる富り」と、のちに曲亭(滝沢)馬琴が『吾仏乃記』に記している。薦重はそんな繁盛していた叔父の家に住んだ。吉原で相応の妓楼(遊女屋)で遊ぶ客は、まず妓楼とつながりのある引手茶屋で酒など飲み、それから妓楼へ通された。よほど上客や馴染みの客でなければ例外なく、教養ある武士階層や富裕層、いわゆる「通人」も茶屋の暖簾をくぐった。珂理はそんな環境に暮らし、人付き合いの法や商才を磨いたのであろう。



葛重が喜多川家に養子入りしてまもない頃

# 徳川家治、将軍に就く

喜多川家に養子入りした葛重が十歳を過ぎた頃の宝暦十年(1760)、江戸城にて将軍が交代。九代将軍・家重が隠居して大御所となり、家治が十代将軍の座に就いたのである。

## 徳川家治

元文2年(1737)～天明6年(1786)。第10代将軍。徳川家重の長男。母は梅沢通条の娘・梅沢幸子(至心院)。田沼意次を老中に任命し幕政を任せてからは将棋などの趣味にふける機会が増える。

『徳川家治画像』東京大学史料編纂所蔵模写

名高き田沼時代をつくった  
当代の将軍の素顔とは

宝暦十年(1760)の五月三日、

父・家重の隠居によって徳川宗家の家督を継ぎ、十代将軍に就任した徳川家治。ときに二十四歳。大御所となった家重が、その翌年に五十二歳で亡くなり、いわゆる大御所政治という二頭体制が布かれることもなかった。

彼の祖父は徳川吉宗(八代将軍)

である。祖父から可愛がられて英才教育を施され、幼くして聡明さを発揮していたという。筆で紙に堂々と「龍」の字を書いたはいいが、大きく書きすぎて紙の外の畳に点を書いたという。それを見た吉宗たち周りの者は「大器なり」と喜んだというエピソードがある。

そうした教育の甲斐あって家治は剣術・槍術・弓術・馬術に熟達し、

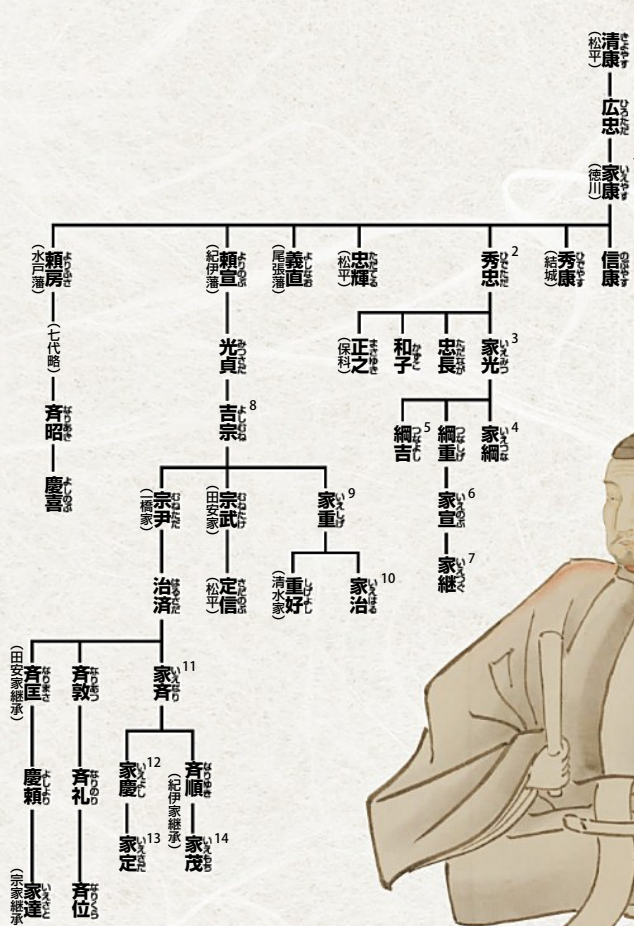
吉宗が好きだった鷹狩りにもよく出るなど文武両道の名君へと成長する。将軍の座に就いた家治は老中・松平

武元を呼んでこういった。

「余は父の多病で不幸にして将軍になったが、若年で国政に習熟していない。何事にも気がついたことがあれば言上し、もし間違いがあれば諫言してほしい」と。吉宗のもとで三十年も国政を担ってきた武元は、その言葉通り安永八年(1779)に亡くなるまで家治を支えた。

その後、家治は彼に代わって田沼意次を起用する。すでに家重の代から本丸に詰め、一万石の大名となっていた意次を家治はさらに重用。最盛期には相良藩五万七千石の大名となった。明和四年(1767)に側用人、さらに安永元年(1772)には老中に昇進と、約三十年に及ぶ「田沼時代」が始まった。

## 徳川氏(将軍家)略系図



## 江戸城

家康から慶喜まで徳川将軍家15代の居城だった江戸城。明暦の大火(1657)により天守はじめ城構の多くを焼失。天守は再建されず、伏見城の櫓を移築したとされる富士見櫓が天守の役割を担った。

写真／PIXTA

将軍の代替わりを経て  
華やかな田沼時代が到来する

### KEYWORD

松平武元 まつだいらたけちか

1713?～1779。常陸国府中藩の第3代藩主・松平頼明の次男。上野国館林藩2代藩主に養子入り。延享4年(1747年)に老中、明和元年(1764年)に老中首座。吉宗、家重、家治の3代の将軍に仕え「西丸下の爺」と呼ばれた。

田沼時代

田沼意次が政治の実権を握った明和4年(1767)から天明6年(1786)までの時期。田沼意次は徳川家治の側用人から老中となり、幕府の財政難を立て直すために商業政策や貿易拡大政策を推進した。

安永元年

1772年

明和から安永へ。二十歳を超えた蔦重の躍動

# 吉原にて耕書堂、開店

江戸時代の元号は、じつに目まぐるしく変わる。寛延から宝暦、明和そして安永。その安永を迎えると同時に、蔦重は商売人として本格的に歩み始めることとなるのだ。

## 『吉原細見五葉松』

よしわらさいけんごようまつ  
蔦屋重三郎が天明3年(1783)に刊行した吉原細見。この頃には蔦屋が独占販売していた。吉原の客向けのガイドブックで、実用的かつコストカットがはかられている。大門前に並ぶ店の一つに「さいけん版元本屋・蔦屋重三郎」の名がはっきり見える(赤枠)。  
天明3年(1783) 国立国会図書館蔵

義兄の店の一角において  
耕書堂がスタートする

安永元年(1772)、蔦重は念願といふべきか、初めての店「耕書堂」を出した。この年、数え二十三歳。……とはいっても、まだ独立店舗ではない。場所は吉原大門の外側、五十間道という吉原の出入口。その通りに並ぶ店の一軒が義兄・蔦屋次郎兵衛の店で、その一角を間借りするといふものであった。「蔦屋」を名乗った彼は、その時点で曲がりなりにも吉原の店舗経営者の一人に名乗りを上げたことになる。なればこそ、とうに自立していた歳であるし、義兄の店の手伝いではなく自身の店を持つことが認められたのであろう。その店は「耕書堂」の名が示す通り、本を扱う店であったと思われる。といても現在の書店のように販売が

メインではない。当時、書物の値段はモノにもよるが、おおよそ三〇〇文(数千円)。蕎麦十六文、銭湯八文の時代。大工の日給より高いものもあり、有料で貸す「貸本屋」が寛永の初め頃からあって、印刷技術が発達した江戸では流行りの商売だったが、間借りのお店ではそれほど多くの本が並べられたとは思えず、蔦重はほかに稼ぎの手段を得ていたものと思われる。

そもそも「蔦屋重三郎」の名前が初めて資料に出てくるのは、安永三年(1774)刊の鱗形孫兵衛版の吉原細見『細見鳴呼御江戸』である。吉原細見とは吉原情報を一冊に盛り込んだガイドブックだ。その中には妓楼(遊女屋)とそこに所属する遊女、その揚代金、遊客と遊女屋を取り結んでいた引手茶屋や舟宿、また吉原所属の芸者の一覧などがまとめて掲

載されていた。

誰しも、どこにどの遊女がいるのか知りたいはず。吉原で遊ぶ客には重宝がられ、好んで買い求める人が多かった。安いので簡素な吉原土産にもなった。当時、正月と七月の年二回、内容を改訂した新版が発行される決まりであった。先の『細見鳴呼御江戸』は鱗型屋が発刊したものだが、奥付にあたるところに「蔦屋重三郎」の名があり、その「改め」および「卸し」に彼が携わっていたことがわかる。「改め」は、吉原の妓楼に所属する遊女の名前や格付けを一軒一軒、取材するといった重要な仕事であった。この手間をかけずしては「吉原細見」は意味を成さぬものとなる。蔦重が確かにこうした仕事に関わっていたのが明らかなのは、彼の前半生の動静を探るうえで貴重な手がかりである。

「吉原細見」制作にも携わる  
耕書堂経営のかたわら、

### 『画本東遊』

えほんあずまあそび  
葛飾北斎画の『画本東都遊』に「蔦屋耕書堂」という名の店先が描かれている。これは後年、独立した見世。蔦屋重三郎の名前入りの看板、山東京伝の著作や狂歌本の宣伝が並ぶ。

葛飾北斎画 享和2年(1802)  
東京都立図書館所蔵



### KEYWORD

安永 あんえい

明和の後、天明の前で、1772年から1781年までの10年。この時代の将軍は徳川家治、天皇は後桃園天皇、光格天皇。明和9年(1772)11月 改元した。3年、杉田玄白らが『解体新書』を刊行。8年、平賀源内が没している。

地本問屋 じほんどんや

寛文期(1661~1673年)に始まった地本を制作、販売した問屋。地本とは江戸で出版された大衆本の総称。洒落本・草双紙・読本・滑稽本・狂歌本など。草双紙(赤本・黒本・青本・黄表紙・合巻)があった。蔦屋もこれにあてはまる。



## 江戸三大大火の一つ

# 明和の大火

「火事と喧嘩は江戸の華」といわれた江戸時代。吉原も頻繁に火災に見舞われていたが意外な裏話もあった。

江戸時代にあたる二六七年間に、江戸ではじつに九十回もの大火が発生したという。同時代に京都や大坂でも火災が起きているが、十回に満たない。人口の爆発的增加に伴い、火事は避けられぬ災害といえた。

江戸城の天守をも焼き尽くした明暦の大火（1657）は、吉原と関わりが深い。そもそも吉原遊廓は江戸幕府が開府されて間もない元和三年（1617）、日本橋葺屋町（ふきやちやう）現在の日本橋人形町）に造られた。しかし、この大火で街は全焼し、浅草方面の日本堤に新たな吉原ができたという歴史があった。

葦重も見聞したのであろう明和の大火（1772）は、先の明暦や文化の大火（1806）と合わせて「江戸三大火事」と呼ばれるほど大規模な火災であった。二月二十九日午後、



### 光明寺の『明和の大火死者供養墓』と目黒大圓寺石仏群

右／光明寺（港区虎ノ門）の過去帳には、明和の大火で境内に避難した男女90人が焼死、寺の諸堂も残らず焼失したとある。左／出火元となった大圓寺で供養のために作られた五百羅漢の石仏群。



## 『目黒行人坂火事絵巻』

めぐろぎょうにんざかかじえまき

明和の大火(目黒行人坂火事)による  
すさまじい被害の様子を描いたもの。  
燃える屋根に梯子をかけ、火消たち  
が人々を救おうと、果敢に猛火に挑  
む様子が見える。

国立国会図書館蔵



火事で何度も焼けていた吉原  
焼けたことでメリットもあった？

目黒行人坂の大円寺(大圓寺)から  
出火し、火は麻布・芝から江戸城郭  
内・京橋・日本橋・神田・本郷・浅  
草などに延焼、千住まで達した。  
死者一万四千七百人、行方不明者  
は四千人を越えたといい、老中にな  
ったばかりの田沼意次の屋敷も類焼  
している。そして、この火災をきっ  
かけに元号が明和から安永に改めら  
れたほど、影響の大きな火災だった。  
幸いにも吉原に大きな被害はなかつ  
たようだが、これに前後して二回  
(1768年、1787年)、吉原  
は大火に見舞われている。遊郭の営

業が始まって明治維新まで、およそ  
十年に一度の割合で吉原は全焼した。  
遊女による放火も多かった。ただ意  
外にも、焼けることでメリットもあ  
ったという。建て替えの間、妓楼は  
江戸市中の民家などを「仮宅」とし  
て臨時営業をすることが許可された  
からだ。仮宅での営業は格式や伝統  
にとらわれず値段も普段より安く設  
定され、客がどっと押し寄せたのだ  
という。それで店も儲かる。普段行  
けない近所の寺社に参詣し、花火見  
物や銭湯などで東の間の自由を喜ぶ  
遊女らもいたというのである。

安永3年

1774年

葛屋重三郎、初の遊女評判記

# 『一目千本』の発行

吉原に店を開いてから二年後、葛屋としては初めてとなる出版物を世に送り出すこととなる。それは安永三年七月のことであった。

吉原の人間ならではの試み  
一癖ある遊女評判記の出版

「一目千本」といえば、安土桃山時代の豊臣秀吉の花見を思う人もいるだろう。吉野の高台から眺める桜の見事なことをそう呼んだという。

江戸吉原において出版業を始めた葛屋は、自身が初めて刊行した書物にその名を付けた。安永三年（1774）七月刊の『一目千本』のことで、当時の一流画家・北尾重政に筆による画をメインにした絵本である。大胆にも、吉原の遊女を花に見立てるという、吉原の人ならではの発想に基づくものであった。そのうえ、当の吉原から発刊された初めての出版物であり、その点で画期的といえた。中身は、挿花の絵に遊女の名を添えたかたちで遊女の評判、イメージを伝えるものとなっている。ただし、



安永3年(1774) 大阪大学附属図書館所蔵 出典: 国書データベース

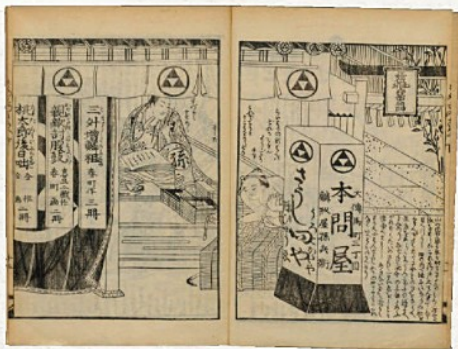
『一目千本』 ひとめせんぼん

書店を開きつつ出版業を始めた葛屋重三郎が初めて出版した本のタイトルは『一目千本』。奥付には、確かに版元である彼の名前と住所(新吉原五十間)、画家・北尾重政の名がはっきり記されている。



## 鱗形屋 うろこがたや

鱗形屋は江戸の大伝馬町三丁目にあった地本問屋。鱗形屋孫兵衛という店主が経営、噺本・仮名草子・絵本や浄瑠璃本などを手広く扱っていた。『吉原細見』も鱗形屋のものが評判で一時期は独占販売していたが、次第に家業が衰えて没落した。細見は鳶屋が引き継ぐような形に。



## 『三枿増鱗祖』 みますますうろこのはじめ

江戸中期の戯作者で江戸で大ブームを起こした「黄表紙」の創始者とされる恋川春町による絵本。版元である「鱗形屋」と、その隣にあったもぐさ店「三升屋」を宣伝するPR本ながら馬鹿売れした。

恋川春町画 国立国会図書館蔵

# 記念すべき鳶重最初の刊行 花の吉原を体現する形の一冊

具体的に文字で「評判」を書いたものではなく、見る人が感じるに任せるに過ぎず、その数も限定的で当時の遊女が網羅されているわけではないので『吉原細見』のような実用性には欠けた。これは、おそらく掲載を希望する馴染み客や妓楼、あるいは遊女本人から出資を募るかたちで発刊された遊びに近く、記念誌的な性質のものであったといえよう。

翌安永四年（1775）三月にも、

鳶重は『急戲花之名寄』という遊女評判記を出した。吉原では三月の行事の桜に合わせてかたちの行事をこの年に復活させており、その機に合わせて発行したものと思われる。よって吉原に通う通人、吉原ファンにはいずれも好まれたのではないか。これらの読み物からは『吉原細見』とは別角度からの独自の試みで「おらが街・吉原」を盛り立ててやろうという鳶重の気概を見ることができると

## KEYWORD

### 遊女評判記 ゆうじょひょうばんき

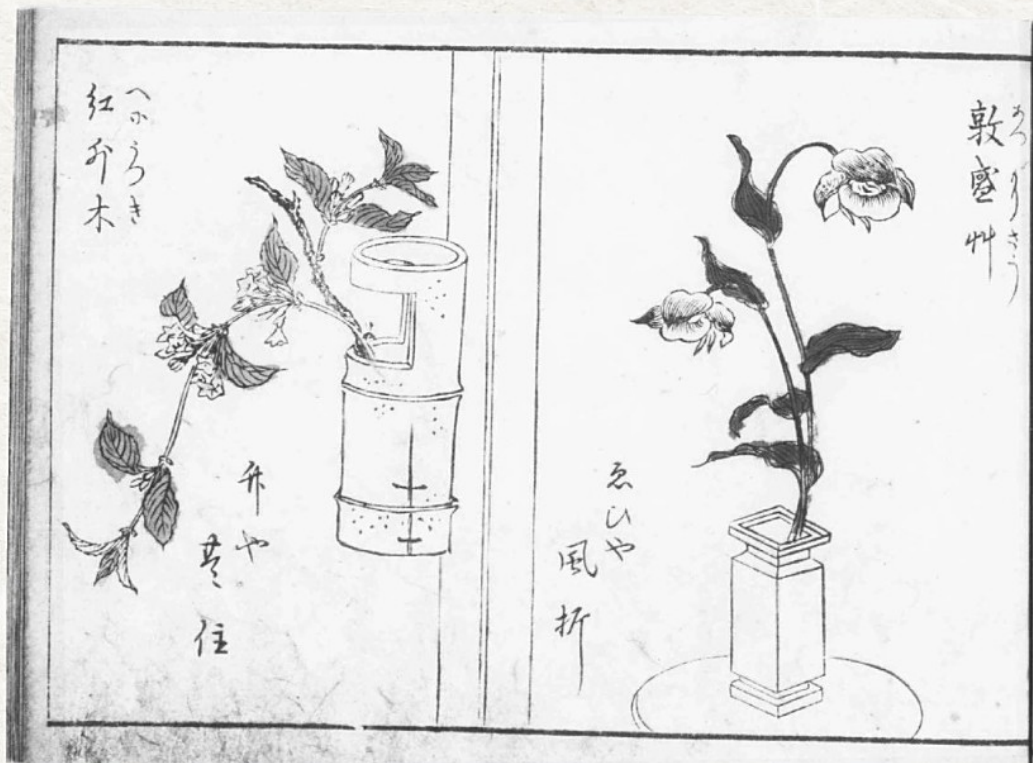
京都・島原、江戸・吉原、大坂・新町の各遊廓の遊女の容貌や技芸などを品評した書。江戸前期に述作され出版された。遊女の名簿としての実用性は吉原では「細見」に受け継がれた。鳶重の『急戲花之名寄』もそれに倣った内容。

### 「急戲花乃名寄」にわかはなのよせ

「急戲（にわか）」とは毎年8月に吉原で行なわれる即興の寸劇・俄狂言（にわかきょうげん）を指す。その開催に合わせて作られたか。内容は、遊女の紋の入った提灯と桜花の絵とともに、その遊女の評が記されている。

### 桜

平安時代の国風文化の影響以降に、桜は観賞用途（花見）で花の代名詞とされるほど特別な位置を占めるようになった。江戸時代にはカンザンなどの多種のサトザクラ群やソメイヨシノ（染井吉野）などが生まれている。

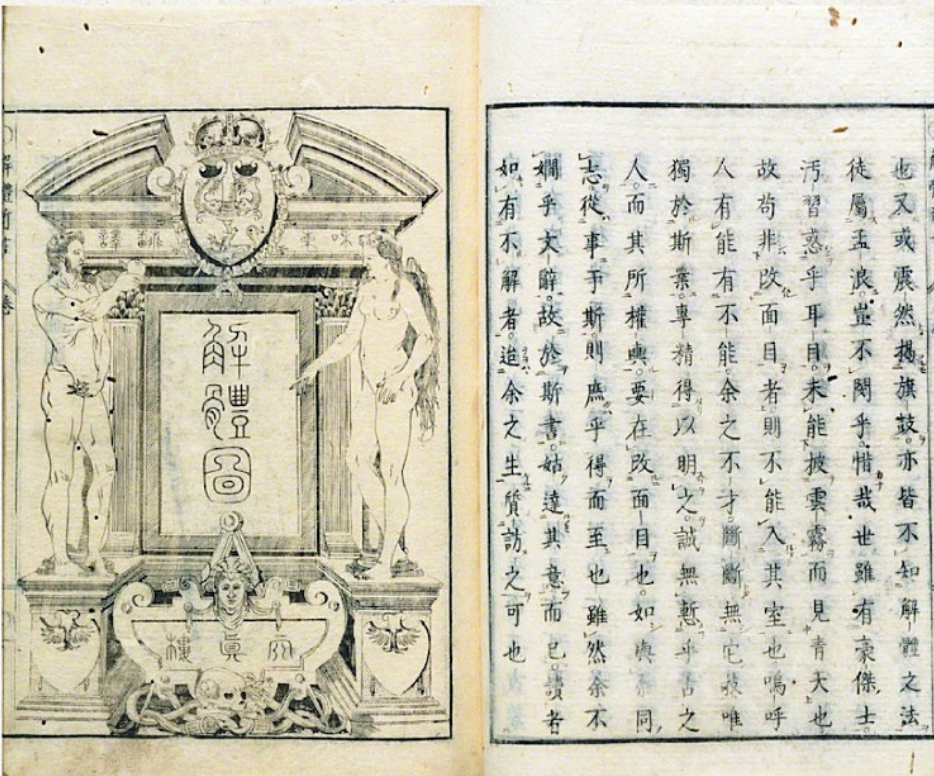


『一目千本』とは、文字通り一見して1000本、つまり数えきれないほどの花を見渡せるという意味を持つ。百合や菊、ばたん、水仙、ききょうなどの花々が花器に生けられているさまは遊女の擬態である。

## 近代化学が次々導入

# 蘭学の発展

薦重と同時代を生きた人物に『解体新書』の出版で知られる前野良沢や杉田玄白がいる。医師・蘭学者である彼らの業績とは。



### 『解体新書』

一般に『ターヘル・アナトミア』の翻訳書といわれるが、単純な逐語訳ではなく杉田玄白らの手で再構成された医学書で『トンミュス解体書』『バルシトス解体書』『ミスケル解体書』などが参考にされている。

杉田玄白著 小田野直武画 安永3年(1774)  
東京富士美術館所蔵(東京富士美術館収蔵品データベース)収録



### 前野良沢

1723~1803年。豊前国中津藩(大分県中津市)の藩医、蘭学者。長崎留学で入手した『ターヘル・アナトミア』を和訳し、杉田玄白らと協力して『解体新書』を出す、そのなかに自分の名を出さなかった。

『医家先哲肖像集』 国立国会図書館所蔵



### 杉田玄白

1733~1817年。若狭国小浜藩の藩医。前野良沢や中川淳庵らと『ターヘル・アナトミア』を和訳した『解体新書』を出す。後年、回想録として『蘭学事始』を執筆し前野良沢らの業績を伝えた。

『蘭学事始』 国立国会図書館所蔵

### 『目千本』と同年の安永三年に完成した医学書

「五臓六腑」という言葉があるように、江戸時代の日本医学は古代中国の東洋医学に基づいた伝統的な考えが主流であった。

それが変わるきっかけとなったのが蘭方医の杉田玄白・前野良沢・中川淳庵らによる西洋の解剖書『ターヘル・アナトミア』との出会いであった。同書を見た彼らは、自分らが知る人体や医学の知識に違和感を覚え、明和八年(1771)に実学を試みる。すなわち、当時の処刑場であった小塚原刑場で罪人の遺体の腑分け(解剖)を依頼、目の前で見学したのである。その結果、彼らは自分たちが学んできた漢方医学が間違っていたことを知る。

「一としていささか違ふ事なき品なり、古来医経に説たる所の肺の六

葉、両耳肝の左三葉、右四葉などいへる分ちもなく、腸胃の位置形状も大に古説と異なり」(『蘭学事始』)

同時に「ターヘル・アナトミア」に描かれた人体の中身、隅々まで記された正確さに感銘を受け、西洋医学の正確性を認め、かの書の日本語訳に挑んだのである。

苦節四年を経たものの安永三年(1774)、この翻訳書は『解体新書』と名付けられ刊行にこぎつけた。藩医まで務めていた玄白であったから、友人で奥医師の桂川甫三に依頼し、彼から將軍・徳川家治に献上された。一方で、前野良沢は第一の功労者ながら、翻訳者に自分の名前を出すことを望まなかった。その翻訳の正確性に納得がいかなかったためとも推測されている。なお、挿絵を描いたのは秋田藩角館の藩士・小田野直武であった。玄白とも親しい平賀源内の紹介であったという。

# 平賀源内

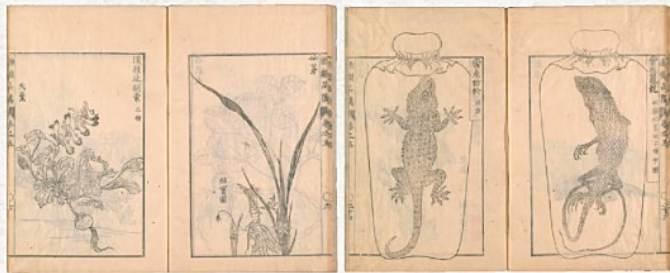
蘭学者・発明家・戯作者と多彩な顔を持つ異才の人。いまひとつ、捉えどころのない人物ながらも同時代に彼の影響を受けた者は少なくなかった。

## 『物類品隠』

ぶつるいひんしつ

宝暦7年(1757)から宝暦12年、江戸で5回にわたる薬品会が開かれた。その薬品会の出品の解説書の形式で源内が上梓した書。中国の百科全書『本草綱目』の分類体系を模し、その批評も込めた内容。

宝暦13年(1763) 国立国会図書館所蔵



杉田玄白は後年に『蘭学事始』を書いて前野良沢ら、多くの同志の功績を後世に伝えた。なかでも平賀源内の扱いは破格で、彼との対話に一章を割いたほどであった。

源内の出自は武士であり、讃岐国寒川郡(現在の香川県さぬき市)の白石家の三男だった。だが二度も脱藩したため、元の高松藩だけでなく、いずれの藩にも召し抱えを拒まれる(奉公構)処分を受けていた。一方で中津川で鉾山開発と石綿の発見など、幕府や各藩の政治にも影響を与えた。男色家で生涯独身を通じたことは余談であるが、薦重の刊行した『吉原細見』に序文を寄せるなど、女色の色濃い吉原とのつながりもあった。源内が残した戯作『根南志具佐』などの影響を受けた者は多く、おそらく出版関係者の薦重もそれに触れていただろう。

## 平賀源内

1728～1779年。戯作者。蘭学者。油絵や鉾山開発など外国文化や技術を日本の政治に取り入れようと奔走。戯作の開祖とされ人形浄瑠璃などに多くの作品を残すが、晩年に殺傷事件を起こし投獄中に獄死。

『肖像』1之巻  
[野村]文紹著 国立国会図書館所蔵

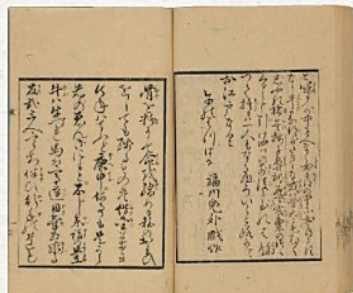
## KEYWORD

### ターヘル・アナトミア

『ターヘル・アナトミア』は、ドイツ人医師ヨハン・アダム・クルムスによる解剖学書のオランダ語訳書の、日本における呼称。1722年にダンツィヒで初版が出版され、のちラテン語、フランス語、オランダ語に訳された。

### 戯作

18世紀後半頃から江戸で興った通俗小説などの読み物の総称。戯れに書かれたものの意味があり、戯作の著者を戯作者という。『風流志道軒伝』など平賀源内は戯作者の祖とされる。当初は大田南畝などの武士階級が多かった。

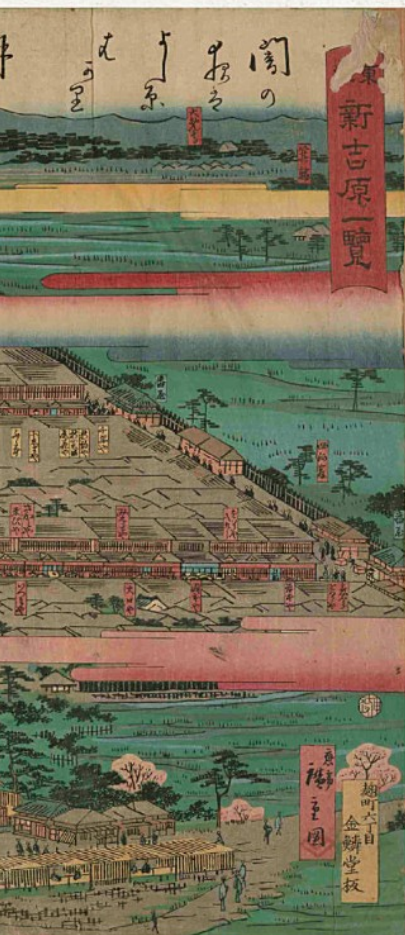


## 「細見江戸御」

さいけんあおえど

安永3年(1774)、薦重が編集長としてかわった初の吉原細見『細見江戸御』。この序文を書いたのが福内鬼外のペンネームを使っていた平賀源内だ。源内と薦重との接点を示す貴重な一書である。

『風来六々部衆』国文学研究資料館所蔵  
出典:国書データベース

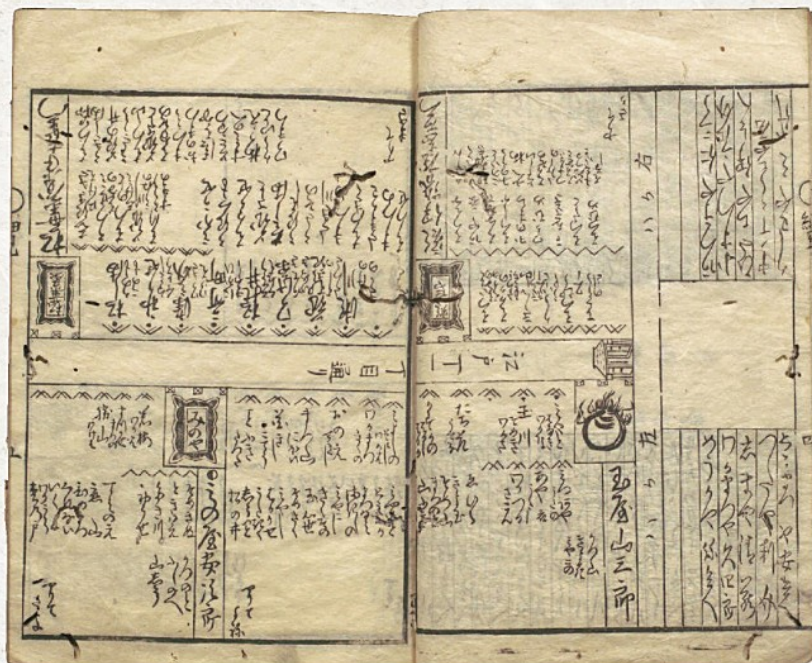


## 『東都新吉原一覽』

どうしんよしわらいちらん

万延元年(1860)刊行の吉原の図。画は歌川広重。街の周囲に柵や堀(お歯黒どぶ)が巡らされていた様子がわかる。最初の蔦屋があった五十間道(曲がり道)も手前に描かれる。

歌川広重(二代目)画 万延元年(1860)  
東京都立図書館蔵



## 『籬乃花』 まぎのはな

鱗形屋の細見に比べ、ひと目で格段に多くの情報が得られる蔦屋版の細見。天明3年の春から細見は蔦屋が出版を独占。天保八年(1837)に蔦屋が株を手放すまで、営業の柱となる。

『新吉原細見・籬の花』 安永4年(1775)  
江戸東京博物館蔵 出典:国書データベース

蔦重版「吉原細見の定着へ」

# 『籬乃花』と吉原

独立以来、順調に商売人として成功への道を歩み始めた蔦重。それを軌道に乗せたのは、足下の仕事「吉原細見」の改良だった。

## 画期的な工夫が施された『籬乃花』の特徴とは

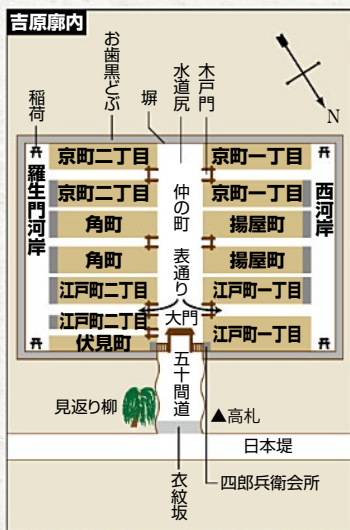
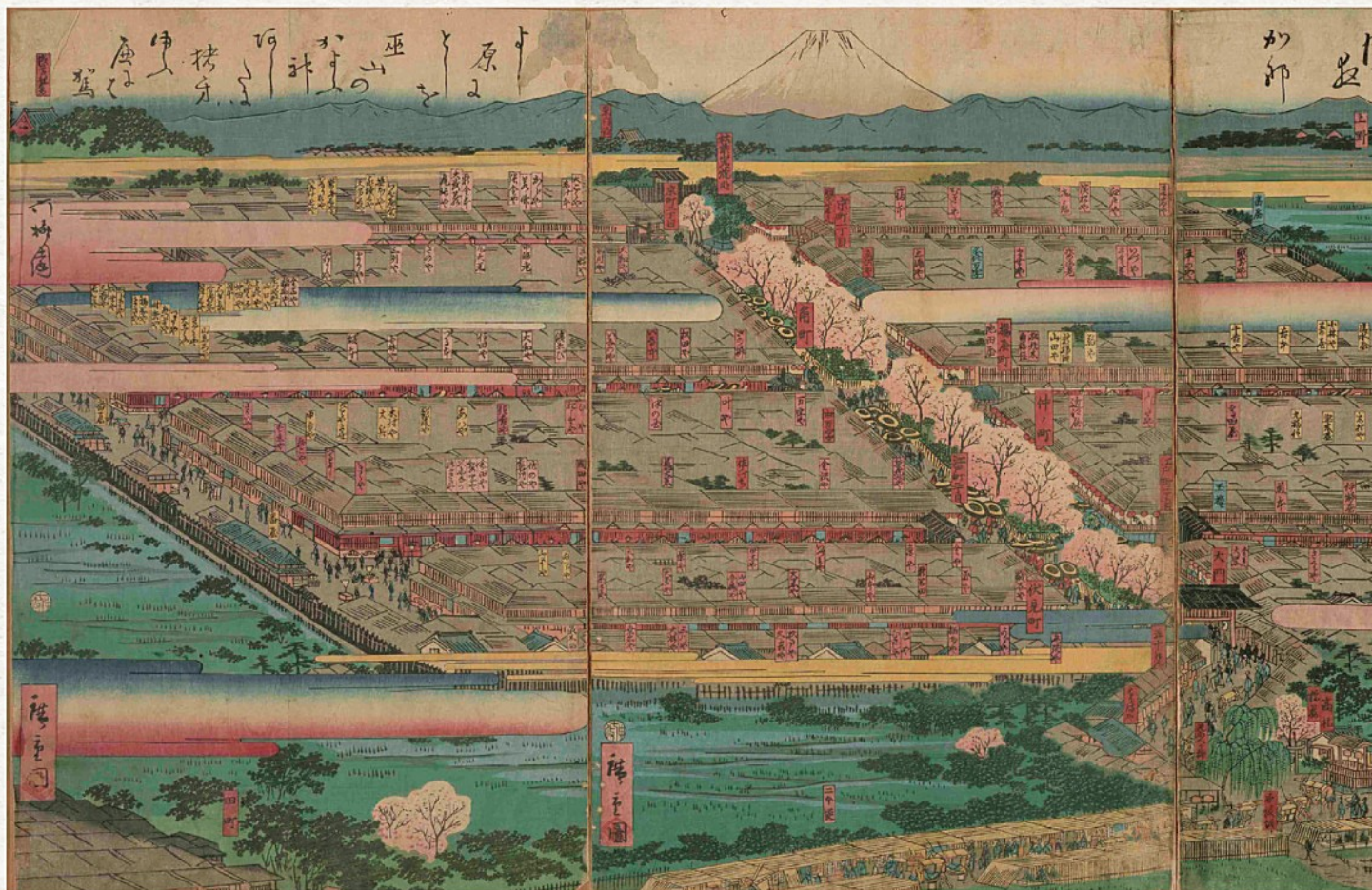
これまでも述べてきた所であるが、安永の初めまでの吉原細見は鱗形屋が販売をほぼ独占していた。吉原のいわば公式ガイドを大伝馬町にあつた版元(地本問屋)が手掛けていたことになるが、当時としては何ら珍しいことでもない。当の吉原にできる人間がいなかったというだけである。神田や湯島の業者が出していたこともあり、長く競合した時期もある。負けて撤退する業者もある中、鱗形屋が勝ち残っていたという状況だった。

その状況を変えたのが蔦重であった。安永四年(1775)の七月に手がけた吉原細見『籬乃花』の出版がその契機である。はじめ、蔦重は平賀源内が序文を書いた『細見嗚呼

御江戸』などの先行本に編集(改め)や卸し・取次というかたちで携わっていた。それが、この年からは蔦屋が直接、制作と出版を手掛けるようになったのである。

その理由は鱗形屋の不祥事にあつたといわれる。同年、大坂の版元が出した本の海賊版が江戸で出回り、その制作に鱗形屋が関わっていた疑いで訴訟問題に発展。処罰を受けた結果、この年の吉原細見を発行する余裕がなくなり、その代わりに手を上げたのが蔦重であった。そして完成したのが冒頭の蔦重版・吉原細見『籬乃花』であった。

この『籬乃花』は売れに売れた。それは鱗形屋版にはなかった要素が多数含まれていたからと考えられる。鱗形屋版は縦型小本でひと見開きに概ね一軒の遊女屋が紹介されていたのに対し、蔦重版は縦型中本つまり、



吉原の見取り図。大門の脇に番所があり、仲の町を真ん中に7つの町があった。

## KEYWORD

岡場所 おかばしよ

幕府公認の遊郭である吉原以外の非公認の遊郭。深川仲町、佃、三笠町、吉田町、入船町、土橋、六間堀、回向院前などにあったが、寛政・天保の改革で品川・内藤新宿・板橋・千住(江戸四宿)を除き、取り潰された。

## 葛重が郷里への思いを込めた 新しい吉原細見が誕生する

ひと回り大きい判型を使う。大きく見やすくなっただけでなく、鱗形版では描かれていなかった通路が描かれ、道をはさんで二軒の遊女屋を掲載した。これで一つの見開きに倍の情報量が入り、また向かい合わせにあった遊女屋を見比べることもできた。必然、約半分の頁数で済み、版木の枚数や紙代が節約できたから大幅なコストカットになった。これに限らず葛重の本の売り上げはまったく明らかにっていないが、粗利も良かったであろう。吉原内部のみならず、江戸中の書店や細見売りも、今までより安い卸値で仕入れられる

となれば飛びついたはずだ。先の『一目千本』で、吉原の有力者の覚えもめだくなっていったであろう葛重。吉原の人間による吉原細見の制作ともなれば、茶屋や商店の者たちも協力的だったに違いない。おりしも、吉原では岡場所に客を奪われないよう、PRや行事の開催に力を入れていた時期でもあり、葛重の活躍はそれと並行して、支持されたものと思われる。かたや鱗形屋は翌年、再び吉原細見を制作するが、やはり葛重版のほうが好評だったよう、ほかの本も振るわず経営不振に陥り没落していく。

業界に新たなジャンルが確立

# 黄表紙本の発展

赤本・青本・黒本と呼ばれた草双紙は子どもの読み物から次第に大人も読むものに変化。そこに黄表紙が登場してくる。

恋川春町のパロディ化は  
何が人の心を惹いたのか

桃太郎や花咲か爺などのお伽噺や民話から始まった草双紙は、次第に広がりを見せ、合戦ものや人形浄瑠璃、歌舞伎などに題材を得たものも出始め、大人も読める内容になる。子ども向けの赤本から枝分かれしたのが青や黒の表紙のものである。

安永四年(1775)、鱗形屋から出た『金々先生栄花夢』は、その草双紙のあり方を一変させた。画作は恋川春町。彼は青本(草双紙)が好きだったと思われ、そこに大人が見て笑えるエッセンスを取り入れてみせた。それでいて、既存の青本などになかった作者の署名入の序文を入れ込むなどの工夫を加えている。さらには作中に筆者・恋川春町自身を彷彿とさせる、あるいは春町そ



『金々先生栄花夢』 きんきんせんせいえいがのゆめ

安永4年(1775)刊行。青年の盧生が宿屋で粟の飯が炊ける間、王となって栄華を尽くす夢を見る中国発祥の謡曲『邯鄲』のパロディ。「金々先生」の「金々」は当時の流行り言葉で、当代の価値観を持ち込んだ所に面白さがある。

国立国会図書館蔵

## 恋川春町(酒上不埒)

駿河・小島藩の江戸留主居役で、本名は倉橋格という。いわゆる上級武士であり、滝脇松平家の年寄本役として藩中枢に関与した。石高は最終的に120石。彼はその有り余るほどの教養を戯作に向けた。

『吾妻曲狂歌文庫』  
北尾政演画 宿屋飯盛撰 天明6年(1786)  
東京都立図書館蔵



草双紙の世界に新風を吹かせた  
恋川春町と朋誠堂喜三二

## 草双紙の色



### 『はちかつきひめ』(赤本)

赤本は、お伽噺などを描いた子ども向きのものとされる。写真は不遇の女の子が苦勞の末に幸せを掴む話。「かつき」は担ぎでなく頭にかぶる意。

国立国会図書館蔵



### 『こく性や合戦』(黒本)

黒本も青本に似るが、歌舞伎など演劇や浮世草子に取材したものが多く。写真は漢字で書くと「国性爺合戦」。鄭成功(国性爺)の物語である。

鳥居清満画 国立国会図書館蔵



### 『臥夜黒牡丹』(青本)

明和6年(1769)、版元は鱗形屋。黒本、青本の違いは内容のほか、その年の新版を青表紙としたなどさまざまある。なお「青」というものの萌黄色。

鳥居清満画 国立国会図書館蔵

のものをキャラクターとして登場させたことである。続く『其返報怪談』や『参幅対紫曾我』にその仕掛けが現れ、読者の笑いを誘った。同じ武士階級の朋誠堂喜三二がこれに刺激を受けて次々と戯作を書いた。彼の黄表紙も同様で、安永八年(1779)刊の『気散次夢物語』も作者・喜三二自身が居眠りしている絵に始まる。今見れば、作者が道化を演じるという技法に目新しさは感じないが、実際、書き手の教養・技量が優れていなかった。だが、これを機に「黄表紙」というジャンルができあがってしまったほど、当時の新機軸となった。

おそらく春町と喜三二は以前から顔見知りで、江戸城だけでなく、吉原でも顔を合わせていたのかもしれない。となれば、吉原の人間がこの流行りに乗らないわけはない。葛重も喜三二の序文入りの『手毎の清水』を出版。これは黄表紙ではないが『一目千本』の版木を利用して華道書に仕立て直したもので喜三二が葛重を盛り立てたのである。これを機に葛重は喜三二の力を借り、戯作出版に乗り出す。安永九年(1780)より黄表紙出版を開始。その作中に版元の葛重も顔を覗かせる作風が定まり、おかげで後世の我々が彼の横顔を垣間見ることができるよう。



東京都立図書館蔵

### 『鵜鵲返文武二道』 おうむがえしぶんぶのふたみち

黄表紙。3冊。恋川春町作、北尾政美画。寛政元年(1789)葛屋刊。松平定信の新政に取材し、改革政治における武士への揶揄(やゆ)した内容から、幕府は春町に出頭を命じたが、病と称し間もなく没した。自害したともいわれる。

安永5年

1776年

かつてないほどの豪華版・細見

# 『青楼美人合姿鏡』

『目千本』『吉原細見』に始まり、吉原の宣伝に力を尽くす葛重。  
安永五年、その進化の極みともいえる吉原本を出版する。

かき屋



春四

## KEYWORD

### 遊女

その多くが身売りという形で吉原にやってきたといわれる。人身売買は禁止されていたので、表向きは奉公という形を取った。女性を遊女屋に斡旋する女衒(ぜげん)が仲介に入り、親族からの申し入れや貧しい農民の娘を探した。

### 遊女の日

午前6時には奉公人が客を起こし、遊女はそれを見送ると二度寝した。10時に起きだし、正午までに身支度。午後4時までが昼の営業「昼見世」。午後6時から「夜見世」。午前2時頃の拍子木で「大引け」となり床に入った。

## 青楼とは？

青楼とは、本来は高貴な人や美女の住む家のことをあらわす。諸人がなかなか近寄りがたい憧れの場所として遊女屋・妓楼のことをあらわし、吉原遊郭そのものを青楼と呼ぶ場合もあった。

## 吉原の遊女たちの日常を 艶やかに描き出した秀作

安永五年（1776）は平賀源内がエレキテルを復元した年。この年に、葛重は吉原の関連本における一つの完成形ともいえる絵本を出した。

それが『青楼美人合姿鏡』。浮世絵師・北尾重政と勝川春章の競作のかたちで、吉原の遊女たちの艶姿を

描いた錦絵本である。大本三冊におよぶもので、料紙も色合いも当時最良といえるものを使った贅の極みといえる本である。記号や文字情報が主であった細見と異なり、手にとった者を唸らせたに違いない。そこには各妓楼自慢の名妓たちが寄り集まり、季節の風物とともに琴や書画、歌、香合、双六、投扇興などの芸ごとや座敷遊びに興じる様子が描かれ

ている。まさに憧れの吉原の妓楼内の日常がそこにある。上客といえども、こうした日常は妓楼で目の当たりにはず、吉原の人間でなければ到底できない仕事であった。外界の人間から見れば別天地であった吉原の姿を垣間見たい、こんな本があったら……というニーズに込めるものであったのだろう。

後半部は絵がないが、それも注目

に値する。遊女らの作による発句集となつてゐるからだ。春夏秋冬それぞれに詠まれた彼女たちの思いを感じることが出来る。あえて欠点をあげるとすれば『一目千本』や『急戦花之名寄』と同様に、全体を網羅したものではなく遊女および妓楼の取り上げ方には偏りがある。そのため、吉原内部や上客がスポンサーとなつて企画されたものと考えられよう。



## 『青楼美人合姿鏡』 せいろびじんあわせすがたがみ

新吉原の遊女たちの姿を鮮やかに多色刷木版画で表す。手の込んだ多色摺りで、美麗な着物の意匠までが入念に描かれる。後半は四季の部立てで遊女たちの発句を収録。技術と贅の限りを尽くした豪華絵本。

北尾重政・勝川春章 安永5年(1776) 東京国立博物館所蔵 出典: ColBase (<https://colbase.nich.go.jp/>)

## 町名

江戸、二町、角町、五ヶ町、京町、新町を五州(国)にたとえている。のちの明治時代になっても、吉原にはなお娼家楼100軒がひしめきあい、遊女は3000人といわれていた。

## 大門

吉原唯一の出入り口にあたる大門は「大門灘」としている。各島(町)への入口にびったりの例えだ。衣文坂は「衣文海」としている。なお明治時代になると大門は洋風のアーチ状のものに変わる。

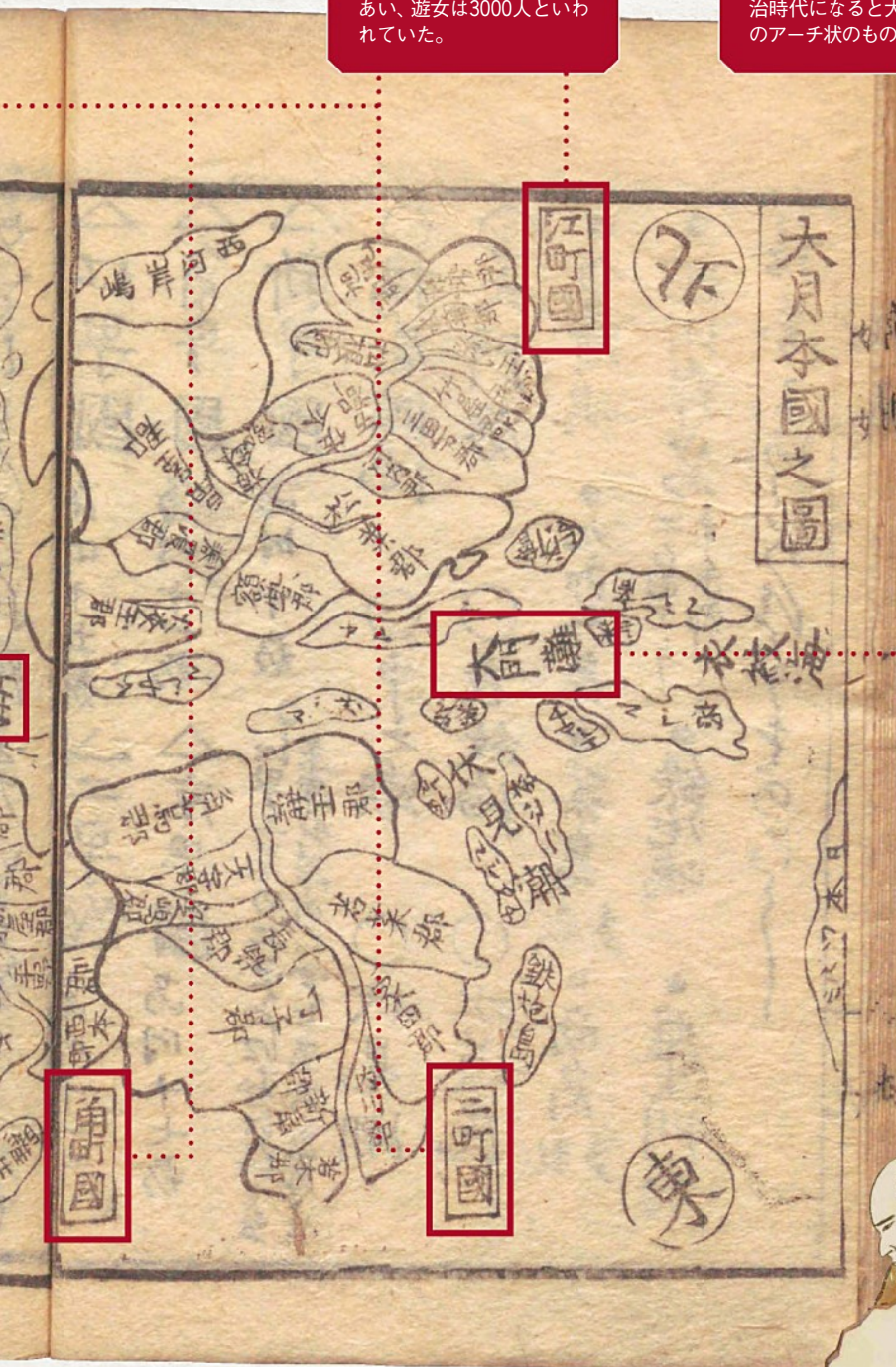
安永6年

1777年

葛重が世に送り出した洒落本

# 『娼妃地理記』の遊び心

葛重が出した遊女評判記の中でも、とくにユニークなのが、この娼妃地理記であろう。吉原を知れば眺めるだけで面白い。



## 朋誠堂喜三二(手柄岡持)

1735～1813。本名・平沢常富。出羽国久保田藩(秋田藩)の藩士で江戸留守居。狂歌師としては手柄岡持(てがらのおかもち)、笑い話本では道陀楼麻阿(どうだろうまあ)など複数の名前を使った。

『吾妻曲狂歌文庫』北尾政演画 宿屋飯盛撰 天明6年(1786) 東京都立図書館蔵



## 『娼妃地理記』しょうひちりき

吉原遊郭を地図のかたちで表し、町内の五ヶ町を五州に、妓楼を郡、楼中の名妓を名所旧跡にたとえ紹介。吉原を知る人ほど楽しめた内容だったと思われる。

国立国会図書館蔵

### 吉原遊廓を日本地図に 通人ならではの試み

恋川春町と同様に、ほうせいとうきさんじ 朋誠堂喜三二も秋田藩の江戸留守居役という相応な身分の武士であった。留守居役は江戸や他藩の情勢を探るため、盛り場などにもよく通う必要があった。葛重との縁もそうしたところからと推察されるし、確証はないが春町と酒を酌み交わすこともあったのだろう。それは物的証拠でもある出版物

が物語るわけで、葛重と喜三二がはつきりと関わったことがわかるのは、安永六年（1777）からである。というのも、この『娼妃地理記』がその年の正月に葛屋から発刊されたものだからである。もともと前から交流があったのは間違いない。

町内の五ヶ町を五州にたとえ、妓楼を郡、楼中の名妓を名所旧跡に見立てて紹介しているのだ。おそらく吉原を知らない人や、訪れたことのない人にはさっぱりわからないだろう。究極の内輪ウケ、常連ウケを狙ったものともいえるが、このようなものは当時呼ばれた「通」の人でなくては作れない代物であろう。これを皮切りに、葛重は喜三二と組んで次々と黄表紙・咄本・はなしばん 洒落本を出し、世の人々を楽しませる。

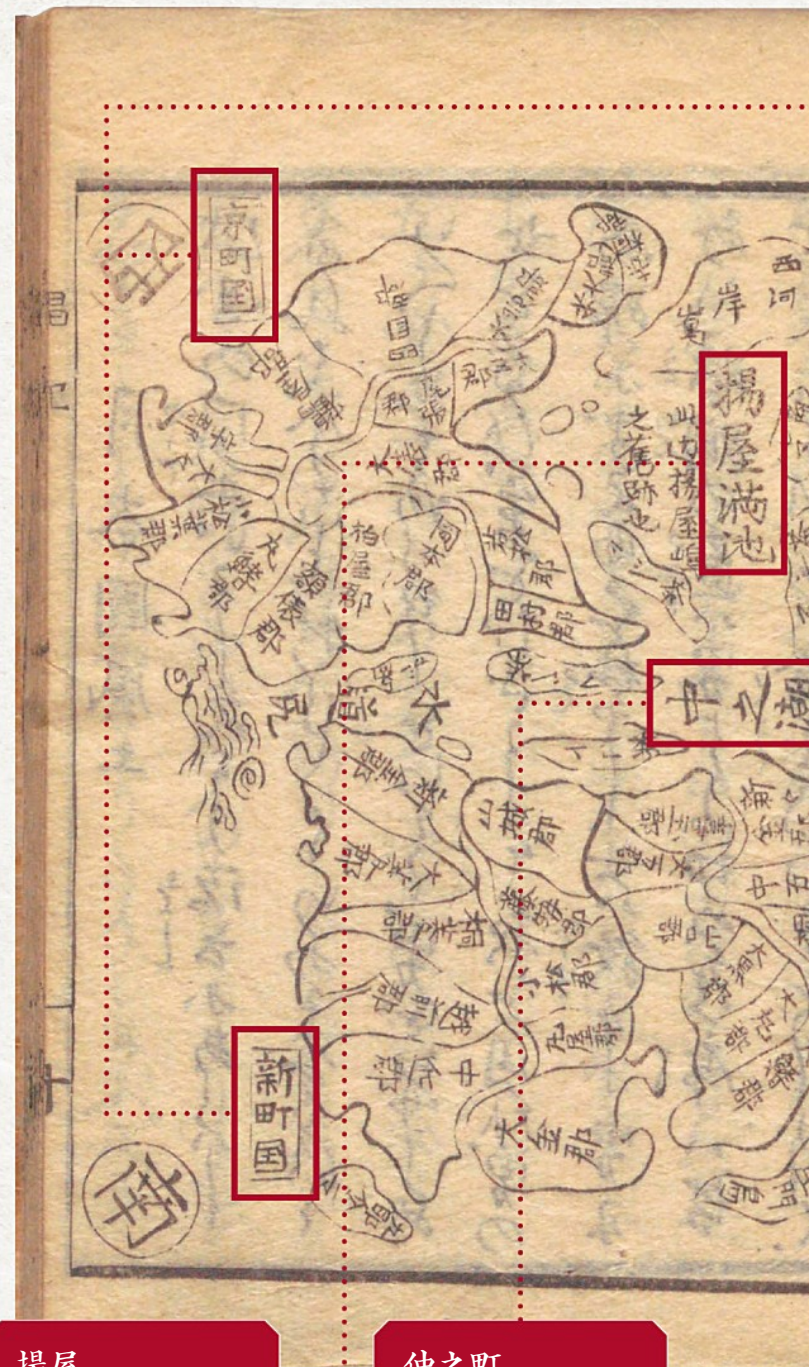
## KEYWORD

### 吉原の人口

徳川吉宗は享保6年（1721）に全国の人口調査を命じ、新吉原は総人数 8171人、15歳以上男2375人、15歳以下男463人、15歳以上女4003人、15歳以下女330人、このうち家主182人、店借り620人、遊女2105人、禿941人、召使2163人とされる。

### 遊郭吉原の終焉

明治期以降、政財界の社交場所は東京の中心地に近い芸者町（花街）に移り、次第に吉原遊廓は縮小。昭和31年（1956年）5月に売春防止法が成立し、遊郭は消滅、一部が特殊浴場（俗にいうソープランド）に姿を変えた。



### 揚屋

太夫や芸妓を抱えず、置屋から派遣してもらって遊宴を提供する場。一方、茶屋は下級遊女を招く場。揚屋では宴席に出す料理を台所で作っていたが「茶屋」では料理は作らず、外注だった。

### 仲之町

吉原のメインストリート仲之町通りが「中之潮」と表される。島への上陸と遊女選びの気持ちの高揚は似ていたのかも。通りは大きな妓楼が立ち並んでおり、花魁道中が行なわれていた。

天明元年

1781年

名絵師とのタッグの始まり

# 喜多川歌麿との出会い

葛重は黄表紙の世界に本格的に参入したことをきつかけに、一流の人気戯作者や絵師と組んで仕事をするようになった。その先にはのちの葛重の人生を決める、大きな出会いが待っている。

黄表紙に本格的に参入  
絵師・喜多川歌麿を売り出す

安永九年（1780）は葛重にとって、飛躍の年となった。当時、江戸の町では、大人向けの絵入り物語・黄表紙が流行していた。葛重はその黄表紙の出版に本格的に参入することにした。この年は黄表紙を計八作、刊行した。

版元としての歴史が浅い葛重がなぜ多くの黄表紙を出版できたのか。同年に鱗形屋孫兵衛の店商が不祥事により傾いたことが大きいのではないかと。それに伴い、鱗形屋で仕事していた戯作者、絵師、職人たちが職を失うという危機に、葛重が鱗形屋の事業を引き継いだのではないかと考えられる。

その結果、鱗形屋と組んで仕事をしていた戯作者の朋誠堂喜三二や恋

川春町、絵師の北尾重政など、当時の一流クリエーターを起用できるようになった。内容が充実した葛重の黄表紙はヒットを続けて、葛重は出版業界で存在感を示し始めた。

また、この年には往来物の出版も始めている。往来物は子ども向けの教科書。安価な出版物ではあるが、毎年出版することにより、確実に売り上げを見込める。ここでも経営の安定を第一義に考える、葛重の経営者としての方針が伺える。

葛重が地本問屋として着実に地歩を築いていた頃、葛重と一人の男との出会いがあった。のちの喜多川歌麿である。歌麿は狩野派の絵師・鳥山石燕に弟子入り。絵師としては安永四年（1775）に富本節の正本の表紙を初めて描いている。当時の名は北川豊章で、黄表紙や洒落本の挿絵を描いていた。



『身貌大通神略縁起』 みなりだいとうじんりやくえんぎ

天明元年に葛重から刊行された黄表紙。作者は清水栄十。「画工 忍岡哥麿」とあり、初めて歌麿の名を使った作品となった。作者の清水栄十は歌麿の師・鳥山石燕と俳諧を通じて親しかった。

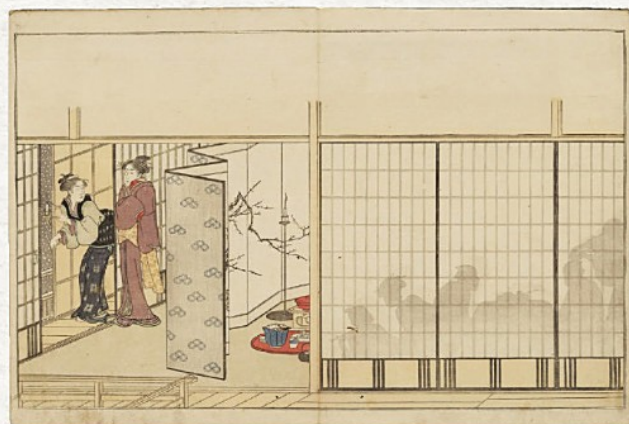
天明元年(1781)東京都立図書館所蔵



### 『画本虫撰』 えほんむしえらみ

天明8年(1788)に蔦屋から刊行された狂歌絵本。宿屋飯盛の撰で、尻焼猿人(酒井抱一)、四方赤良、大田南畝、唐衣橘洲、朱楽菅江などの狂歌を収載。歌麿の絵は虫をテーマに動植物を緻密な描写力で描いている。

天明8年(1788) 国文学研究資料館所蔵 出典:国書データベース



### 『銀世界』

寛政2年(1790)刊。宿屋飯盛撰で雪を詠んだ狂歌78種を収載。歌麿の絵は5図。この絵は料理屋の2階の情景。左右の色の対比が際立つ。『狂月坊』(月)『普賢像』(花)と合わせて狂歌絵本の雪月花三部作とされる。

国文学研究資料館所蔵 出典:国書データベース

## KEYWORD

鳥山石燕 とりやませきえん

江戸時代中期の画家で狩野派の門人。安永5年(1776)刊行の妖怪画集『画図百鬼夜行』をはじめとする妖怪画で知られ、後世の妖怪のイメージに影響を与えた。弟子には喜多川歌麿、恋川春町など著名な絵師がいる。

『潮干のつと』 しおひのつと

歌麿画の狂歌絵本3作の一つ。朱楽菅江の「八重垣連」の狂歌に歌麿が絵を描いた。潮干のつとは潮干狩りの土産という意味で、さまざまな貝が写実的に描写している。摺りには雲母摺りなどを多用したぜいたくな絵本。

蔦屋は歌麿の才能をすぐに見抜いて、蔦屋からも挿絵に起用されることになった。天明元年(1781)、蔦屋が歌麿と組んだ、最初の黄表紙『身貌大通神略縁起』を刊行。この作品で歌麿は名前を忍岡哥麿と変えて、初めて歌麿を名乗った。そこで蔦屋は歌麿の売り出しに乗り出す。翌年の天明二年(1782)には、歌麿が忍ヶ岡において、戯作者や絵師を招いて宴を催した。当時の歌麿は絵師としてまだそれほどの実績はない。その歌麿が大田南畝、

恋川春町など錚々たる顔ぶれを招いて、宴を張ったのは、バックに蔦屋がいたからと考えられる。実質的には蔦屋のプロデュースによる歌麿売り出し作戦であった。しかし、歌麿はまだ絵師として名が売れているとは言い難かった。天明六年(1786)に初めて蔦屋版絵本に歌麿を起用したが、絵本三作のうち、二作は北尾重政、一作が歌麿の『絵本江戸爵』であった。まだ、北尾重政の名声の影に隠れた、無名に近い絵師であった。

時代は「天明狂歌」が花開いた頃。歌麿の絵師としての力量を買って、蔦屋は、歌麿に狂歌絵本の挿絵を描かせた。その頃の蔦屋刊の作品には、『画本虫撰』『潮干のつと』『百千鳥狂歌合』の狂歌絵本三点がある。大胆な構図、確かなデッサン力など、歌麿の絵師としての技量が存分に発揮されている。初期の代表作となった。のちに歌麿が蔦屋のプロデュースによって紆余曲折の末に、美人絵という大輪の花を咲かせるまでにはまだ時間があった。

## 往来物

子ども向けの手習いの教科書で、主に寺子屋などで使われた。往復書簡のような手紙形式をとっているのが、この名がある。平安時代末期から、明治時代初めまで使われていた。江戸時代には細分化されていろいろな種類の往来物があった。



### 『利得算法記』

天明8年(1788)に蔦屋から刊行された往来物。和算や数学に関する教科書。

天明8年(1788) 東京学芸大学附属図書館所蔵

# 喜多川歌麿

喜多川歌麿の美人画といえば、日本人だけでなく海外でも知名度の高い人気絵師だ。無名の状態で葛重と出会った後、歌麿は大きく羽ばたいていく。



『風流花之香遊・高輪の季夏』 ふうりゅうはなのかあそび・たかなわのきか

天明前期、歌麿が若い頃の作品。四季の風俗を描いた2枚続4組のシリーズと考えられるが、この絵と秋の2作しか確認されていない。晩夏(陰暦6月)の、江戸湾を望む高輪の料理茶屋二階座敷の情景を描いた。

18世紀 東京国立博物館所蔵 出典:ColBase(<https://colbase.nich.go.jp/>)

謎に包まれた歌麿の生涯  
美人画で才能が開花。

喜多川歌麿の正確な生年、出生地は定かでない。没年からの逆算で、宝暦三年(1753)生まれという説があるが、その生涯は謎である。

絵師としての人生は幼少の頃に、狩野派の絵師、鳥山石燕に弟子入りしたことからはじまる。処女作は、安永四年(1775)、北川豊章の名で描いた、富本節浄瑠璃正本『四十八手恋所託』下巻の表紙絵。その後、葛重に見いだされて、絵師として頭角を現す。天明元年(1781)、葛屋から最初の黄表紙『身貌大通神略縁起』を刊行。名前を忍岡哥麿と変え初めて「歌麿」の名を使った。

天明三年(1783)には、『狂歌知足振』に、筆綾丸の狂名で狂歌師として登場。狂歌師のグループ「吉原連」にも参加するようになった。翌年には『古湊道中記』を葛屋から刊行。初めて喜多川歌麿の名を使った。寛政の改革以後は、葛重と組み「大首絵」の手法で美人を描いた。大胆な構図で女性を細密に描き、女性の性格や感情など内面までも表現して、当代随一の人気絵師となった。木版画では雲母摺りなどの手法

## KEYWORD

### 雲母摺り きらざり

雲母摺りとは人物の背景にキラキラと輝く雲母を使って摺ることにより、人物を引き立たせる効果を得られる、摺りの技法。雲母の粉末を岩絵具、膠と混ぜて使う。歌麿だけでなく、東洲斎写楽もこの技法を使っている。

### 筆綾丸 ふでのあやまる

歌麿の狂名。葛重と親しくなった歌麿は、葛重とともに、四方赤良(大田南畝)の「吉原連」に参加して、狂歌師としても活動していた。吉原に出入りするようになって、女性の姿態などを観察する機会が増えたと考えられる。

で、女性の美しさを際立たせている。その頃、歌麿は出版統制令を逃れて、下野の栃木を訪れている。浮世絵研究家の林美一氏の著作によれば、自己主張の強い歌麿は、作品にその時々住まいの地名を書いている。寛政七年(1795)刊行の『會本妃多智男比』には「栃木のとくなり」など栃木の地名・人名が登場する。栃木では豪商善野喜兵衛の依頼で、肉筆画の傑作『深川の雪』『品川の月』『吉原の花』を描く。歌麿の筆は凄まじいほどの冴えをみせている。しかし、文化元年(1804)、歌麿は幕府に処罰される。秀吉の醍醐の花見、または石田三成の稚児姿を描いたからといわれる。歌麿は入牢の末、手鎖五十日の刑を言い渡された。これが五十二歳の歌麿にはこたえたか、二年後に死去した。

婦女人相十品

相観歌麿考画



類まれな描写力で美を追求  
天才的な筆遣いが冴えわたる



『婦女人相十品・ポッピンを吹く娘』

ポッピンとはガラス製の吹けば音が出る玩具。長崎土産で、ビードロともいう。『婦女人相十品』は大判錦絵10枚の揃物作品で、ほかには「手紙を読む女」「煙管持てる女」などの作品がある。

18世紀 東京国立博物館所蔵 出典: ColBase (<https://colbase.nich.go.jp/>)

# 流行する狂歌会への参加

薦重は吉原から一流の版元が集まる日本橋へと移転。その当時、江戸の町では狂歌が大流行していた。

一流の地本問屋の仲間入り  
狂歌を次のターゲットにする

黄表紙で成功を収めた薦重は次に本拠地を移転させた。天明三年（1783）、日本橋通油町にある地本問屋・丸屋小兵衛の店を買収して本店とした。吉原の店は番頭に任せた。

当時の日本橋は五街道の起点で経済の中心地。出版業界においては、鶴屋喜右衛門、西村屋与八、村田屋治郎兵衛など大手の版元が軒を連ねる一等地だった。日本橋への移転により、薦重は版元としての格を上げ、名実ともに一流の地本問屋の仲間入りを果たした。この年には『吉原細見』が薦重の独占販売になった。

ここから薦重の進撃が始まる。黄表紙、洒落本、狂歌集などを次々に出して、その発行点数はそれまでと比べて飛躍的に多くなっていた。同時に人気実力のある戯作者を揃え

られるようになった。その代表が戯作者で狂歌師の大田南畝だ。

天明の頃は側用人の田沼意次が権力を握っていた時代で、江戸の町は経済的な発展を背景に、文化的な活動の高まりが盛り上がりつつあった。とりわけ、江戸の人々を熱狂させたのが狂歌だった。狂歌とは和歌と同じ形式で、言葉遊びや笑い、おかしみを詠む。天明二年（1782）頃から狂歌が盛んになり、翌年正月には『狂歌若葉集』『万載狂歌集』が刊行されて、一気にブームとなった。

狂歌師たちは「連」を作って狂歌会を開いては交流を深めた。狂歌師の第一人者が大田南畝（四方赤良／蜀山人）で、多彩な才能の持ち主が集まって狂歌グループを組み、「天明狂歌」を牽引した。

時代を読むのに長けた薦重がこの動きを見逃さないわけがない。薦重は南畝との関係強化を図った。すで



## 『東都大伝馬街繁栄之図』と現在の様子

天保14年(1843)～弘化4年(1847)刊行。絵は初代歌川広重。日本橋大伝馬町の木綿問屋街を描いた。伊勢商人の店が多く、越後屋、白木屋、松坂屋など有名呉服店の立派な店構えが並んでいた。薦重が移転した日本橋の通油町の通りも、同じような賑わいを見せていたと思われる。左は現在の通油町。ビルが多いオフィス街になっている。

広重著 国立国会図書館蔵



## KEYWORD

### 日本橋通油町

通油町は慶長年間に初めて町屋ができて、灯油を売る店があったことから町名が付いた。当時の通油町には書物問屋や地本問屋が多く、江戸における情報の発信地であった。問屋の様子を描いた絵からは、商店で商いに励む姿や人々が行き交う賑やかな商人の町の様子が描かれている。通油町は現在、中央区日本橋大伝馬町に編入されている。

### 狂名 きょうめい

狂歌師は狂歌に風刺とパロディ、笑いを込めただけでなく、狂名もふざけたネーミングが多かった。有名なのは朱楽菅江（あけらかんこう）、「あつけらかん」をもじった名前だ。ほかにも、恋川春町の酒上不埒（さけのうえのふらち）、宿屋飯盛、元木綱、門限面倒など。薦重の薦唐丸、歌麿の筆綾丸は名前や仕事にちなみ、同じ丸が付いているところに2人の関係性が表れている。

に天明元年（1781）春に薦重は南畝を訪ねていることが、南畝の日記に書いてある。執筆を依頼したのを手掛かりに、地元・吉原でも交流を重ねた。翌天明二年（1782）の暮れには、南畝、朱楽菅江、恋川春町とともに、吉原の大文字屋で宴席を開いた記録がある。薦重自身も「薦唐丸」という狂歌名を付けて、狂歌の創作にも積極的に関与した。必要な人材を手に入れるためには躊躇しない。薦重の目標に向かう猪突猛進ぶりがいかに発揮された例であろう。南畝のように戯作者には武士も含まれるが、それらの者たちとも親しく交流を続けるには、薦重ならではの人間としての魅力が役立っているといえよう。

薦重は狂歌に関して新たなビジネスも考え出した。狂歌会を主催して狂歌をその場で披露してもらうだけでなく、その狂歌をすぐに狂歌集に収録して刊行する。イベントと出版を合体させた、薦重ならではのアイデアだ。現代のメディアが行っているビジネスを薦重は二百年以上も前に実行していた。狂歌では、天明五年（1785）狂歌集『故混馬鹿集』、同七年の『狂歌才蔵集』などのヒット作を世に出している。



### 狂歌とは？

和歌の形式と同じ、57577で詠むが、狂歌は風刺やパロディの精神で、滑稽やおかしみを詠む。和歌の名家取りの手法で、『古今和歌集』などの古典の名作和歌をパロディ化した作品も多い。

### 『吉原大通絵』 よしわらだいつうえ

天明4年(1784)刊行。恋川春町作。喜三二を主人公に、大田南畝など著名狂歌師10名が顔を揃える場面。それぞれ扮装をしているが、左下の薦重だけは普通の恰好。商売熱心な薦重を揶揄したものか。

恋川春町作 天明4年(1784)  
国立国会図書館蔵

描かれているのは… (図右上から時計回り)

- |                |          |
|----------------|----------|
| ① 四方赤良(大田南畝)   | ⑦ 平鉄東作   |
| ② 手柄岡持(朋誠堂喜三二) | ⑧ 酒盛入道常閑 |
| ③ 大屋裏住         | ⑨ 大原のぐい  |
| ④ 腹唐秋人         | ⑩ 紀定丸    |
| ⑤ 加保茶元成        | ⑪ 朱楽菅江   |
| ⑥ 薦唐丸(薦屋重三郎)   | ⑫ 元木綱    |

# 大田南畝

天明狂歌を牽引した大田南畝。当代一の知識人だった南畝が狂歌界だけでなく出版界に果たした功績とはどんなものか。

機知にとんだ鋭い感性で  
狂歌の第一人者に

江戸の狂歌師、戯作者には町人だけでなく、武士階級の者が多かった。下級武士ながら幕臣の大田南畝はその代表である。南畝は幼い頃から「神童」と呼ばれるほど優秀で、早くから文才を発揮した。十五歳で「江戸六歌仙」の一人、内山賀邸に入門、和歌を学んでいる。

十七歳で家督を継いで徒士として出仕。その傍ら、創作活動を始めた。明和三年（1766）、に最初の著作である漢詩集『明詩擢材』を上梓。続けて翌年の明和四年（1767）には狂詩狂文集『寝惚先生文集』を刊行した。この作品は南畝を高く評価していた平賀源内が序を書いた。その後の狂歌流行のきっかけをつかったことから、南畝は一躍その名を

知られることになった。当時の南畝はまだ十代。漢詩集と狂歌集を高レベルで書き分けることができる、早熟な天才だった。

二十代になると、賀邸の弟子仲間の唐衣橘洲に誘われ、狂歌の会に参加するようになった。この頃から四方赤良の狂名を使っている。

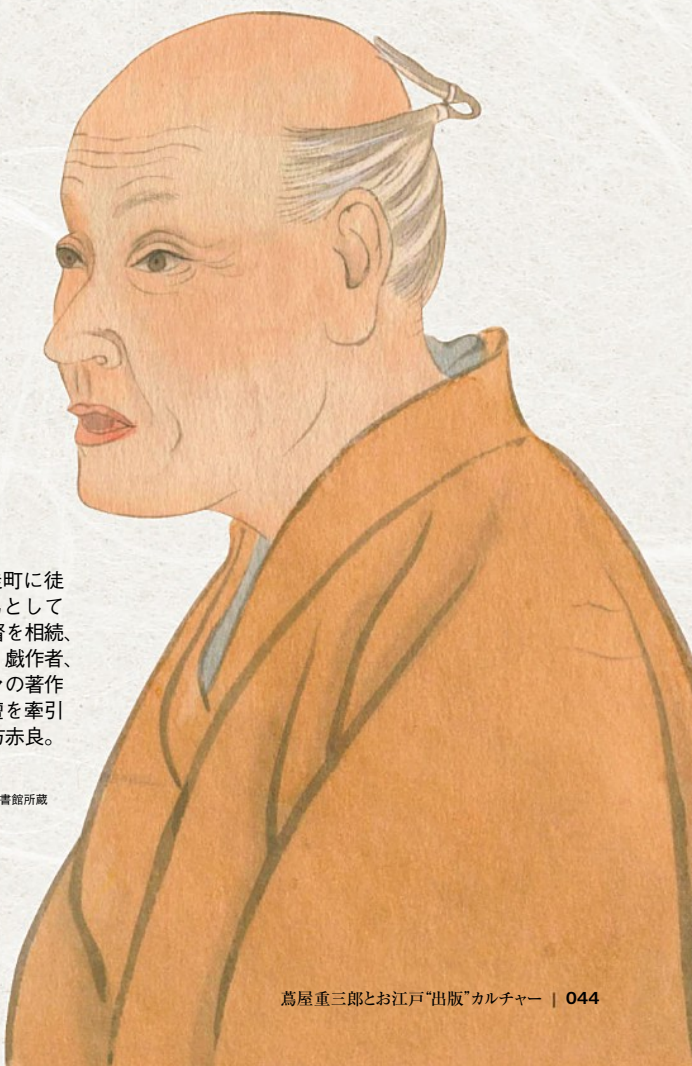
安永四年（1775）に洒落本『駅新話』を刊行。内藤新宿の遊里を舞台にした物語で、仲間とともに内藤新宿まで出かけて遊んだことがヒントになっている。安永八年（1779）には、五夜続けて月見の宴を開くなど、狂歌師や戯作者などとの交流を続けて、次第に狂歌界の中心的存在となっていく。

南畝の活動は薦重の目に留まり、薦重からアプローチを受ける。安永九年（1780）には三十二歳で、葛屋から黄表紙『嘘言八百万八伝』

を刊行するなど、戯作者として活動するようになった。徒士として表の仕事をしなから、一方では戯作の執筆、評論もこなす。南畝の幅広い才能が開花した時期だった。

その後は世を上げて狂歌が流行する中で、南畝は狂歌師として目覚ましい活動が続ける。その頃、江戸の狂歌界は南畝の「山手連」、唐衣橘洲の「四谷連」、朱楽菅江の「朱楽連」などが知られていた。三人は「天明の狂歌三大家」と呼ばれた。

しかし、次第に赤良と橘洲が狂歌観を巡って対立するようになった。橘洲が近世初期の復古的な歌風を重



## 大田南畝

1749年～1823年

江戸・牛込中御徒町に徒士・大田家の長男として誕生。17歳で家督を相続、徒士として出仕。戯作者、狂歌師として数々の著作を上梓、天明文壇を牽引した。狂名は四方赤良。歌号は蜀山人。

『肖像』2之巻  
『野村』文紹著 国立国会図書館蔵

## 天明狂歌の三大家 残りの二人は？

### 唐衣橘洲 からごろもきつしゅう

田安家の家臣。明和6年(1769)に自邸で平秩東作らと狂歌の会を開催、天明狂歌が流行するきっかけとなった。作風は端正、温雅。

### 朱楽菅江 あけらかんごう

御家人。「朱楽連」を主宰。狂歌のほか、洒落本、川柳なども執筆。代表作は『故混馬鹿集』『鸚鵡盃』。妻も狂歌師だった。



### 『年始御礼帳』

天明4年(1784)の歳旦狂歌集。黄表紙仕立てになっていて、薦重こと薦唐丸の狂歌も収められている。巻末に「歌麿門人千代女」とあるが、これは歌麿その人ではないかといわれている。

天明4年(1784) 国立国会図書館蔵

んじるのに対して、赤良は時代の先端を行き、鋭い感性で大胆かつ機知に富む狂歌を詠んだ。例えば、「世の中にたえて女のなかりせば」とこの心はのどけからまし」「世の中は酒と女とが敵なり どうか敵にめぐりあいたい」現代にも通じる切れ味の鋭い狂歌で、数々の名作を詠んでいる。決着がついたのは、天明三年(1783)。橘洲の『狂歌若葉集』、南畝の『万

歳狂歌集』が同時に刊行された時だ。南畝の狂歌集は二〇〇人以上の狂歌を収録、『千載集』を踏襲した構成で、橘洲の狂歌集を圧倒した。

ところが、天明七年(1787)、南畝の運命を変える出来事があった。田沼意次に変わり松平定信が実権を握ったことにより、パトロンの存在だった勘定組頭土山宗次郎が公金横領の罪で失脚、斬首の刑に処せられたのである。土山とともに派手に遊んでいた南畝は窮地に立たされた。

時代は寛政年間となり、松平定信の改革が始まる。ついに南畝は第一線から退くことを決断した。次第に狂歌から離れて創作活動もやめた。それ以降は幕臣としての仕事に戻った。寛政四年(1792)、四十六歳で幕府の登用試験を受けて首席合格。四十八歳で支配勘定に昇進した。大坂や長崎に派遣されるなど、南畝は官吏としても有能だった。

享和元年(1801)に、大坂銅座出役として大坂に行った際には、南畝の名声を知る上方の人たちから狂歌を求められ、銅にちなんだ「蜀山人」の歌号で狂歌を詠んだ。しかし、決して表舞台に出ることはなく、時折、随筆を書くなど、目立たないように創作活動を行っていた。



### 『どれ百人一首』

『どれ百人一首』は寛政5(1793)年の歳旦狂歌集。鹿都部真顔編、北尾政美(鋤形蕙斎)画。百人一首をもじった『道化百人一首』をパロディ化した作品。鹿都部真顔は狂歌を南畝に学んで、狂歌界の中心になったが、のちにはふるわなかった。

【物申しどれ／百人一首】 寛政5年(1793)  
大阪公立大学杉本図書館蔵 出典:国書データベース

天明8年

1788年

時代が求める出版人・蔦重、処分へ

# 風刺的作品と出版統制

田沼時代から寛政の改革へ。時代の閉塞感を打破するように、蔦重は笑いとパロディにあふれた黄表紙でヒット作を連発する。しかし、蔦重と出版界に暗い影が忍び寄ってくる。

政治や社会を風刺して  
庶民の喝さいを浴びる

「天明狂歌」に江戸の町が浮かっていた頃、時代は大きな変革期に差し掛かっていた。天明二年（1782）には冷害による「天明の飢饉」が始まり、翌年には浅間山が噴火、東北や関東で冷害が拡大した。米価が高騰、各地で打ちこわしや百姓一揆、江戸でも米騒動が起きた。

社会情勢が不安定になる中で、政治も揺らいでいく。天明四年（1784）には田沼意次の息子・意知が江戸城中で殺害された。さらに後ろ盾の十代將軍家治が死去。翌年に意次は罷免、田沼時代はあっけなく終焉を迎えた。

天明七年（1787）には御三家が推す松平定信が老中に就任。「寛政の改革」が断行された。文武、質

素儉約を奨励、華美は嫌われ、風俗や出版は取り締まりの対象となった。

松平定信による田沼政治からの脱却は田沼派の排除から始まった。就任の年には田沼意次に重用されていた勘定組頭土屋宗次郎が小普請組に落とされ、翌年には公金横領の罪に問われ、斬首に処せられた。

この事件に震え上がったのは大田南畝である。南畝にとって土屋宗次郎はいわばパトロンの存在。本来なら内職に励む立場であった南畝が、狂歌会をはじめ遊興や宴席、遊郭への登楼などに参加できたのは、宗次郎がいたからこそであった。窮地に陥った南畝は、天明七年（1787）、歳旦集『千里同風』を最後に狂歌戯作の世界から身を引いた。

このような激動の時代に、蔦重は何をしていたか。萎縮するどころか、むしろ逆境を絶好のチャンスととら

## 徳川家斉

徳川第11代将軍。10代家治の田沼意次重用に対して、父の一橋治済（はるさだ）とともに松平定信を推して、老中首座に就任させた。50年間、将軍の座に君臨して、55人の子女を産ませたことで有名。

『徳川家斉』東京大学史料編纂所蔵複製



## 出版統制令とは

書物や草双紙の絶版、好色本の絶版など厳しい取り締まりで、問屋同士で監視する自主的な検閲を求めた。寛政2年（1790）に書物問屋、同10月に蔦屋などの地本問屋に対して同じような命が下った。



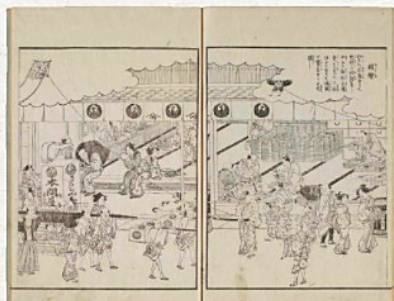
# 『文武二道万石通』

朋誠堂喜三二作の黄表紙。ときは鎌倉時代、將軍・源頼朝が重臣・畠山重忠に命じて文武の奨励を計るという、寛政の改革を皮肉った内容。喜三二が筆を折るきっかけとなった。

喜三二戯作、行磨画 天明8年(1788) 国立国会図書館蔵

## 鶴屋

京都に本店を持つ大地本問屋。江戸で大店舗を構えている通油町に、後から薦重が進出。ライバルとなるが、薦重は店主の喜右衛門と仲が良く、山東京伝をともに独占していた。3人で日光参りにも行っている。



## 『江戸名所図会』錦絵

江戸の名所として通油町にある鶴屋の店舗が描かれている。店内の商いの様子、往来の賑やかさなどから繁盛していることがわかる。出版統制令によってこの賑わいは風前の灯に。

松浦軒斎藤長秋著 長谷川雪旦画 天保5~7年(1834~36) 東京都立図書館蔵

沼意次の蝦夷地開発を皮肉った。2作品とも、作者は武士であった。朋誠堂喜三二は秋田藩、恋川春町は駿河小島藩の江戸留守居役。内情を知っている武士が書いた本だけに、内容が良く評判となった。薦重の思惑通り、爆発的な売れ行きとなった。薦重はパロディ本を制作する際には、取り締まりに触れないように、対策に知恵を絞っていた。『文武二道万石通』では、行磨の筆になる源頼朝と重臣の畠山重忠が描かれる。初版本は、少年の頼朝は家斉に、重忠は家紋の梅鉢紋から松平定信に擬せられていることが明確だが、後から出した異版では表現を穏当にした。

今や取り締まりに触れないように苦心して書物をつくるのが薦重にとって新たな戦いになっていた。寛政元年(1789)には二作の黄表紙を刊行した。恋川春町の『鸚鵡返文武二道』、唐米参和の『天下一面鏡梅鉢』。前者は松平定信の文武の奨励を揶揄。後者は、浅間山の噴火、江戸の打ちこわしをパロディ化して、文武奨励を笑いにしている。先の見えない時代に閉塞感を味わっていた、江戸の人々はこれらの風刺本に拍手喝さいを送った。『鸚鵡返文武二道』は一万五千部を売り上げ、売れすぎて製本が間に合わない、当時としては大ベストセラーになった。

# 山東京伝の洒落本3作が 出版統制の見せしめに

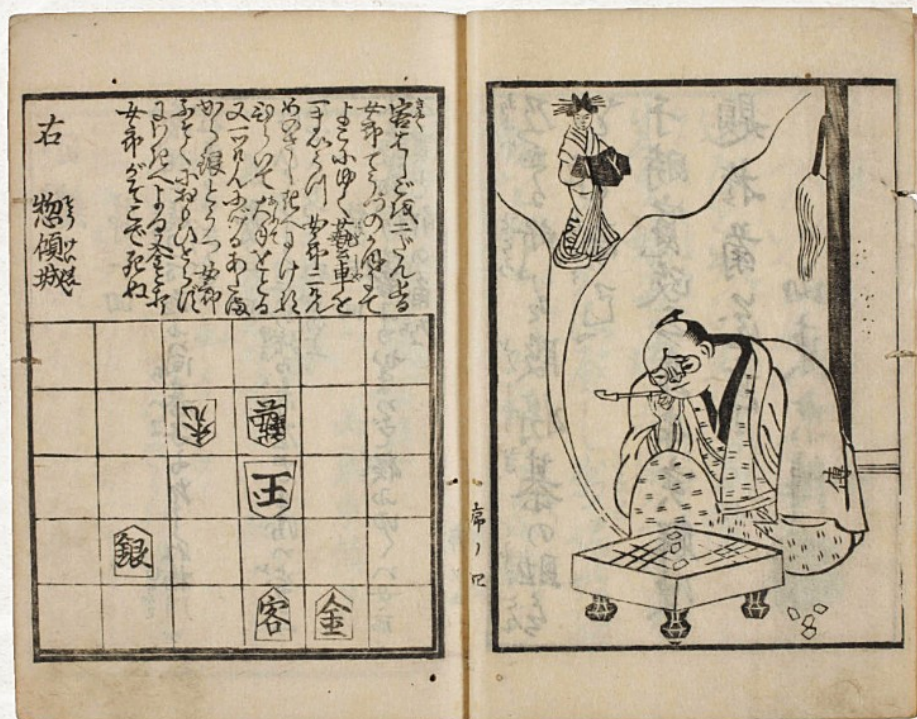


## ①『仕懸文庫』

しかげぶんこ

寛政3年刊。山東京伝作の洒落本。鎌倉時代の大磯として、深川の遊里を描いた。社会風刺の要素は少ないが、風紀を乱したとして摘発の対象になった。内容は洒落本の最高峰と賞されるほどの出来栄え。

山東京伝作画 寛政3年(1791)  
国立国会図書館蔵



## ②『娼妓絹籠』

しょうぎきぬぶるい

寛政3年刊。山東京伝作の洒落本。近松門左衛門の浄瑠璃でおなじみの梅川・忠兵衛の悲恋物語を描いている。遊女と客の駆け引きを描いたところが出版統制の禁に触れた。

『手段諸物娼妓絹籠』  
山東京伝著 寛政3年(1791)  
国文学研究資料館蔵 出典:国書データベース

## ③『錦之裏』

にしきのうら

寛政3年刊。山東京伝作の洒落本。夜の吉原を“錦”に見立て、その裏を昼の吉原として、昼間のさまざまな情景を描いている。昼の明るい吉原は珍しい題材で、面白い趣向の洒落本となっている。

『青楼昼の世界錦之裏』  
山東京伝作画 寛政3年(1791)  
国立国会図書館蔵



## 出版統制令の禁を犯して 葛重と京伝が処罰される

葛重は黄表紙で暗黒の時代に一矢を報いたものの、幕府による取り締まりの目はますます厳しくなっていた。葛重は慎重を期して、寛政元年（1789）、唐来参和の黄表紙『天下一面鏡梅鉢』では、版元名、作者名を隠して出版した。しかし、依然として幕府の監視の目は続いており『天下一面鏡梅鉢』は出版統制令の禁を犯したとして絶版となった。

また、別の版元が出した黄表紙『黒白水鏡』も絶版になり、作者の石部琴好は手鎖数日の後、江戸所払いという厳しい処罰を受けた。同作で絵師を務めた北尾政演（山東京伝）も罰金刑に処せられた。まさに出版人に対する見せしめであった。

その頃になると大田南畝に続いて、武士階級の戯作者たちの自粛が始まった。秋田藩留守居役の朋誠堂喜三二は、『文武二道万石通』を刊行した天明八年（1788）の頃に、秋田藩主からの圧力で留守役から下り、戯作界から身を引いた。小島藩留守居役の恋川春町は寛政元年（1789）、松平定信から内密に呼び出されたが、それに応じず急死した。自

死ではないかともいわれている。

さらに幕府の出版界への取り締まりは容赦がなかった。寛政二年（1790）、書物問屋への出版統制令が下った。これにより書物、草双紙などの新規出版は禁止され、新規に出版する際には奉行所の指示が必要になった。内容が華美のものや風紀を乱すようなみだらな書物は禁止。葛重の得意分野である黄表紙や洒落本が標的となった。また、専門書などを販売する書物問屋だけでなく、葛重などの地本問屋に対しても、問屋同士で本の内容をチェックする、新たな検閲体制を要求された。

世の中がますます窮屈になって、葛重は朋誠堂喜三二と恋川春町という得難い人材を失った。その結果、若い世代の山東京伝に今まで以上に期待をするようになった。

京伝はすでに絵師・北尾政演の名で描いた『黒白水鏡』によって、寛政元年（1789）に罰金刑に処せられたことがある。ほかの戯作者たちが筆を折り、自死するなどの噂を聞いて、簡単には筆を執らなかつた。葛重の説得を受けて作品に取り掛り、寛政三年（1791）には葛屋から洒落本『仕掛文庫』『錦之裏』『娼妓絹籠』三作を刊行した。

ところが、この洒落本三作が出版統制令の禁を犯したと咎められた。三作は絶版。作者の山東京伝は手鎖五十日の刑を受けた。版元である葛重と、地本問屋仲間で行事役をつとめた二名も身上に応じた超過量、罰金を支払うことになった。

この事件については、一時葛屋の番頭を務めたこともある曲亭馬琴が「身上半減」と記している。財産の半分か年収の半分か不明だが、いずれにしても葛重にとって財産没収が相当な打撃であったことは確かだ。山東京伝は戯作の世界から引退、以後は銀座で煙草入れ店を経営して生計を立てた。のちに復帰したもの

の、読本の執筆しか行なわなかつた。葛重は幕府の寛政の改革に真っ向から挑むように社会風刺の黄表紙を出版して、世の喝さいを浴びたが、見事に出版統制令に引っかかった。そのような豪胆なことをできるのは葛重だけである。周囲は時代の波をもろに受けて、狂歌師、戯作者、絵師たちは失意の中で断筆していく。しかし、葛重はしばらく謹慎していたが、再び前を向く。書物問屋の株を取得して、地本以外の書物の制作を始めた。葛重は一人反骨の炎を密かに燃やしていた。

## KEYWORD

### 黒白水鏡 こくびやくみずかがみ

田沼意次の息子・意知の江戸城内殺害事件を滑稽に風刺した。天明の頃に出版されたが、すぐに絶版にはならず寛政元年に絶版となり、作者への処罰が下された。寛政の改革が軌道に乗ってから処罰に及んだとされる。

### 手鎖

前に組んだ両手に瓢箪型の鉄製手錠をかける。牢に収容するほどではない軽微の犯罪者や、処分が決まる前の容疑者に、自宅にて謹慎させるために行なわれた。身体を束縛されるので体を傷めることが多い。

### 『堪忍袋緒×善玉』

かんにんぶくろおじめのぜんだま

寛政5年(1793)刊。山東京伝作の黄表紙。善玉・悪玉が登場するシリーズで大ヒットした。この作品から生まれたヒーロー・悪玉は歌舞伎の役にもなり、坂東三津五郎が「悪玉踊り」を踊った。

山東京伝作 北尾重政画 寛政5年(1793)  
国立国会図書館蔵



# 山東京伝

山東京伝は黄表紙、洒落本の作者で、挿絵も描く絵師でもある。若き天才が幕府の出版統制によって、二度も処罰される憂き目にあう。

## 洒落本の第一人者・京伝 幕府の取り締まりに屈す

山東京伝は江戸深川木場町の質屋・伊勢屋伝左衛門の長男として生まれた。裕福な家庭に生まれ、父母からは溺愛されていたという。若い頃から長唄や三味線を習っていた。深川は岡場所が多い土地柄で、そこに入り組むような青年だった。

一方では北尾重政に弟子入りして、絵の才能を早くから認められていた。安永七年（1778）、十八歳で黄表紙『開帳利益札遊合』の挿絵を担当する。その後『娘敵討故郷錦』で、戯作者兼絵師でデビューを果たす。天明二年（1782）刊行した黄表紙『手前勝手御存知商売』が大田南畝に賞賛される。早熟な天才は瞬間に人気作家となった。

葛重とのかかわりも早い時期から

あった。二十歳で、葛屋が刊行した黄表紙『夜野中狐物』で挿絵を手がけている。その後も、葛屋だけでも、二十四歳のときに絵師として『新美人合自筆鏡』、二十五歳で初の洒落本『令子洞房（息子部屋）』と黄表紙『江戸生艶気樺焼』、二十六歳で滑稽絵本『小紋新法』を刊行。二十代の京伝は目覚ましい活躍を遂げている。黄表紙では世代が上の朋誠堂喜三二、恋川春町と並び称され、とくに洒落本では第一人者と評価されている。三十歳のときには、のちの滝沢馬琴に弟子入りを請われたという逸話が残っている。京伝はその生涯で約三〇〇本の作品を描き、そのうち六十本の作品では絵師も務めている。驚くべき才能の持ち主といえよう。戯作と絵で名声をほしいままにしていたが、寛政の改革によってその人生を狂わされることになった。



## 山東京伝

京伝は引退後、煙草入れ屋の店主に収まったが、引き続き世の注目を集めている。吉原の花魁を二度妻にした。割り勘を行なったため、京伝割という言葉が生まれるなど、逸話に事欠かない人物だった。

『江戸花京橋名取』 鳥橋斎栄里筆 18世紀  
東京国立博物館所蔵 出典:ColBase(<https://colbase.nich.go.jp/>)



## 『山東京伝の見世』

山東京伝が引退後に開いた京橋銀座一丁目の煙草入れ屋を描いた浮世絵。店の奥には主である京伝と、客として訪れた遊女花扇、瀬川菊之丞、川村宗十郎など当時の有名人が描かれている。

歌川豊国筆 18世紀  
東京国立博物館所蔵 出典:ColBase(<https://colbase.nich.go.jp/>)

## KEYWORD

### 新美人合自筆鏡

しんびじんあわせじひつかがみ

天明4年(1784)刊。京伝24歳のとき、北尾政演の名で描いた作品。前年に『青楼名君自筆集』として刊行した、大判2枚の錦絵を画帖に仕立てた。吉原の有名な遊女を艶やかに描いて、遊女自筆の書を書き入れている。

### 江戸生艶気樺焼

えどうまれうわきのかばやき

天明5年(1785)刊。京伝24歳のときの黄表紙。タイトルは「江戸前の蒲焼」をもじったもの。金持ちの息子・艶二郎はうぬぼれが強く、色男の評判を取ろうというろと計画するものの、失敗をするという滑稽話。

寛政元年、黄表紙『黒白水鏡』の挿絵を描いて罰金刑に処せられた。

作者の石部琴好が手鎖数日の後、江戸所払いとなったことに衝撃を受けた。ほかの戯作者、狂歌師が出版統制に耐えかねて、表舞台から去っていく中、京伝も引退を考えて、吉原扇屋の遊女菊園を妻に迎え、新生活に入っていた。戯作の世界に戻るつもりはなかったのだろう。しかし、出版にまだ情熱を持ち続けている葛重に説得されて翻意した。

寛政三年（1791）には葛屋から山東京伝作の黄表紙とともに、洒落本『仕掛文庫』『錦之裏』『娼妓絹籠』を刊行した。

この洒落本三作は浄瑠璃や歌舞伎に材を取って、舞台や時代を変えているが、吉原や深川の遊里であると判断されて、咎められた。三作は絶版。山東京伝は手鎖五十日という重い刑を受けた。これに懲りた京伝は、以後、洒落本を書くことはあきらめて、銀座の煙草入れの店を買い取って経営者となった。

その後は読本の執筆だけは続けて、ここでも才能を発揮して人気作家となった。のちに曲亭馬琴に人気作家の座を奪われるのは皮肉な運命のめぐりあわせである。

京傳画



『傾城買四十八手』

けいせいかいしじゅうはって

寛政2年(1790) 東京都立中央図書館所蔵

寛政2年(1790)刊。山東京伝作の洒落本。吉原の大見世や小見世で繰り広げられる、さまざまな客と遊女の閨房での会話を描いて評を付け加えている。洒落本の傑作とされ、のちの戯作者に影響を与えた。

葛重を育てた夢の色町

# 吉原を歩く

最盛期、三千人の遊女がいたという  
大江戸文化の発信地・吉原。  
葛屋重三郎が生まれ育った遊廓は  
どの程度、痕跡を残しているのか。

取材／文 上永哲矢 撮影／遠藤純（P.52～55）

よし原大門

OHMON

吉原遊郭の唯一の入口、大門（おおもん）が存在した場所。今は道の両サイドに門柱の名残を偲ばせるような細い柱が建っている。



右／日本堤から大門に続く五十間道はS字状にカーブしており、当時のままの地形が残る。中／吉原と外界を隔てていた「お歯黒どぶ」の痕跡を色濃く伝える石垣。左／かつて吉原有数の妓楼が建っていた吉原公園入口。

歌川国貞(三代豊国) 第19世紀  
東京国立博物館所蔵 出典: ColBase (<https://colbase.nich.go.jp/>)



## 『北廓月の夜桜』

ほっかつきのよざくら

吉原大門から延びる仲の町通りを描いた浮世絵。通りの真ん中にある桜は毎年3月3日の紋日にあわせて咲くように移植され、春の町を彩っていた。夜桜見物で賑わい、散る頃には片づけられていた。

見返り柳と吉原大門跡に  
昔日の賑わいを思う

「吉原って、まだあるんだっけ？」  
東京に長く暮らしていると、時折、こんな問いかけを受けることがある。聞き手の頭のなかには、おそらく時代劇に出てくるような華やかな遊廓か、文化的な色合いの建物が並ぶ情景がイメージされているに違いない。江戸の名所でもあった、かの遊廓はもはや姿かたちもない。売春自体もいまや建前上は法律で禁止されている。その意味で考えれば、すでに吉原はないと考えるべきかもしれない。しかし、現地を訪れると、いまでも遊廓の痕跡は確かに見いだせる。

現在の土手通りは、かつて荒川の堤防となっていた日本堤<sup>にほんづつみ</sup>があったところ。遊客はその堤の上(土手)を通過して遊廓へ入った。その土手沿いから遊廓への入口にあたる角には、古くから見返り柳が植わっていた。

「もてた奴ばかり見返る柳なり」  
「柳ちる今朝の出口のわかれ際」  
見返りというほどだから、やはりそれを詠んだ川柳は帰り際のものともみられるものが多い。遊廓でのひと時あるいは一夜を名残惜しげに振り返る客たちの様子が想像できる。い



## 『江戸名所百景 よし原日本堤』

えどめいしよひゃっけい よしわらにほんづつみ

土手道は吉原への行き帰りに通る必要があった。その狭い道は大勢の人で賑わい、たくさん料理屋などが軒を連ねていた。

広重著 安政4年(1857)  
国立国会図書館蔵



## 『江戸切絵図 今戸箕輪浅草画図』

えどきりえず いまどみのわあさくさず

景山致泰、戸松昌訓、井山能知編  
嘉永2年・文久2年(1849-1862) 国立国会図書館蔵

当時は何もなかった湿地帯へ移転して再開された新吉原。浅草の浅草寺の真手、ちょうど真北あたりにあった。隅田川から「山谷堀」を舟で行くこともできた。

# 葛重が初めて店を構えた 江戸最大の遊廓の名残が今も

まは六代目の柳だそうだが「吉原大門」の交差点の一角、多くの車が行き交う土手通り沿いに何度か植え替えられながら佇むのは、それだけ象徴的なものであったからだろう。

## 大門の跡をくぐると思い出す 廓の定番「曉鳥」の節

そこから南西方向に延びる五十間道は、S字状に延びる下り坂で衣文坂とも呼ばれた。五十間、つまり一〇〇メートル足らずの短い通りだが、昔はこの両脇に商店や茶屋が並んでいた。葛屋重三郎が、親族の葛屋次郎兵衛の店の軒先に貸本屋を出したのも、この通りだった。そして、その突き当りに大門があった。「ひとりで帰ってこらんさい。怪しい奴だつてんで、きつと大門のところで留められますよ」

落語の廓の定番「曉鳥」に出てくる一節も、ここが吉原唯一の出入口であったことを物語るもの。初心な若旦那をどうにか遊ばせるため、

付き添いの遊び人たちがそう言うにける筋書きだ。もちろん、実際にはそれほど厳重に取り締まられていたわけではないが、遊女の脱走や怪しい者の出入りを監視する番所があった。いま大門跡の脇にある吉原交番が、その名残といえなくもない。

かつて吉原の街と外界を隔てていたものに「お蘭黒どぶ」がある。当初、日本橋の近く(人形町)にあった吉原は明暦の大火(1657)以降、現在地に移り新吉原と呼ばれた。浅草の真裏にあたる低湿地で、当時は田んぼしかなく、最初に堀(お蘭黒どぶ)を造って盛り土で地面を固め、板塀で囲んだ範囲が遊廓になった。「故なくして囲いより外に出さぬ」と「鉄則であったが、寺社参拝や病気の際の通院など理由があれば一時的に大門を出ることも許されていた。とはいえ、もし脱走して捕まれば厳しい体罰が待っている。元より身請けでもされなければ、暮らす当てもなかったと思われる。

「お菌黒どぶ」の痕跡から  
吉原と外界の境目を探す

このあたりの地形は周辺が標高七  
〜八メートルであるのに対し、吉原  
遊廓跡の標高は十四メートルもある。  
歩いていると気づかないが、高低差  
を実感しやすいのが大門跡の北西側  
にある吉原公園だろう。公園の外側

は二メートルほど低く、道路から公  
園に上る階段がある。その段差が、  
まさに「お菌黒どぶ」の痕跡をはっ  
きり示している。階段を上った先の  
吉原公園は吉原の三大妓楼の一つ  
「大文字楼」跡地だ。「角海老楼」「稲  
森楼」と並ぶ大見世は、通りを見下  
ろすがごとくそびえていたのだろう。  
大門跡から吉原神社の手前までの

約二五〇メートルが吉原のメインス  
トリート「仲の町通り」である。江  
戸後期、この両脇に引手茶屋が建ち  
並び、その横丁沿いに遊女屋が軒を  
並べていた。そのなかには薦重の馴  
染みの店や、彼の実家・喜多川家が  
営む店に加え、叔父や義兄の経営す  
る茶屋があったのだろう。

いま、吉原を歩くと仲の町通りに

喫茶店が多くあるのに気づく。その  
ほとんどが風俗店の案内所で、かつ  
ての引手茶屋の役割を継いでいるわ  
けだ。当時、やり手婆が手ぐすね引  
いていたであろう光景を想像する。

女性落語家の三遊亭遊七ゆうしちさんに聞

いた話では、ご自身が時々主催する  
吉原ツアーの参加者は、半数以上が  
女性だそうだ。確かに普段は女性が  
進んで来るようなところではないか。  
それだけに、そうした特別な機会に  
見て歩きたいと考えるのかもしれない。  
また、かつてここで働いていた  
遊女たちへの思いに同性として強く  
関心を持つ人が多いのだろう。

吉原遊廓跡の南端あたりに吉原神  
社がある。かつて遊廓内には吉徳稲  
荷社ほか、五つの守護神を祀る社が  
あった。これが明治十四年（188  
1）に合祀され、新たに吉原神社と  
して創建。当初は大門北にあったが



①かつての遊郭の守護神が合祀される吉原神社。②吉原弁財天では関東大震災で犠牲となった遊女を供養する。③吉原最後の料亭の建物を残す桜鍋の店、中江別館「金村」。④遊廓の出入口にある吉原のシンボル「見返り柳」は現在6代目。

## 関東大震災と吉原

大正12年(1923)9月1日正午、伊豆大島付近の海中を震源とした関東大震災が発生。それにより大規模な火災が起き東京一円から横浜・横須賀の町にいたるまで焼いた。死者・行方不明者は推定10万5000人。吉原も例に漏れず、大きな被害を受けた。さらに昭和20年(1945)の東京大空襲、その後の売春防止法などで遊廓の面影を宿した建物はほぼすべて失われている。



【焼失せる吉原遊廓】東京都立図書館所蔵

関東大震災で焼失し、昭和九年（1934）に現在地に移ったという。参拝しようと鳥居をくぐると、小学生の女の子たちが学校帰りに立ち寄って手を合わせているところに遭遇した。近くの学校に通う地元の子どもたちに吉原遊廓の守護神が大切にされているという日常の情景。心がホッと安らぐ思いであった。

# 蔦重の魂は今も菩提寺に――



正法寺のすぐ西側、山谷堀公園に名前を残す「正法寺橋」。かつて吉原と隅田川沿いとを行き交う人々が往来。山谷堀は荒川（現在の隅田川）の氾濫を防ぐために掘られた水路だが、昭和中期に埋められ、橋の名前が名残を伝える。

山谷堀公園をくぐって  
蔦重族の菩提寺へ……

吉原遊廓から土手通りを隅田川へと向かう。通り沿いに細長く延々と続くのが山谷堀公園。かつて隅田川から吉原へ舟で客を運んだ水路で、この公園自体が吉原遊廓の名残を示すものでもある。

この堀には数多くの橋がかかっており、浅草紙（再生紙）をつくる職人が住んでいた紙洗橋はつとに有名だった。そこから少し南へ行つたところに架かっていたのが正法寺橋。

文字通り、近くにある誠向山正法寺の名に由来する。この江戸時代以前からの古刹が、蔦重こと蔦屋重三郎とその一族の菩提寺。現在、寺自体は平成六年（1994）にできたビルになっている。

中庭に蔦重の実家・喜多川家の供養碑が再建されている。寺を訪ね、まずはその墓前に手を合わせて静かに合掌し冥福を祈った。

## 誠向山 正法寺

じょうこうざん しょうぼうじ

天正10年（1582）開山した日蓮宗寺院。当初隅田川沿いにあったが、江戸時代に徳川家から新たな寺領を得て現在地へ。平成6年、現在の建物に改修。

東京都台東区東浅草1-1-15

TEL.03-3873-4488

拝観時間／9:00～16:00

アクセス／東京メトロ「浅草駅」より徒歩約15分



寛政九年（1797）五月六日、

蔦重は四十八歳の若さでこの世を去る。死因は脚気である。当時、白米食が主流だった江戸ではビタミンB1が欠乏して脚気を患う人が多く、参勤交代で江戸へ来た武士が患うこともあり、江戸患いとまでいわれるほどだった。

彼の同志だった石川雅望が、供養碑に刻んだ銘文で臨終の様子を伝えている。それによれば蔦重は丙辰の

# 喜多川柯理墓碑銘

喜多川柯理本姓九山稱葛屋重三郎父重助母広瀬氏  
 寛延三年庚午正月初七日生柯理於江戸吉  
 原里幼為喜多川氏所養為人志氣英邁不修細節  
 接人以信嘗於倡門外開一書舖後移居油  
 街乃迎父母奉養焉父母相繼而歿柯理恢廓産業  
 一傲陶朱之殖其巧思妙算非他人所能及  
 也遂為一大賈丙辰秋得重病彌月危篤  
 寛政丁巳夏五月初六日謂人曰吾亡期在午時  
 因処置  
 家事訣別妻女而至于午時笑又曰場上未擊柝何其晚也  
 言畢不再言至夕而死歲四十八葬山  
 谷正法精舍予居相隔十里聞此訃音心怵神驚  
 豈不悲痛哉吁予霽壤間一罪人餘命惟怙知己  
 之恩過而已今既如此嗚呼命哉

銘曰

人間常行 載在神史  
 通邑大都 孰不知子

石川

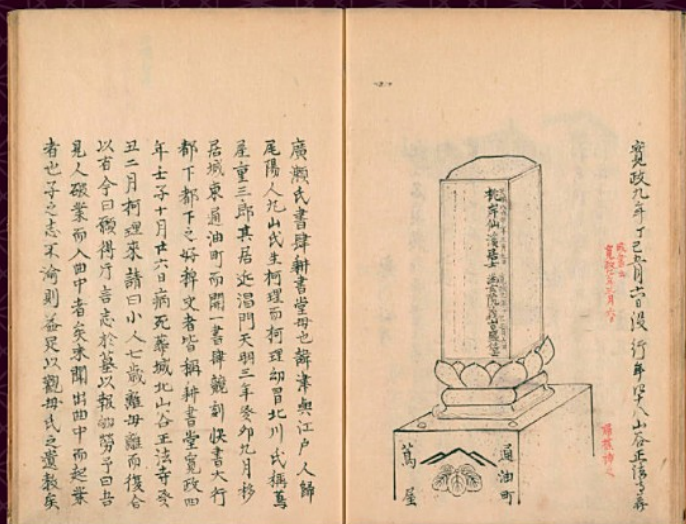
## 実母顕彰の碑文

広瀬氏者書肆耕書堂母也 諱津与江戸人 帰尾陽人九山氏 生柯理而出  
 柯理幼冒喜多川氏稱葛  
 屋重三郎 其居近倡門 天明三年癸卯九月移居城東通油町而開一書肆 競刻快書大行 都下之好  
 梓史者皆稱耕書堂 寛政四年壬子十月廿六日広瀬氏病死葬城北山谷正法寺 癸丑二月柯理來請目  
 小入七歳離母而復合以有今日 願得片言志於墓以報劬勞 予曰吾見人破産而入曲中者矣未聞出曲  
 中而起業者也 子之志不渝則蓋足以觀母氏之遺教矣 銘曰小説九百母德可摘 寛政癸丑莫春南畝  
 子題



### 葛屋重三郎墓所 墓碑銘

正法寺中庭に再建された喜多川家の墓石・顕彰碑。これは手前にある顕彰碑で当時からあった石川雅望・大田南畝の銘文とともに平成六年に復元。



## 『稗史家十伝』はいしかじゅうでん

明治時代に記された作家や文人たちの事績をまとめた書。そのなかに蕨重の記述および正法寺にあった喜多川家の墓碑の絵が描かれている。もちろん破壊・焼失する前のもので、現在の墓碑はこの形に基づいて復元されている。この隣に石川雅望・大田南畝の銘文を刻んだ楕円形の石碑があったことが別の史料『史氏備考』などにあり、刻まれた銘文が書き写されたおかげで後世へ伝わった。

国立国会図書館蔵



「江戸三大毘沙門天」の一角に数えられた正法寺。毘沙門天は本堂に安置される神輿に祀られている。

年(寛政八年)秋、病を患ったという。病状はみるみる悪化したとみられ一カ月後には危篤に陥ってしまう。そして翌年の夏、その日——五月六日を迎える。

蕨重は「私は午の刻(正午ごろ)には死ぬよ」と、枕もとにいる妻らに告げ別れの言葉を交わしたという。やがて昼になると、笑っていわく、「自分の人生はもう終わったはずなのに、まだ(芝居の終演に鳴らす)拍子木が鳴らない。ずいぶん遅いな」そう言い終わった後はもう言葉を発することなく、夕刻に息を引き取った。芝居好きだった蕨重、最期まで粋な人であったようだ。



蕨重家の墓の左隣にある萬霊塔の下に、破損した墓の遺骨を収集し納めてある。この中に蕨重家の遺骨も含まれていると思われ、手厚く供養されている。

雅望は十里離れた場所で訃報を聞いたこと、そのときの思いを銘文に続けている。

「畏れの心と共に心底驚いた。まさか悲痛の極み。まあ私などただの霄壤間の一罪人に過ぎぬ身。そんな余生を君と知り合うことのできた恩遇と共に過ごしたい、今はそんな気持ちである。ああ命の儚さ哉……」

大田南畝は、その寛政九年の元旦と三月二十七日に蕨重宅を訪れている。自身の書き付けに、蕨重の病状が良くないことを記し、心配していた様子である。当時の医学では治せぬ重い病。もはや励ます程度しか術はなかったのだろう。

## 石川雅望 いしかわまさもち

宝暦3年(1754)  
～文政13年(1830)

別名に石川五郎兵衛、五老山人、宿屋飯盛。蕨重三郎と組んで『吾妻曲狂歌文庫』『画本虫撰』などを刊行した同志であった。鹿部部真顔、銭屋金埒、頭光とともに狂歌四天王と称された。

『古今狂歌袋』 国立国会図書館蔵





喜多川家の墓碑。上段左から3番目の「幽玄院義山日盛信士」が薦重の戒名。左隣が母・津子。はっきりしないものが多いが、下段の右端から薦重の妻・貞、薦屋2代目の勇助、2代目の妻、2代目の娘、3代目、4代目と推定されている(正法寺調べ)。



右／丁寧に解説してくれた34世住職の佐野詮修さん。左／墓碑には『稗史家十伝』に描かれたとおり、薦重の家紋や「通油町」の名前も復元されている。

## 同志が刻み込んだ 薦重顕彰の念を守つて

あくる七日、すぐに葬儀が行なわれ、山谷の正法精舎(正法寺)に葬られた。その葬儀に大田南畝も参列している。南畝はかつて薦重の母親が亡くなったとき、薦重の頼みで母子の顕彰文を起草し、供養碑に刻んでいた。そこには柯理(薦重)本人の言葉として「私は七歳で母と生き別れたが、のちに再会でき、一緒に暮らすことができて今の自分がある。願わくば片言の言葉を墓に捧げ、その苦勞に報いてやりたい」と言ったこと。それに対して南畝は薦重の母への孝心

の尊さを讃えたこと。それらの内容を合わせ碑文にして刻んでいる。同志二人の名も、現在の境内に再建された供養碑に刻まれている。

「当山も江戸にある寺の宿命で何度も火災や地震の被害を受けてきました。薦重が眠る喜多川家の墓は関東大震災では無事だったのですが、東京大空襲(1945)で破壊されてしまいました。現在の薦屋家先祖累代墓碑と石川雅望・大田南畝の碑文を刻んだ供養碑は先代の父・詮学が平成の初め頃再建したものです」

三十四世・住職の佐野詮修さんが、寺の歴史や喜多川家の墓のことを説明してくださった。そのように破損

して散らばった遺骨は歴代の住職がかき集め、都度地下室に封印して守り続けてきたそうだ。

「薦屋家先祖累代墓碑の隣に萬霊塔を建て、本堂建て替えの際にその遺骨群を納めました。薦屋家の遺骨の一片でも碑のそばに置きたいの思いを込めたと聞いており、いまは私が父の遺志を継いで日々供養を続けています」と佐野住職。

薦重および一族の遺骨を納めた墓や墓石は失われたが、代々の住職が守った墓所は確かにここに存在し続ける。江戸の文化の担い手として一世を風靡した薦重。その魂は今もここに宿り続けているのだらう。

## 歴代住職が菩提を弔い続ける



### 高尾太夫の墓

高尾は吉原で最も有名な太夫として名を馳せた伝説的な存在。落語の演目「紺屋高尾」などでも知られる。高尾を名乗った太夫は11人おり、吉原に近い台東区の春慶院には2代目の墓と伝わるものがある。仙台藩藩主の伊達綱宗に身請けされたのち、斬殺されたなどの民間伝承も伝わる。

写真／遠藤純

お目当ての遊女を探す

# 吉原細見の見方

吉原で遊ぶためのガイドブックが「吉原細見」。葛重も自身が生まれ育った地縁を生かし、発行していた。吉原の各町ごとに遊女屋を列記し、遊女屋ごとにその見世に現在居る遊女の名前を列挙。その見方を紹介しよう。  
文／上永哲矢

## 通りの名前

大門から水道尻までのメインストリート「仲之町」を中心にその両側に京町一丁目と二丁目、角町、揚屋町、江戸町一丁目と二丁目、伏見町と7つのエリアに分かれ、それぞれに通リ(横丁)があった。

## 楼主名

妓楼の経営者である主人の通称で、これが屋号としても使われた。金儲けのため、人として大切な仁・義・礼・智・忠・信・孝・悌の8つの心を忘れたとし「忘八」(ぼうはち)と呼ばれることもあったとか。

## 妓楼のランク

店にも大見世・中見世・小見世の別があり、■が大見世。松葉屋に付いているマークは中見世。高級遊女は大見世にしか所属していなかった。大見世には茶屋を通じ、取り次いでもらうというルールも。

## 『青楼十二時 續・酉ノ刻』

せいろういゅうにとき つづき・とりこく

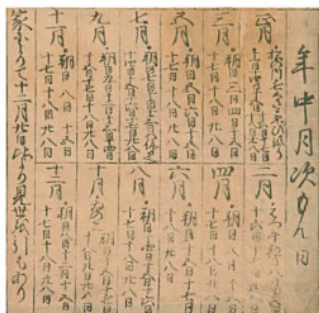
吉原の十二時辰(24時間)の遊女の生活を描いた浮世絵。12枚揃のうちの1枚。酉(とり)の刻は現在の17時から19時に該当し、大体日没の時間をあらわす。その時刻は季節により変わるので夏は長く、冬は短い。

喜多川歌麿筆 18世紀  
東京国立博物館所蔵  
出典:ColBase (<https://colbase.nich.go.jp/>)



## 紋日とは？

物日(ものび)が転訛した呼び方で、日常と違ったハレの日をいう。年中行事や婚礼などが行なわれた。吉原では遊客誘致のため独自に定め、桜を植えたり灯籠を飾り立てたり、踊りを披露する行事を企画した。



## 遊女のランク

最高級の「太夫」、その次に「格子」、「呼び出し」、「散茶」と続く。ただ時代によって呼称は変わり、安永年間以降は「散茶」が最上位に。その中で呼出、昼三、附廻(つけまわし)と格付けされた。



※宝暦年間(1751~1764)以降は太夫や格子が消える。「散茶」が高級遊女とされ「花魁」と呼ばれた。

## 『吉原細見』

よしわらいけん

元禄12年(1699)頃から発行が見られ、享保17年(1732)から定期的に刊行され、それ以後は明治20年代までの200年近く、年2回の刊行が続けられていた。日本で最も長い定期刊行物といわれる。細かい遊びの作法などは書かれていなかったが、どの見世にどんな遊女がいるのか一目瞭然であったことからニーズが高かった。ただ、新たな版が出ると旧版は処分されることが多かったためか現存例は少ない。

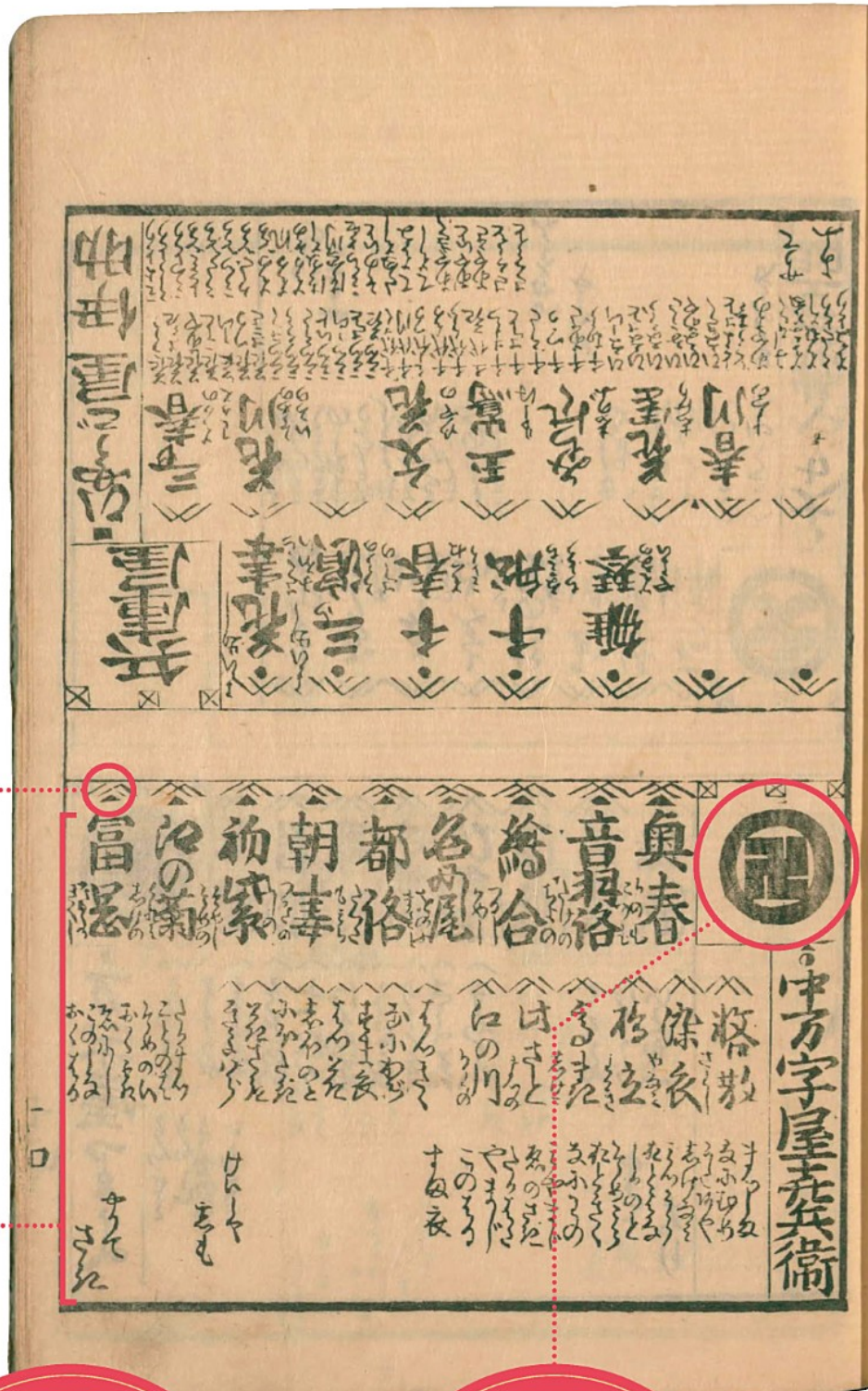
寛政7年(1795) 国立国会図書館蔵

## 遊女の名前一覧

遊廓で使われた名で、もちろん本名ではなく源氏名。とくに有名だったのが高尾、吉野、夕霧。一代限りではなく妓楼を代表する遊女が名乗った。浄瑠璃や歌舞伎、落語にも登場する名前もある。

## 屋号のマーク

その店のシンボルを示したもので、軒先にあった看板や暖簾にあしらわれていた。多くは家紋であったが、その店で独自に作ったマークのこともある。ひと目でわかるものが望ましかったと思われる。



天才絵師の面影を探しに

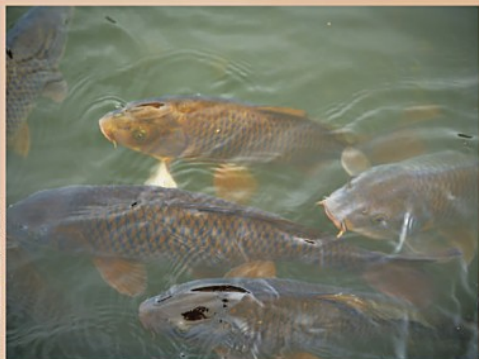
# 歌麿と商都・栃木

〔栃木県栃木市〕

人気絵師となった歌麿の足跡を追うと、意外なことに北関東、  
栃木とのかかわりが浮かんてくる。歌麿はなぜ栃木の地を訪れたのか――。

取材文／阿部文枝 撮影／米屋こうじ





左／舟運で栄えた巴波川を遊覧船が行く。船頭さんが町の歴史と文化を紹介し、「栃木河岸船頭唄」を聴きながら、白壁の土蔵の風景を眺める。乗船時間約30分。中／巴波川をのぞきこむと自由に泳ぐ鯉の群れも。右／幸来橋の袂にある江戸時代の栃木の様子を描いたレリーフ。

## 栃木の豪商は狂歌を通じて 江戸の文化人と交流していた

栃木市は蔵の街として知られる。

江戸時代は例幣使街道の宿場町であり、舟運の集積地として栄えた町だった。今も巴波川沿いには豪壮な白壁の土蔵が並び、江戸時代の繁栄を偲ぶことができる。

案内していただいた作家・高橋克典さんは、歌麿と栃木とのかかわりを、『青楼にて 喜多川歌麿「雪月花」異聞』という小説にまとめた。

執筆の際に歌麿の生涯を調べた高橋さんは、「歌麿は江戸以外にほとんどゆかりの地がありません。唯一の例外が栃木市で、歌麿が栃木で描いた作品が残っていることから、歌麿が栃木を訪れていることはほぼ確実といつてよいでしょう」

当時の栃木は北関東随一の商業都市だった。江戸との交易により、経済だけでなく、文化的にも発展していた。豪商が多く、江戸にも支店を持つていたため、江戸の文化を吸収できる環境にあった。

豪商たちは江戸で流行した狂歌にもいち早く関心を持ち、自ら狂歌師となり、狂歌連をつくって活動していた。彼らもまた江戸の狂歌師と同

じように、ウィットに富んだ狂歌名を名乗った。例えば、豪商釜釜の四代目・善野喜兵衛の狂名は通用亭徳成、町年寄・渡邊源左衛門は田畑持磨など、経済人と文化人を兼ねる立場の栃木人が活躍していた。

狂歌を通じて江戸の狂歌師たちと交流があったことを証明する史料も残っている。栃木の旧家では、栃木の狂歌師たちの狂歌六十首を、江戸における狂歌の第一人者である四方赤良（太田南畝）が添削した直筆の文書が確認されている。また、蔦重が版元として出版した『新玉狂歌集』や『狂歌才蔵集』『狂歌千里同風』などの狂歌集には、栃木の狂歌師の狂歌が選ばれている。

絵師で狂歌師でもある歌麿も、栃木とのつながりが深かった。しかし、栃木と歌麿の関係性は歴史の中に埋もれて、地元栃木でも知らない人が多くなった。

「歌麿が栃木で描いたといわれる作品があります。素晴らしい肉筆画で、この作品を知ってから、歌麿と栃木とのかかわりを小説に書きたいと思ったのです」

高橋さんをして小説を書かせる動機となった、その作品を鑑賞するために栃木市立美術館を訪れた。



案内人

### 高橋克典さん（作家）

昭和28年（1953）長野県生まれ。著書に『お月見横丁のトラ』『レストラン藤木へようこそ』（以上、平原社）、『神の名前』（未知谷）。歴史を題材にした『青楼にて 喜多川歌麿「雪月花」異聞』（未知谷）では、一方で歌麿の生涯を、もう一方で歌麿を題材に小説を手がけながらも、実家・栃木の父との関係に苦悩する現代作家を描く。

## 女達磨図

寛政年間に描かれた肉筆画。歌麿が美人大首画で元祖とされる作品か。朱衣の輪郭は濃い墨で力強く大胆に、女性の顔や髪の毛は薄い墨で丁寧に描かれている。大胆かつ繊細な筆遣いが歌麿らしい。

寛政2～5年（1790～93）頃  
紙本墨画着色 一幅 栃木市立美術館所蔵  
写真は高精細複製画を複写

『青楼にて  
喜多川歌麿  
「雪月花」異聞』  
読者プレゼント  
→P120



# 歌麿の肉筆画・高精細複製画を所蔵している 栃木市立美術館

## 雪月花(高精細複製画)展示風景

江戸の三大遊里・北の「吉原」、南の「品川」、東の「深川」を描いた、「雪月花」3作の高精細複製画を展示。女性の動きだけでなく、廊ごとの格や風習の違いなどを細かく描いている。スケールの大きな作品である。

歌麿の肉筆画最高傑作  
「雪月花」高精細複製画を見る

栃木市立美術館では、栃木市ゆかりの作家の収蔵品展を開催中だった。高橋さんは展示室で、大きな三幅の作品を前にして語りだした。

「この作品が、私が惚れ込んだ歌麿の『雪月花』三作です。これは高精細複製画ですが、歌麿の画力の凄さを存分に観てとれます」

展示されているのは、右から『深川の雪』、『品川の月』、『吉原の花』の高精細複製画。

季節感あふれる風景とともに、遊郭での女性たちの様子が描かれている。版画の美人大首絵とは違う、生き生きと働き、楽しく遊ぶ、さまざまな姿態の女性たち。作品は、歌麿の最高傑作の呼び声が高い。

各作品の制作時期は、最初に描か

れたといわれる『品川の月』が天明八年(1788)頃、次の『吉原の花』が寛政年間、『深川の雪』が享和・文化年間とされる。先の二作は田沼時代が終わり、寛政の改革が始まった頃に当たる。出版への取り締まりが厳しくなった時期だ。

「周囲がきなくなっていたので、歌麿は江戸の町から逃げ出し、頼った先はパトロンとしての財力があり、芸術文化への理解もある、栃木の豪商だったのではないだろうか」

歌麿は、栃木の豪商、釜喜の四代目善野喜兵衛(狂歌名:通用亭徳成)と親しく、その叔父にあたる善野伊兵衛(初代釜喜)の依頼で「雪月花」三作を描いたといわれている。高橋さんによれば絵の依頼主を特定できる証しがじつは、絵の中に隠されているという。

「三作に共通して描かれている家紋



## 栃木市立美術館

栃木県栃木市入舟町7-26  
TEL.0282-25-5300

開館時間/9:30~17:00

休館日/月曜(祝日の場合は翌日休館)、祝日の翌日(土日祝の場合は開館)、年末年始、展示替えのための整理期間 観覧料/展覧会により異なる アクセス/JR、東武鉄道「栃木駅」より徒歩約20分



## 深川の雪

雪景色を背景に、総勢27名の芸者や仲居などが描かれている。辰巳芸者と呼ばれる深川芸者の粋な姿を表現して、全体の色彩には渋みを感じられる。3作が明治期に海外に流失した後で、この絵だけは日本人の手で昭和14年に日本に戻っている。唯一、国内に収蔵されている。

「深川の雪」高精細複製画 栃木市蔵 原本江戸時代  
享和2～文化3年(1802～06)頃 紙本着色 岡田美術館蔵



## 品川の月

3作のうち最初に描かれた作品とされる。座敷にいる女性の数は一番少なく、色味も淡い色彩で描かれている。中央に遊女らしき女性を配置。座敷の向こうには品川の海が広がり、水平線や遠くの島まで描かれている。遠近法の効果で、空間の奥行きが見事に描かれている。

「品川の月」高精細複製画 栃木市蔵 原本江戸時代 天明8年(1788)頃  
紙本着色 フリーア美術館蔵(アメリカ・ワシントンD.C.)



## 吉原の花

総勢51人の女性と一人の幼児が描かれている。この男の子は歌麿本人ではないかといわれる。金色の雲、咲き乱れる桜の花、女性たちの着物も色とりどりで、左下には花魁道中の一行も描かれている。吉原の絢爛豪華な世界はそれだけで幕府への挑戦といってもよい。

「吉原の花」高精細複製画 栃木市蔵 原本江戸時代  
寛政3～4年(1791～1792)頃 紙本着色  
原本「フズワズ・アセーニウム美術館蔵(アメリカ・コネチカット州ハートフォード)」



右が『鍾馗図』、左が『三福神の相撲図』。2点の肉筆画は、1975年に栃木県立美術館の「県内収蔵古美術名品展」に出品された後、行方不明になっていた。2010年、再び所在が確認される。現在は栃木市立美術館所蔵。

## 鍾馗図

淡彩絵。鍾馗とは中国の道教で疫病よけ、魔よけの神とされ、日本には平安時代に伝わった。江戸時代には関東では端午の節句に絵や人形にした。上方では屋根の上に焼き物の鍾馗を飾った。剣を持ち眼を見開いて睨みつける、荒々しい風貌だが、歌麿の描く鍾馗は筆のタッチが優しく、髪の毛までもが緻密に描かれ、優しげに見える。

紙本着色 寛政3～5年(1791～1793)頃



があります。それが釜喜の家紋と一致するのです」

『品川の月』では右から二人目の女性、『深川の雪』では左から三人目の女性、『吉原の花』では男の子を抱いている女性の、それぞれの着物に描かれている家紋が、九枚笹。善野三家の家紋だった。歌麿は幕府から禁じられた判じ絵で、さりげなく絵の注文主を著わした。支援してくれる善野家への思いと幕府への抵抗への志が伝わってくる。

では「雪月花」三作はどこで描かれたのか。以前はこれほどの大作は江戸で描かれ栃木に持ち込まれたといわれていた。研究者によれば、使った和紙は竹製の和紙で、月と雪は二枚、花は八枚合わせになっていることから、最近では素材を持ち込み栃木で描いたという説が有力になっている。

## 近年に発見された肉筆画『女達磨図』の美しさ

栃木市立美術館はそのほかにも、近年になって発見された歌麿の肉筆画三作を収蔵、随時展示している。歌麿の肉筆画で現在確認されているものは約四十点。ゆかりの土地、栃木に残る三作もの絵は貴重な歌麿作

品といえる。

肉筆画三作のうち、歌麿らしい女性を描いた絵として評価が高いのが『女達磨図』だ。平成十九年(2007)に栃木市内の民家で発見された。紙本墨画淡彩。制作時期は寛政二年(1790)～同五年(1793)頃。

面壁九年の修業をした達磨と、勤め十年の遊女の苦行を対比させた絵で、達磨とはいえ、静かな美しさを湛えた美人画となっている。替は柳園外史という人物によるもので、江戸時代に栃木町にあった片柳家の者といわれる。このことから歌麿と栃木との関連性が伺われる。

浮世絵が専門の、栃木市立美術館の形井杏奈学芸員は、「達磨の姿で描かれているためか、遊女を描いた美人画などよりも艶めかしさを感じさせない絵となっています」と話す。

肉筆画『鍾馗図』、『三福神の相撲図』も平成二十二年(2010)に存在が確認され、現在は市立美術館の所蔵となった。ともに寛政三年(1791)～同五年(1793)の制作とされる。

この二作も美人画ではないが、歌麿らしい繊細な筆遣いが見られる。三作の肉筆画がどのような経緯で描



### 三福神の相僕図

七福神のうち、大黒天と布袋が相撲をとり、恵比寿が行司を務めている。三福神による、愉快で滑稽な絵だ。三福神が相撲をとる話は『御伽草子』に出てくる。子どもの健やかな成長を願って描かれることが多い絵柄。歌麿に依頼が来た地元の人の願いだったのではないだろうか。

紙本墨画淡彩 寛政3～5年(1791～1793)頃

「出る杭の打たるる事をさとりなば  
ふらふらもせず後くひもせず」  
出る杭は打たれる、とは寛政の改  
革で取り締まりの対象になった蔦重  
であり、歌麿である。狂歌は徳成の  
作だが、取り締まりを逃れるために、

野喜兵衛の作だ。

実はもう一つ、栃木には歌麿を語る上で重要とされる肉筆画があった。『巴波川くい打ちの図』だ。巴波川で杭を打つ二人の男を描いた淡彩絵。単なる風景画のようであるが、この絵にも隠された意図が込められているという。絵に添えられた狂歌は狂歌師・通用亭徳成、つまり釜喜の善

かれたかはわかっていない。  
「善野家が大作を注文した場合、注文主や周辺の人などが合わせて依頼したとも考えられます。歌麿が大仕事の際に、収入を得るために筆を揮った可能性がります」と形井学芸員は推察する。



### 幻のくい打ち図はどこに？

『巴波川くい打ちの図』には『行年43歳、歌麿筆』の署名がある。歌麿の肉筆画だ。1936年に美術専門誌『美術日本』で紹介されたものの現在は作品の所在がわからなくなっている。ほかにも栃木には存在を指摘される、歌麿の絵があるという。栃木のどこかで眠っているのか。これから発見されるかもしれない。

巴波川くい打ちの図 画像提供 / 大木洋三

江戸を離れて栃木に来た歌麿も思いは同じ。逆境の中でも、ふらふらとしないで、後悔もしないと決意表明をしている。  
「藩のお抱え絵師などとは違い、歌麿はあくまでも町絵師でした。すでに名声も得て暮らしには困らなかつた。それでも、歌麿は絵を描きたい、自分を表現したいという思いが強かつたのでしよう。自分が描きたい絵を描くためには、時の権力者に抗うだけの覚悟を持っていた。歌麿は生涯を通じて反骨の町絵師を貫いた人間でした」(高橋さん)



定願寺で大木さんに話をうかがう。  
この本堂で明治12年「雪月花」3作が公開された。



## 近龍寺

応永28年(1421)創建の浄土宗寺院。墓所には善野三家の墓がある。歌麿を支援した釜喜4代目・善野喜兵衛(狂名・通用亭徳成)の墓は右から3基目。

栃木県栃木市万町22-4 TEL 0282-22-0802

歌麿が栃木に来なければ傑作は生まれなかった

美術館を後に、さらに歌麿ゆかりの地を訪ねた。市内旭町にある定願寺。ここでは郷土史家として約五十年にわたり歌麿を研究してきた大木洋三さんに「雪月花」三作を巡る数奇な運命を語っていただいた。

「定願寺において、明治十二年(1879)に近隣の諸家が所有する書画の展観があり、「雪月花」三作も出品されました。長く釜伊に所有されて人の目に触れられなかった歌麿の最高傑作が世に出た瞬間でした」しかし、「雪月花」三作は、明治二十年(1887)までには善野家から



## 巴波川の水運と日光例幣使街道

例幣使とは毎年、京都の朝廷から日光東照宮へ幣帛を奉納する勅使。例幣使街道は京都から中山道を通り、倉賀野から太田、佐野、富田、栃木、合戦場、金崎を経て、楡木で日光西街道と合流、日光へと至る。栃木は宿場町として栄え、巴波川の水運の要所でもあり、当時の賑わいは大変なものだった。



## とちぎ歌麿交流館

絵草紙屋の店先を再現。歌麿と栃木の関わりを示す資料を展示する。  
栃木県栃木市倭町10-2 TEL.0282-21-2573(平日8:30~17:15) 開館時間/11:00~15:00(土日祝~16:00) 定休日/火~木曜(祝日は開館)、年末年始 アクセス/JR、東武鉄道「栃木駅」より徒歩約15分

たしかに歌麿は栃木にいた。栃木で浮世絵を描いていた。目を閉じれば、絵筆を手にとって絵に向かう、歌麿の燃えるようなまなざしが見えてくる。

海外に流失。現在は雪を箱根・岡田美術館が所有するほか、「月」は米・フリーア美術館、「花」は米・ワズワース・アセーニアム美術館が所有している。平成二十九年(2017)には、岡田美術館において、百三十八年ぶりに三作(一部高精細複製画)が一堂に会した展覧会が行なわれた。郷土史家として歌麿と栃木の関わりをもっと知ってもらいたいという大木さんは「歌麿を活かしたまちづくり協議会」の顧問も勤めた。協議会は毎年「歌麿まつり」を開催、歌麿道中をはじめ、町ぐるみのイベントに発展させた。大木さんは、以前は地元でも知らない人が多かったという、栃木と歌麿との関わりや「雪

月花」三作の存在を地元栃木の市民に知らしめた、功労者である。「栃木の豪商たちが歌麿を匿って、パトロンとして支援しなければ、歌麿はどうなっていたでしょうか。不遇の時代の歌麿に最高傑作『雪月花』三作を描かせて、浮世絵師としての歌麿をさらに飛躍させたのも栃木の豪商たちでした。歌麿の芸術に寄与したことを栃木の人間として郷土の誇りと思っています」歌麿にとって、栃木はどのような場所だったのだろうか。

「歌麿にとっては第二の故郷のような土地でした。絵を描きやすい町だったでしょう」と案内人の高橋さんは断言する。

## 街道沿いに残る味噌蔵

例幣使街道沿いにある、江戸時代から続く老舗の味噌蔵。江戸時代の風情を残す土蔵5棟は国の登録有形文化財。1781年に油屋として創業。幕末より味噌の製造を始め今日まで続いている。料理用味噌の販売のほか、店では田楽が味わえる。人気の田楽盛り合わせは、豆腐田楽・いも田楽・こんにゃく田楽。素材ごとに塗る味噌の種類を変えている。ほかに自家製クラフトビールを常時4種類用意。



### 油伝味噌

栃木県栃木市嘉右衛門町5-27

TEL.0282-22-3251

営業時間／10:00～16:00(土日祝～17:00) 定休日／火、水曜  
(祝日は営業) アクセス／東武  
鉄道「新栃木駅」より徒歩10分

## 日光例幣使街道

現在、栃木の大通りにあたる部分は道が広く車の通りも多くなってしまっているが、市立美術館よりも北方にある嘉右衛門町周辺に行くと、面影の残る町並みに。ゆっくりと散策してみたい。

蔦重が生きた時代とは？

# 田沼意次と 松平定信の時代

いつだって蔦重のような出版業界は政治情勢に大きな影響を受ける。  
長い江戸時代の中で教科書に載るほど有名な政治家である二人、  
田沼意次と松平定信の政治に対して人々はどんな反応をしていたのか。

文／山村竜也（歴史作家）

## 大出世を遂げる意次

葛屋重三郎が活躍した時代、徳川幕府内で権力を握っていたのは、老中の田沼意次だった。一般に賄賂政治家として悪名高い意次だが、よく調べると、それだけではない優れた面が見えてくる。

意次は、徳川御三家の紀州藩主・徳川吉宗の小姓をつとめた田沼意行の長男であったが、意行は初め足輕身分であったため、田沼家の資格は大変低いものだった。その後、吉宗が八代將軍となったことにより、意行もそれにともなって幕臣の列に加わった。

子の意次は、將軍吉宗の世子である家重の小姓に拔擢され、享保二十

年（一七三五）十七歳の時に家督を継ぐ。そして延享二年（一七四五）に家重が九代將軍に就任すると、それに従って江戸城本丸に移ったのである。

家重には言語障害があり、その言葉を聞き分けられるのは大岡忠光という者と意次だけであったという。そのため意次は家重から全幅の信頼を置かれ、寛延元年（一七四八）に二千石に加増されている。

同四年（一七五一）には御側御用取次に任じられ、これは將軍と老中の間を取り次ぐ重要な役職であったから、意次がいかに家重に重用されていたかがうかがえるだろう。

宝暦五年（一七五五）、五千石に加増され、さらに同八年（一七五八）

には遠江相良に一万石の所領を与えられた。これにより意次は旗本から大名に取り立てられたのだった。

そんな意次を重用した家重は、宝暦十一年（一七六一）に没するが、十代將軍となった家治からも意次は引き続き信任された。このことについては逸話があり、いまわの際の家重が、「主殿（意次）はまとうどのものなり。行々こころを添えて召仕はるべき」と家治に語ったというのである（『徳川実紀』）。

まとうど（全人）というのは「純朴で正直な人」「きまじめな人」という意味であるから、田沼意次は正直者なのでこれからも側に仕えさせよと家重は遺言したことになる。

この遺言を守った家治のもので、

やまむら・たつや

1961年東京都生まれ。中央大学卒業。歴史作家、時代考証家。江戸時代、幕末維新史を中心に著書の執筆、時代劇の考証、講演活動などを積極的に展開する。著書に『葛屋重三郎～江戸のメディア王と世を変えたはみだし者たち』（監修、宝島社）、『幕末維新解剖図鑑』（エクスナレッジ）、『世界一よくわかる幕末維新』『世界一よくわかる新選組』（祥伝社）など。NHK大河ドラマでは「べらぼう～葛屋重栄華乃夢噺～」をはじめ「新選組!」「龍馬伝」「八重の桜」「西郷どん」など多くの時代考証に参加する。

# 田沼意次

享保四年(1719)～天明八年(1788)

意次はさらなる出世を続けていった。明和四年(一七六七)、側用人に昇格し、二万石に加増。同九年(一七七二)には三万石に加増され、ついに老中の地位についた。

意次の場合、特例として老中に側用人を兼ねていたため、新参の老中でありながら將軍家治の側近として権勢をふるうことができた。そして老中首座の松平武元<sup>まつだいらたけもと</sup>らが没したこと<sup>まつだいらたけもと</sup>で、意次の権力掌握は完全なものになり、以後「田沼時代」と呼ばれる絶頂の時期を迎えることになったのである。

## 意次の重商主義政策

意次の政策の特色は、農地から年

貢を取り立てることだけに歳入を頼るのをやめ、商業を振興することで経済を活性化させることを考えた。

農地には限りがあるから収入には限界があるが、商業を発展させることには無限の可能性があるという考え方である。

そのためにまず行なったのは、「株仲間の奨励」だった。株仲間とは商業の同業者による組合であるが、幕府がこの組合を組織することを積極的に奨励し、彼らに商売の独占権を与えるかわりに、運上金・冥加金と呼ばれる税を徴収した。この税が幕府にとっての新しい収入となったのである。

次に手がけたのは、「通貨政策」。

いくつかの新貨の鑄造を行ない、原料の調整によって通貨発行益を幕府

が得ることができた。また従来は秤量貨幣<sup>じょうりょうかへい</sup>だけだった銀貨に、「五匁銀<sup>ごもんぎん</sup>」「南錠二朱銀<sup>なんりょうにしゆぎん</sup>」といった初めての計数貨幣を鑄造して導入し、金・銀・

銭の三貨の統合をめざした。不便であった三貨の統合がなされることで、全国的な経済の活性化をはかろうとしたのだ。

こうした重商主義政策によって商業活動が盛んになると、社会は活況を呈したが、金銭にこだわりすぎることは武士の気風に反するとして幕府内には反対派も少なくなかった。

また、商人たちは便宜をはかつてもらおうと田沼屋敷に連日押し寄せ、

大量の贈り物<sup>おくりもの</sup>と賄賂<sup>わいろ</sup>が届けられた。

意次自身は賄賂を得るために政務を行なっているつもりはなかったが、自然と意次のまわりでは金が動いたため、金に汚れた賄賂政治家と陰口をたたく者もしだいに増えていった。

不運なことに、天明年間に入ると東北地方を中心に「天明の大飢饉」が起き、数年にわたって大凶作にみまわれた。同時に浅間山が噴火して大災害となる。こうしたことまで、田沼の政治が悪いせいだと人々は信じた。

そんななか、天明四年(一七八四)三月に意次の長男の若年寄・田沼意知<sup>このまさこと</sup>が江戸城内で旗本の佐野政言<sup>さのまさこと</sup>によって殺害される事件が起こる。殺害

どうしても金銭のイメージの強い田沼意次。それもそのはずで幕府の収入はこの頃赤字の一端をたどっており経済政策が急務だった。

「田沼意次像」  
東京大学史料編纂所蔵模写

の動機は、賄賂を贈ったのに出世で  
きないことを佐野が怨みに思ったと  
もうがさだかではない。

失意の意次は、翌年、將軍家治か  
ら五万七千石に加増されたが、天明  
六年（一七八六）、その家治が病死  
した。幕府内に味方の少ない意次に  
とって最大の拠り所であった家治が  
没したことで、八月に意次は失脚し  
老中を罷免された。

田沼意次の時代は、毀譽褒貶はあ  
ったが、経済が活性化し、それが追  
い風になって庶民の文化が花開いた  
時期であったのは間違いない。その  
風に乗って蔦屋重三郎が世に出、新  
たな浮世絵文化を創り上げたことは  
特筆されるべきだろう。

## 庶民に厳しい定信の政策

家治に代わって十一代將軍となっ  
たのは、徳川家斉。そして天明七年  
（一七八七）に老中首座となり、権  
力を握ったのは松平定信だった。

定信は徳川御三卿の田安家に生ま  
れ、白河松平家に養子に入っていた。  
早くから英明を知られており、田沼  
意次が失脚すると、御三家、御三卿  
の推挙により幕閣の中枢に座ること  
になったのである。

定信が天明七年から寛政五年（一  
七九三）にかけて行なった政治改革  
を寛政の改革という。おもな内容は、  
儉約令を出して質素儉約を奨励した  
こと。棄捐令により札差に借金して

困窮する旗本・御家人の救済にあた  
ったこと。俵米として諸大名に飢饉  
に備えるために穀物の備蓄を命じた  
ことなどがある。

ただし、厳しい出版統制が行なわ  
れ、戯作者の山東京伝、恋川春町、  
それに版元の蔦屋重三郎らが処罰さ  
れた。田沼時代とは打って変わった  
扱いに、出版人のみならず市井の庶  
民は困惑した。

かつては田沼意次を賄賂政治家と  
して非難し、松平定信の政治に期待  
した人々も、厳しすぎる改革に落胆  
するばかりだった。そんな心情が、  
次のような落首に込められたことは  
よく知られている。  
「白河の清きに魚もすみかねて 元

のにごりの田沼恋しき」

白河（定信）があまりに清すぎる  
ものだから、魚も住みにくくなって、  
元のにごった田の沼を恋しく思っ  
ているという意味である。川も政治も、  
清らかすぎるのは考えものというこ  
とだ。

結局、寛政五年に定信は老中を辞  
任する。改革を始めてまだ六年、志  
なかばでの退場だった。

それを待っていたかのように、翌  
年、蔦屋重三郎の耕書堂は東洲斎写  
楽をデビューさせ、大判役者絵二十  
八枚を一気に発売する。江戸の庶民  
は歓喜して迎えたが、庶民にとって  
は、この程度のにごりが一番住みや  
すかったということだろう。

# 松平定信

宝暦八年（1758）～文政十二年（1829）



寛政の改革は質素儉約や文武奨励  
のイメージが強い。飢饉を乗り越  
えたとはいえ、江戸の民衆の肌に  
彼の政治は合わなかったようだ。

〔松平定信肖像〕  
東京大学史料編纂所蔵模写



# 人生を垣間見る 大人の棲み家

## BESS いへ 程々の家

住まいとして造り過ぎず、飾り過ぎない「程々」の潔さ

家を見れば、そこで暮らす人の品性・品格におよそ見当はつくものだ。

この家は合理性一辺倒ではない。古来日本人が紡いできた感性に訴えかける伝統的価値に目を向けている。それは何事も「程々」をもつてよしとする絶妙なバランス感覚だ。

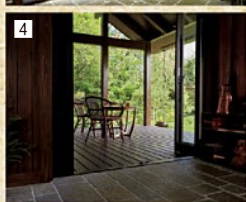
しなやかさと粗々しさ、女っぽさと男っぽさ、正直さといかがわしさ、光と陰、合理性と感性、過去と未来など……。相反する要素を併せ持つ懐の深さを感じさせつつ、住まいとして造り過ぎず、飾り過ぎない、まさに程々の潔さが魅力といえる。

骨太な柱と梁に支えられ空へと伸びていく大屋根が印象的だ。低く構えた佇まいは落ち着きと風格を感じ

させる。内と外を繋ぐ開放的な軒下空間も特徴だ。土間から直接出られる広縁は、家族や客人が心置きなく過ごせるコミュニケーションスペースとなってくれるだろう。

玄関を入ると土間が広がっている。ここは薪ストーブを置くなどリビングとしても寛げる。なんと融通無碍な空間であることか。土間の上方は大屋根を感じさせる登り梁が駆け登る吹き抜けになっている。木のぬくもりを感じさせる室内空間に優しく外光が差し込む。視線を遮りながらも風光を通す簾戸が涼しげだ。

流行に惑わされることなく、伝統的な日本家屋のエッセンスを巧みに取り入れ、現代に日本人として生きる意味を問う。その答えに将来の人生を垣間見ることができる、大人の棲み家といえるだろう。



1 大屋根と軒下の広縁が外観の大きな特徴。2 登り梁と網代仕上げの天井が力強さを演出。天窓からは外光が注ぐ。3 広々としたリビングスペース。写真奥がキッチンスペースだ。4 土間から広縁へと直接出ることができる。

BESS 程々の家

2,756万円～

株式会社アールシーコア [www.bess.jp](http://www.bess.jp)

## 第二章

寛政三年(1791)～寛政十年(1798)

# 葛重、再起を図る 浮世絵のパワー

身代半減の罰を受けても、再び立ち上がる葛重。  
浮世絵の新ジャンルを開拓するだけでなく、  
まだ誰も知らない絵師をプロデュースするに至る。

文／阿部文枝(P80～P85)、角田陽二(P86～P97)

寛政三年頃(1791) 曲亭馬琴が耕書堂の番頭になる  
寛政四年(1792) 母・津与の死去  
寛政六年(1794) 五月より写楽の役者絵を刊行  
寛政七年(1795) 二月以降写楽の版画の出版が止まる  
寛政八年(1796) この頃より脚氣を患う  
寛政九年(1797) 『身体開帳略縁起』の刊行。

三月に危篤状態となり、  
五月十六日に死去。享年四十八。



### 『人心鏡写絵』

ひとこころかがみのうつしえ

巻頭と巻末に山東京伝が講釈する  
様子が描かれる。その中の人物に  
「富士山形に葛の紋」の羽織を着て  
いる人物が見て取れる。この人物  
は明らかに葛重である。ここでも  
黄表紙本に登場している。

山東京伝作 北尾重政画、寛政8年(1796)  
国立国会図書館蔵

どこまで分かっている？

# 写楽の正体

謎の浮世絵師として、多くの人の興味を集める写楽だが、学術的にはその正体と目される人物が特定されている。それは一体なぜか？ 浮世絵研究の第一人者にその道筋を教えてもらった。

文 浅野秀剛 (大和文華館館長、あべのハルカス美術館館長)

## 葛屋重版役者絵と写楽

葛屋重三郎が役者絵の刊行を開始するのは寛政期(1789～1801)からである。なかでも、最も早いと思われるものは、勝川かつかわ春朗(葛飾北斎しゅんろう)の細判作品で、現時点で見出されている最も古い作品は、寛政2年1月の歌舞伎興行に取材した細判役者絵である。その約2年後の寛政3年冬頃、葛屋は、絵師を北斎から勝川春英に変えた。詳細は割愛するが、葛屋版、春英画の役者絵は、寛政6年3月の歌舞伎に取材した作品が最後となる。そして写楽。写楽は、しかるべき浮世絵師

に弟子入りして役者絵を学んだ絵師ではなく、いわゆる素人絵師と推定される。かつて『週刊朝日』誌に連載された「山藤章二の似顔絵塾」に投稿した人というイメージである。役者の個性を独得の表現で捉える能力があるが、絵師としての修練を積んだわけではないので、多面的で多様な表現は難しい、といった人物ではなかったかと思われる。その写楽を、葛屋は発見し、その非凡な個性に賭けたというわけである。結果、春英から写楽に乗り換え、寛政6年5月の歌舞伎に取材した作品が登場する。

寛政6年5月の歌舞伎に取材した、葛屋重

あさの・しゅうごう

1950年秋田県生まれ。立命館大学理工学部数学物理学卒業。千葉市美術館学芸課長を経て、2008年に大和文華館、2013年にあべのハルカス美術館の現職に。著書に『浮世絵は語る』(講談社現代新書)、『浮世絵細見』(講談社選書メチエ)など。

三郎版、写楽画の役者絵は28図、他の6版元から出された役者絵は合計22図(現時点での推計、以下同)。同年の秋の歌舞伎に取材した写楽画の役者絵は38図、他の5版元から出された役者絵は合計11～16図。同年冬の顔見世興行に取材した葛屋重三郎版、写楽画の役者絵は58図、他の9版元から出された役者絵は合計32図。寛政7年1月の歌舞伎に取材した葛屋重三郎版、写楽画の役者絵は10図、他の5版元から出された役者絵は合計16～17図。通覧してみると、寛政6年のものは、葛屋、写楽ペアの作品量が他を圧倒しているが、寛政7年になると、他の版元の合計が葛屋、写

『初代大谷徳次の奴袖助』

しよだいおおたとくじのやっこそすけ

『花菱蒲文禄曾我』に取材した作品。片肌を脱ごうとしつつ、左手は刀に手をかける場面がどこかコミカルなタッチに描かれる。

寛政6年(1794) 東京国立博物館所蔵  
出典: ColBase (<https://colbase.nich.go.jp/>)



東洲齋寫筆画

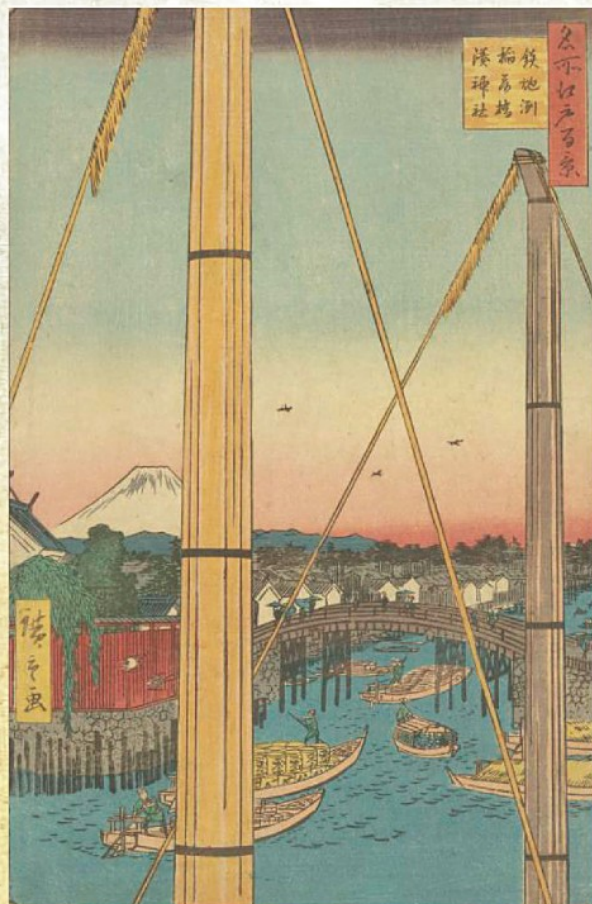
楽ベアの作品量を上回る。そして、寛政7年1月頃、写楽は浮世絵版画から手を引く。寛政6年5月以降、初代葛屋重三郎が没する寛政9年まで、写楽画以外の葛重版の役者絵は確認されていない。

寛政6年5月に、時の役者絵の第一人者、春英と袂を分かち、新人、写楽の作品を大量に刊行した葛重の狙いは、他の版元による役者絵を駆逐し、役者絵のすべての版權を手に入れる事ではなかったかと想像している。葛屋重三郎は見果てぬ夢を見ていたことになる。

## 写楽の正体

写楽についての記事で最も古いのは、写楽の活躍期からわずか数年後に文芸界の大御所、大田南畝によって書かれた『浮世絵考証(浮世絵類考)』にある「これまた歌舞妓役者の似顔をうつせしが、あまりに真を画かんとてあらぬさまにかきなせしかば、長く世に行われず、一兩年にして止む(歌舞伎役者の似顔を写したが、追真的に描こうとして、あつてはならないように描いたので、長く人気を保てずに一、二年で作画を止めた)」という一文である。南畝は当然写楽を直接知っていたはずであり、この書きようからは同時代の浮世絵師の別名である可能性は、微塵もうかがえない。

伝記的事項をわずかに知りえるのは、1817、18年に成立した三代目瀬川富三郎編



『江戸名所百景 鉄砲洲稲荷橋湊神社』

えどめいしよひゃくけい てっぽうずいなりばしみなとじんじや

画面中央の水路が八丁堀。どうやら斎藤十郎兵衛は、この絵に描かれている稲荷橋の北西のあたりに住んでいたと思われる。

歌川広重 安政4年(1857) 東京都立図書館蔵

の『諸家人名江戸方角分』という、当時の江戸の文化人住所録である。それによると、八丁堀地藏橋に浮世絵師の写楽斎が住んでいたということになる。その写楽の項には故人の印が付いているが、この印は、後で付け加えられた可能性が大きい。したがって、1817、18年当時、既に亡くなっていたかどうかは、その資料では分からない。

1821年までに式亭三馬によって付け加えられた『浮世絵類考』の補記にも「写楽、東周(洲)斎と号し、江戸八丁堀に住んだ。

わずか半年あまりしか活動しなかった。」(筆者による現代語訳)とあり、写楽の住所とし

て八丁堀が浮上する。そして、近年確認された天理大学図書館蔵の『浮世絵類考』の一本(達摩屋五一旧蔵本)の、三馬補記の段落の上に「写楽は阿州侯の土にて俗称を斎藤十郎兵衛といふよし栄松斎長喜老人の話なり」という書き入れがあることが判明した。書き入れは、1821〜44年に書かれたと思われるものである。長喜は写楽と同時期に、写楽の影響を受けた役者絵を制作した浮世絵師で、その人物による証言が見つかったのである。

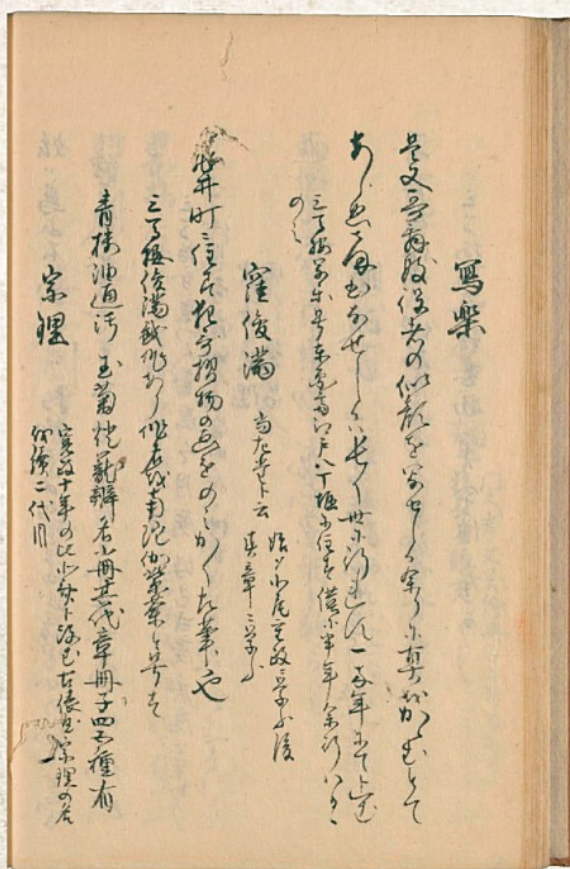
天理大学図書館蔵の『浮世絵類考』が確認される以前にも、ケンブリッジ大学所蔵の『浮世絵類考』に、更に詳しい情報を載せた

ものがあるということが戦後まもなく報告されている。それは俗に月岑稿本浮世絵類考と呼ばれているもので、江戸の町名主である斎藤月岑（1804〜78）によって増補され、1844年に成立したものである。その月岑稿本浮世絵類考において、写楽の俗名と住所、そして阿波藩の能役者であることが明らかにされ、大田南畝の記事や、どういう作品を描いているかまで記されている。月岑は『武江年表』という江戸の町出来事を綴った年表を著した人で、その信頼度は高く、したがって、月岑稿本浮世絵類考の信頼度も高い。その後も明治に至るまで、写楽が阿波藩の能役

者、斎藤十郎兵衛であるという以外の記事、説はない。斎藤十郎兵衛の具体像は分からなかったが、研究者の間では、戦前までは、写楽は斎藤十郎兵衛なのだという認識であった。ところが、1956年、横山隆二氏が写楽は版元の葛屋重三郎であるという説を発表し、事態は一変。写楽〇〇〇説が続出することになった。その数およそ30。皮肉にも同じ年に後藤捷二氏によって、1792年成立『御両国無足以下分限帳』に阿波藩に斎藤十郎兵衛という能役者がいたことが報告されたのである。しかし、江戸期の史料がすべて斎藤十郎兵衛を指向する以上、それ以外の人物を写楽に

当てるのは無理がある。史料間の矛盾・疑問もない。写楽は斎藤十郎兵衛ではない、という人の中には、斎藤十郎兵衛の絵が見つかり、それが写楽の作品と同じであるということが証明されるまで論争は終わらないという人もいる。しかし、それは、発掘品の中に、その地が邪馬台国であるということを示す文字史料のようなものが見つかり、邪馬台国論争が決着するのと同じレベルの無い物ねだりと言つてよい。

## 写楽



「浮世絵類考」大田南畝著 式亭三馬補記

写真のものには式亭三馬による補記が入っているのがわかる。当時は写楽の素性を知る者も少なかったのだろうか。

『浮世絵類考』 国立国会図書館蔵

1997年、斎藤十郎兵衛の過去帳が法光寺（浄土真宗本願寺派の寺院。築地にあったが、1988年埼玉県越谷市に移転）で発見され、文政3年の欄に「辰三月七日 釈大乘院覚雲居士 八丁堀地藏橋 阿州殿御内 斎藤十郎兵衛事 行年五十八歳千住にて火葬」、つまり1820年3月7日に58歳で亡くなったこと、八丁堀地藏橋に住み、法名を大乘院覚雲居士といったことが明らかになった。

つまり、阿波藩の能役者（能役者は士分、つまり武士である）斎藤十郎兵衛は、葛屋重三郎にその特異な才能を見出され、役者絵を描くこととなったが、10か月ほど頑張ったものの挫折、役者絵師とはならず、能役者に戻ったのである。それ以上役者絵を描き続けると後戻りできない、ぎりぎりのタイミングではなかったかと想像される。なぜなら幕臣や藩臣が役者絵を描いて刊行し報酬を得るということはタブーだったのである。

寛政3年

1791年

浮世絵界の天才たちをプロデュース

# 歌麿の美人画、北斎の役者絵

出版統制令に触れて「身上半減」、財産を没収されて絶体絶命となった葛屋。それでもへこたれないのが葛屋の真骨頂だ。次なるターゲットを浮世絵に定めて、活路を見出すことに。

どん底から大逆転の秘策  
それは浮世絵だった

出版統制令で処罰された後、葛屋の出版点数が落ちた。しかし、不屈の男、葛屋は次の一手を考えていた。戯作が駄目なら絵がある。葛屋が目をつけたのは浮世絵だった。

戯作者は次々と引退したが、才能ある絵師はまだ健在だ。そこで、存在感を増したのが喜多川歌麿である。葛屋は歌麿と組んで浮世絵を売り出す決意をした。勝負をかけるのは一枚絵の錦絵。それも美人画だ。  
かつかわしゅんしょう 勝川春章など勝川派が役者絵で用

いた手法に大首絵がある。歌麿はそれを美人画に応用することを思いついた。従来の美人画と違い、大首絵なら女性の上半身を中心に顔をクローズアップして、顔の表情や髪の毛の一本までを描くことができる。

こうして売り出した美人画は葛屋の思惑通り当たった。とりわけ大きな反響があったのは『当時三美人』という作品だ。モデルとなった三人は富本豊鑑、難波屋おきた、高しまおひさ。それまで歌麿が描いていた遊女ではなく、町娘だった。

この作品が歌麿の美人画の最高傑作といわれる。当時の美人画は同じような顔で描かれていることがほとんどであったが、この作品で歌麿は三人の顔を描き分けている。鼻筋の通ったきりりとした顔のおひさ、ふっくらとした頬であどけない顔のおきた、理知的な表情の豊鑑、三者三様の顔と表情、内面を見事に描き切った。歌麿の絵筆によって、浮世絵の中で女性たちは生き生きと命の輝きを放っている。誰にも真似のできない、歌麿の唯一無二の才能だった。当時モデルの女性がいる店には客





## 『江戸三美人・富本豊雛、難波屋おきた、高しまおひさ』

えどさんびじん・とみもととよひな、なにわやおきた、たかしまおひさ

江戸で有名な3人の美人、富本豊雛、難波屋おきた、高しまおひさを描いた大判錦絵。歌麿の美人画の最高傑作といわれる。

喜多川歌麿画 18世紀  
東京国立博物館所蔵 出典: ColBase (<https://colbase.nich.go.jp/>)

### KEYWORD

#### 『婦人相学十卦』 ふじんそうがくじゅうい

歌麿の大首絵の連作錦絵。美人大首絵、背景が雲母摺りとしては最初期の頃に描かれた作品とされる。歌麿が女性の人相を見て、絵解き風に描き分けてみせるという趣向で、この連作シリーズで歌麿は一躍人気絵師となった。

#### 大首絵

上半身のみを描く浮世絵の手法。古くは鈴木晴信が大首絵を描いていた。天明年間になると、勝川派の絵師たちが役者絵を大首絵で描くようになり、役者の表情がよくわかると好評だった。そこで薦重と組んだ歌麿が美人画に採用した。



### 『歌まくら』

天明8年(1788)に刊行した艶本。寛政年間においても、歌麿は枕絵を精力的に描いている。枕絵の世界でも歌麿の絵師としての才能である、大胆な構図や描写力が生かされている。

喜多川歌麿画 天明8年(1788)  
浦上蒼穹堂所蔵

が殺到。アイドル並みの人気者となるという社会現象も起こった。歌麿が描く美人大首絵には、ほかにも仕掛けがあった。木版画の摺りの技法に工夫を凝らしている。すでに初期の『潮干のつと』などでも使った、空摺りという技法で、絵具をつけないで紙を版木に押し当て、凹凸の模様を創り出す。美人絵では、女性の肌の質感を出すためにわざと輪郭線を描かないで、空摺りだけで表現する技法を使っている。

ほかに、雲母摺りという技法を使った。美人の背景に、雲母を細かく砕いた粉末に岩絵具、膠と混ぜたものを背景に付けて、きらきらと輝かせることによって、美人の顔や着物がきれいに見えるように引き立てる技法である。

その当時、美人画の第一人者は鳥居清長であった。鳥居派は役者絵の名門とされる一派だが、清長だけは美人画を得意とした。歌麿はそのライバルと目されるようになった。

清長の作品は永寿堂西村屋与八から刊行される。西村屋と清長のコンビは、蔦重と歌麿にとってライバルであり目標であった。清長が鳥居派の四代目になり本業に忙しくなった時期にも、歌麿は次々に美人画のヒット作を描き、やがて美人画は歌麿が清長を凌駕していく。

一枚絵の錦絵に町娘の名前を書いてはならない、というものだ。これに対して、歌麿は「判じ絵」という手法でお上に盾突いた。例えば、高島屋おひさの絵には、田んぼ、鹿島踊り、火、盃の絵が添えられた。「田鹿島踊ひさ」と読めるように。ここに歌麿という人間の本质がある。美人を観察する目で、幕府の権力者をじっと凝視している。やはり黙ってられない。その反骨の精神を絵に込めた。芸術家として類まれ

なる才能を持っている。だからこそ、心に熱い思いを秘めている。蔦重の相棒・歌麿はそういう人間だった。蔦重はというと、美人画の次のターゲットを考えていた。それは役者絵である。当時の役者絵といえば西村屋の歌川豊国だった。蔦重にとって、美人画に続いて、今度は役者絵でも西村屋に挑むことになった。蔦重の心はすでに美人画から役者絵に移っている。蔦重にとっては新しいチャレンジにワクワクするような高

揚を感じていたのである。役者絵の絵師に最初に抜擢したのは勝川春朗、のちの葛飾北斎だ。寛政三年（1791）には蔦屋から一枚絵の役者絵を刊行している。春朗は蔦屋では山東京伝の黄表紙に挿絵を描くなどの仕事をしていたが、当時はまだ蔦重にあまり評価されていなかったようだ。蔦重プロデュースの役者絵が世の中から絶賛されるには東洲斎写楽の登場まで待たなくてはならない。



『三代目坂田半五郎の旅の僧  
実は鎮静八郎為朝』(右)、  
『市川蝦蔵の山賤  
実は文覚上人』(左)

さんだいめさかたはんごろうのたびのそう  
じつはちんせいほちろうためとも  
いちかわえびそうのやまがつ  
じつはもんがくしょうにん

寛政3年(1791)に、葛飾北斎が描いた役者絵。  
三代目坂田半五郎は悪役の大ベテラン役者。  
寛政6年には同じ役者を写楽が描いている  
(P88『三代目坂田半五郎の子育て観音坊』参  
照)。画風の違いが興味深い。

勝川春朗(葛飾北斎)画 寛政3年(1791)  
東京国立博物館所蔵 出典:ColBase(<https://colbase.nich.go.jp/>)

## KEYWORD

### 勝川春章

役者本人の顔に似せた、似顔絵風の役者絵を描いて、一躍人気絵師となった。一時は似顔絵といえは勝川派の独壇場だった時代もあったほどだった。勝川派の祖となって、多くの弟子を育てた。その中には葛飾北斎(勝川春朗)も含まれる。

### 歌川豊国

挿絵、美人画、役者絵などあらゆるジャンルの絵を描いた浮世絵師。役者絵では寛政6年(1786)に『役者舞台之姿絵』を刊行。当時は衝撃的なデビューした東洲斎写楽のライバルだった。写楽が活動をやめた後は、役者絵の第一人者となった。

### 錦絵

多色刷りで精巧に摺られた木版画。多い場合で10種以上の色を重ねる。版元、絵師、彫師、摺り師の分業作業で完成させる、総合芸術だ。江戸時代中期に手法が確立。当初は裕福な町人の間で流行ったが、次第に庶民の間でも流行しだした。

## 永寿堂日比野(西村屋与八)

篤重が美人画で再起を図った頃、ライバルとなった日本橋の地本問屋・永寿堂の主人。与八は『雛形若菜初模様』という浮世絵シリーズを篤重とともに制作していたこともある。その後は鳥居清長の美人画を刊行。大ヒットして一世を風靡した。老舗地本問屋・鱗形屋の次男に当たる。



初代歌川豊国画 寛政10年(1798)  
シカゴ美術館所蔵

## 『永寿堂 七十一歳の肖像』

寛政10年(1798)頃の作品とされる。歌川豊国画による大判錦絵。「七十一翁永寿堂日比野(花押)」とある。おそらく初代の西村屋与八の肖像画ではないかとみられる。



# 葛飾北斎

日本が世界に誇る浮世絵師・葛飾北斎。90歳で没するまで、数々の伝説に彩られた破天荒な人生を送り、浮世絵の傑作を後世に残した。



## 『江島春望』

狂歌絵本『柳の糸』に収載。北斎が宗理と名乗っていた38歳頃の作品。司馬江漢の『江の島図』から洋風表現を学んだことが、構図、山や波の描写に生かされている。

寛政9年(1797)  
東京国立博物館所蔵 出典: ColBase (<https://colbase.nich.go.jp/>)

## 『北斎漫画』『冨嶽三十六景』傑作を生み出した天才絵師

葛飾北斎は宝暦十年(1760)、

江戸本所割下水近くに生まれた。武士の子として生まれ、大奥の鏡を扱う御用鏡師・中島伊勢に養子に入る。幼い頃から絵を描くことを好んでいたため、養家で子どもができた後に家督を譲り、絵師の世界に入った。

十九歳で勝川春章に入門した。翌年の安永八年(1779)には勝川春朗名で、鱗形屋版の葛屋の『吉原細見』の挿絵を任されている。

若い頃の北斎は、葛重と出会ってから、役者絵を勧められる。当時は西村屋の豊国が描く役者絵が人気で、ライバル心を燃やす葛重のプロデュースによって、役者絵を描くように。寛政三年(1791)年には葛屋から一枚絵の役者絵を刊行した。

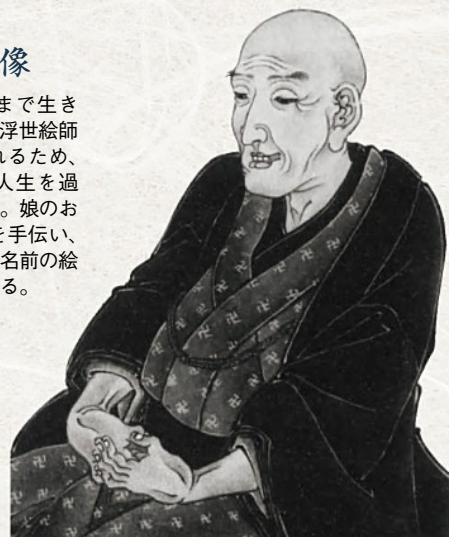
しかし、絵師として期待されたものの、葛重の求める役者絵ではなかったようで、役者絵では芽が出なかった。それでも、葛屋では山東京伝の黄表紙に挿絵を描くなど、絵師として仕事をしていった。

春朗時代の十五年は役者絵、黄表紙の挿絵、美人画などいろいろな絵を描いた。下積み時代で絵師として

## 葛飾北斎肖像

90歳という高齢まで生きた北斎は、19歳の浮世絵師デビューといわれるため、70年近くの画家人生を過ごしたことになる。娘のお栄も晩年の北斎を手伝い、「葛飾翁為」という名前の絵師としても知られる。

『戯作者考補遺』  
木村黙老著 昭和10年(1935)  
国立国会図書館所蔵



のヒット作に恵まれなかった。しかし、好奇心旺盛な北斎は師匠の模倣に飽き足らず、琳派や狩野派や洋画にまで影響を受けるようになる。

その結果、寛政六年(1794)に勝川派を破門され、琳派の俵屋宗理を襲名するが、この経緯は定かではない。この時期には西洋画の手法を取り入れるなど、さまざまなジャンルから影響を受けて、北斎独自の作風を確立したとされている。その貪欲なまでの姿勢は後半生になって花開いていく。

三十代では、宗理の名を使い、豪華な狂歌絵本、版画の元絵、肉筆画を多く刊行。北斎らしい画風が固まっていた時期だった。



## 『富嶽三十六景・ 神奈川沖浪裏』

ダイナミックな構図で大波と人間の対比、動と静、遠と近の世界を描いた。「グレート・ウェーブ」として世界的に有名。西洋に衝撃を与え、ゴッホやドビュッシーなどに影響を与えた。

19世紀  
東京国立博物館所蔵  
出典: ColBase (<https://colbase.nich.go.jp/>)

### KEYWORD

#### 琳派

江戸時代に京都で生まれた装飾画の一派。金銀を使った華やかな表現、大胆なデザインが特徴といわれる。江戸初期に俵屋宗達に始まり、本阿弥光悦、尾形光琳などが代表的な作家。書や屏風、茶器など幅広い芸術運動だった。

#### ジャポニスム

19世紀の後半、ヨーロッパ、とくにフランスでブームとなった、日本趣味のこと。万国博覧会などを契機に、日本の美術やデザインが、ヨーロッパの画家や芸術家に影響を与えた。印象派の絵画やアール・ヌーボーなどに影響を及ぼした。

寛政十一年（1799）頃から、北斎の号を使い始める。四十歳を過ぎてからは、どこの会派にも属さず、独自の絵師として歩むという道が決まった。文化年間になり、黄表紙に代わって読本という長編小説が人気となった。その挿絵が人気となり、曲亭馬琴と組んで挿絵を描いた。『新編水滸画伝』『椿説弓張月』など、数々のヒット作を世に出した。

五十代は、名を戴斗に変えている。弟子たちが絵を学ぶための手本『北斎漫画』は代表作となった。

六十代になるとまたも名前を変えて為（い）と名乗る。この時期には錦絵を中心に描き、色紙判の摺物で名作を残した。最も有名なものが、七十五歳で刊行した『富嶽三十六景』。ほかにも『諸国瀧廻り』、『諸国名橋奇覧』などで風景画の世界に新境地を見せている。さらに花鳥版画、古典や怪談の錦絵など、老境に差し掛かっても精力的に仕事をこなした。

その後はまたも画号を「画狂老人 卍」に変えて、創作を続けた。晩年に描いた絵は肉筆画が多く、動植物などをモチーフに描いて、亡くなるまで、創作意欲は衰えなかった。

画家としては大胆な構図、その画力のすさまじさで、海外にまで名が轟いている浮世絵師となった。ゴッホやモネ、ドガなどの印象派の画家に衝撃を与え、十九世紀には欧米で『ジャポニスム』を巻き起こした。

今も歌麿と並ぶ、人気浮世絵師として国内外で知られている。

九十歳まで長生きをして、挿絵、役者絵、風景画、春画、肉筆画などいろいろなジャンルの絵を描いた。その人生は変人伝説で彩られている。画号を二十数回変えた。さらに引つ越しも九十三回繰り返した。馬琴の家に居候したことがあるが、うまくいかなかったという。

寛政の改革 かんせいのかいかく

田沼意次にかわり老中に就任した、奥州白河藩主の松平定信による政治改革。質素儉約政策で娯楽に制限を加え、江戸庶民の不満が高まった。「白河の清きに魚も住みかねて 元の濁りの田沼恋しき」との狂歌が残されている。

能と歌舞伎の違い

武家に好まれ、室町以前の古典文学を題材に用いることの多い能に対し、庶民に受ける大衆的な演劇として発展したのが歌舞伎。またもっとも大きな違いは能が面を付けるのに対し、歌舞伎は隈取りなどの化粧を用いること。

## 役者絵とは？

歌舞伎役者の舞台姿や似顔絵などを描いた浮世絵のジャンル。歌舞伎絵とも。江戸の庶民の中ではプロマイドのような扱いもされていたので、人気絵師が人気役者を描くと大ヒットにつながった。

寛政6年

1794年

無名の天才を導く

## 東洲斎写楽の発掘

歌舞伎役者が大見えを切る。その表情のみをフォーカスした浮世絵が「大首絵」だ。その二人者である東洲斎写楽。謎の絵師は、葛重のプロデュースで世に現れた。

十カ月の活動で五〇作！  
謎の天才と重三郎の邂逅

東洲斎写楽、通称「写楽」といえば、江戸文化や浮世絵に詳しくない方でも一度は耳にしたことがあるだろう。有名な「三代目大谷鬼次の江戸兵衛」を好例として、役になりきった役者の「顔のみ」をフォーカスする「役者絵」の技法を駆使した作家。寛政六年（1794）五月に突如として現れ、十カ月あまりで一五〇もの作品を残しつつ、飄然と消えた謎の浮世絵師。その正体は令和の現在に至るまで多数の説が現れつつも謎のまま。その「写楽」をデビューさせたのは葛重だった。

江戸の寛政年間（1789～1804）は、葛屋にとって不遇の年だった。先年の天明七年（1787）に老中に就任した松平定信は大規模

な政治改革を推し進める。先の老中・田沼意次の経済重視政策を「放漫財政」と見なし、「質素儉約、文武両道」を奨励。これに対し葛屋は改革を揶揄した黄表紙『文武二道万石通』、続篇として山東京伝の筆による『鸚鵡返文武二道』を相次いで出版。だが幕府の逆鱗に触れ、寛政三年（1791）に筆者の京伝は手鎖五〇日、版元の葛重も財産の半分を没収される。

ここに葛重は出版事業から手を引き、浮世絵に活路を求める。そのためには新たな浮世絵師の引き抜きである。当時の浮世絵師界隈の著名人と言えは喜多川歌麿だ。だが当時の歌麿は葛重の元を去っており、新人発掘を図る葛屋は役者絵に活路を見出す。寛政の改革で歌舞伎界も低迷状態だったからこそ、逆に役者絵は新規参入が可能だった。そこに現れ

たのが写楽だった。

前記のように、東洲斎写楽は謎の浮世絵師である。どこで生まれたのかも、誰に師事したのかも、いつ亡くなったのかもわからない。だが、じつは「写楽の正体」として有力な人物が浮上している。彼の名は斎藤十郎兵衛（1743～1820）、四国は阿波徳島藩お抱えの能役者だ。今でこそ「クールジャパン」の筆頭として東京オリンピック開会式でも披露された歌舞伎。だが江戸期では歌舞伎は庶民の雑駁な娯楽、一方の能は武家の高尚な芸術とされていた。だが同じ舞台芸術、国元を発ち藩主に従い江戸入りした十郎兵衛が評判の歌舞伎を見物し、共鳴するものがあつたことは想像に難くない。そもそも写楽の代名詞である「大首絵」は芝居の中で役者が見えを切る場面、当時の人が絵を見れば一目で場面がありありと脳裏に浮かぶ。舞台俳優であり絵心があつた十郎兵衛は、会心の場面を絵として表現することが可能だった。そもそも写楽独自のデフォルメ表現、突き出した口や見開く目は能面の顔面表現が由来との説もある。だが葛重が十郎兵衛をデビューさせたのはそれだけの理由なのだろうか。

# 『三代目大谷鬼次の 江戸兵衛』

さんだいめおおたににおにじのえどべえ

芝居「恋女房染分手綱」の悪役、江戸兵衛に扮する三代目大谷鬼次。鷲塚八平次に頼まれ「市川男女蔵の奴一平」から金を脅し取る場面。鋭い目と隈取、一方で顔の大きさの割に小さな手が見えを切る場面が鮮烈。

寛政6年(1794)  
東京国立博物館所蔵  
出典: ColBase (<https://colbase.nich.go.jp/>)



東洲齋寫樂画

# 東洲斎写楽

彗星のごとく現れ、そして去った謎の絵師・写楽。  
その正体は武家身分の舞台芸術家だった。  
そんな人物を招聘した葛屋重三郎の戦略と失敗とは？

能役者の浮世絵師デビューには  
葛屋重三郎なりの計算があった

窮地に陥っていた葛屋重三郎は役者絵に  
活路を見出した。何故、大役を担ったのは  
能役者出身の絵師なのか。そこにはやはり  
葛屋重三郎なりの計算があった。たかな計算  
があった。そもそも役者絵は、役者をモチ  
ーフとした浮世絵である。役者には演じる役  
の、あるいは役者自身の内面がある。能面  
は人間の内面を投影して形としたものだ。だ  
から役や役者の内面がにじみ出す絵を描き  
得ないか……その役目に写楽は適任だっ  
たといえよう。

「東洲斎写楽」の活動期間はわずか十カ  
月ながら、四期に分類され画風は各々異  
なる。第一期は写楽の代名詞でもある、役  
になり切った役者の顔を前面に押し出  
す「大首絵」。第二期は、大判なら二人、  
細判なら

一人の全身を描くもの。顔立ちのデフォルメは多少抑え全身の表現で雰  
囲気を出す。第三期は細判ばかり四  
十七作品、そして第四期に至れば、  
連続した背景の役者絵となり形骸化  
が進み、やがて「写楽」は姿を消す。  
この段階を踏む画風こそが、葛屋  
重三郎によるイメージ戦略だった。実際の  
役者の表情をリアルに、デフォルメ  
も含めて大画面で刷って江戸っ子の  
度肝を抜き「写楽」を刷り込む。二  
期に至り、細やかな手法を取り入れ  
た「写楽の別の引き出し」を公開す  
る。ここに面白い作品がある。寛政  
六年（1794）七月、ちょうど二  
期の幕開け頃に発行された「篠塚浦  
右衛門の都座口上図」。袴姿の初老  
の役者が口上を詠みあげる姿だが、  
その人物が掲げる紙面には裏に文字  
が浮き出し、「これから二番目をご覧  
に入れます」と受け取れる文言が掲

## 写楽の絵の変遷

写楽の作風は10カ月で四期に分類される。  
代名詞の「大首絵」度肝を抜いた第二期。だが月を経るごとに  
作風は「大人しく」なり、末期では力強さそのものが拭い去られていく

### 第一期 寛政6年5月

写楽の代名詞である「大首絵」28作品  
が確認できている。歌麿同様に背景に  
は雲母を用いるが、あえて「黒雲母」に  
統一し迫力を演出。「市川蝦蔵の竹村定  
之進」などの名作はこの時期のもの。



『四代目岩井半四郎の  
乳人重の井』

芝居「恋女房染分手綱」より。別れた実  
の子と再会しつつも、親子の名乗りも  
ならず見つめるだけの乳母の姿。

東京国立博物館所蔵  
出典: ColBase (<https://colbase.nich.go.jp/>)

### 第二期 寛政6年7月・8月

38作品が確認されている。全身像が  
中心。容貌のデフォルメを抑えつつ、  
顔よりも全身の表現で場面の雰囲気  
を描き出す工夫がある。インパクト重視  
の1期作品より手法が向上している。



『三代目坂田半五郎の子育て観音坊と  
三代目市川八百蔵の不破伴左衛門』

二人の見得の美しさが長い刀によって  
統一される。僧の衣の単純配色と、八百  
蔵の衣装の細かな配色の対比も面白い。

東京国立博物館所蔵  
出典: ColBase (<https://colbase.nich.go.jp/>)



### 篠塚浦右衛門の 都座口上図

しのつかうえもんのみやごさうしょうず  
老成した役者が、新たな芝居の口上を読み上げる場面。紙の裏に透ける文字には「口上 これより二番目新版似顔絵御覧に入れ奉り候」とあり、写楽による「第2弾」が始まる期待感をおおる。

寛政6年(1794)  
東京国立博物館所蔵 出典:ColBase  
(<https://colbase.nich.go.jp/>)

載されている。明らかに「第二弾が始まります」と、写楽自身が語っているのだ。言葉通りに第二期が始まる。だが「東洲斎写楽」としての活動は、「斎藤十郎兵衛」の望んだものではなかったかもしれない。

たとして同業者や役者の非難を受けていささかの軌道修正を迫られる。さらに十カ月で総勢一五〇もの製作は、舞台俳優の観点から歌舞伎を鑑賞する斎藤十郎兵衛に「モチーフ取材」の時間的余裕を奪った。芝居好きの十郎兵衛は絵そのもののへの興味を失った。かくて写楽は時代の波に消えていった。

### 第四期 寛政7年正月

第三期の頃から、写楽作品には他作品の模倣、あるいは既存の自作品の安直なアレンジが見受けられるようになる。一説によれば薦屋による大量発注に応えるため、あるいは「斎藤十郎兵衛」自身が、創作に迫られ版元の要求を呑んでいく中で浮世絵制作への興味を失ったからともいう。寛政7年正月、「写楽」は約12点の作品を発表し、以降の消息は不明。



### 『三代目坂東彦三郎の工藤』 『三代目沢村宗十郎の十郎』『二代目坂東三津五郎の五郎』

都座の芝居「江戸砂子慶曾我」(えどすなごきちれいそが)に題材をとった2枚の役者絵。曾我十郎が、仇と狙う工藤祐経と対決する場面。緊迫した場面はさすが、人物構図、あるいは輪郭線ともども力強さに欠ける。

東京国立博物館所蔵  
出典:ColBase(<https://colbase.nich.go.jp/>)

### 第三期 寛政6年11月・閏11月

小型の画面に役者の役名とともに絵を描く「間判」を描く。また、江戸で評判だった、7歳にして体重70kgの少年力士「大童山」や武者絵など役者以外のモチーフも以降はみられるように。



### 『三代目市川八蔵』(右)と 『初代中山富三郎』(左)

それぞれ禿(かむろ)に扮し、獅子舞を演じる。禿とは遊女の身の回りの世話をする見習い遊女で、切り下げ頭。

メトロポリタン美術館所蔵

寛政9年

1797年

## 最後の自作黄表紙と巨星の死

# 『身体開帳略縁起』

江戸をプロデュースした名編集者・蔦屋重三郎。幕府の弾圧を乗りこえつつも浮世絵に活路を求め新人を発掘した。だが江戸の食文化が、彼の健康を蝕んでいく。

江戸つ子を沸かせた編集者  
その命を奪った「江戸患い」

政治改革による弾圧で大打撃を受けた蔦重。起死回生を図り謎の新人絵師・東洲斎写楽がプロデュースされた。だが独特すぎる作風が江戸つ子にはウケず、演劇好きの自由人の感性は出版業界の慣習と馬が合わず、謎の絵師は謎のまま姿を消す。そして蔦重自身の肉体も、江戸独特の食生活によって蝕まれていく。

日本人の主食といえども米だ。だが温暖な気候と豊かな水が必要な稲は栽培が難しく、庶民の大半は雑穀、あるいは米であっても十分に精白されていない「玄米」を主食としていた。雑穀や穀物の糠にはビタミンが豊富に含まれている。それゆえ宮沢賢治の「雨ニモマケズ」にもあるように、大量の穀物と野菜と味噌さえ

摂取すればある程度の栄養バランスはとれていた。だが江戸時代中期以降、水車を利用した米の精白法が広まり、白米が安価になる。糠を失った白米はビタミンに欠けるが、炊きやすく味が良い。江戸では白米食が流行するとともに、ビタミン不足による脚気が大流行することになる。

だが「ビタミン」の概念のない当時、病の原因はわからないまま「江戸患い」と呼ばれ恐れられた。そして江戸をプロデュースした蔦屋重三郎その人も、この病に罹患した。

そんな折の寛政九年（1797）、蔦重は「蔦唐丸」の筆名で自筆の黄表紙を出版している。題して『身体開帳略縁起』。御開帳とは日ごろ寺院の奥深くに祀られる秘仏を一般公開する催し。自身が健康を害している時期に「身体の開帳」とは何とも攻めたタイトルだ。なお巻末には、

従者を従え年始回りに出る自身の自画像を載せている。蔦屋重三郎を描いた貴重な絵画資料である。

それでも蔦重の病は悪化の一途をたどり同年五月六日、死を予感した彼は「午の刻（正午）には死ぬだろう」と予言した。だが昼過ぎになっても死なず、自身で「人生の幕引きを告げる拍子木が鳴らない、遅いではないか」と笑った。結局はそれが最期の言葉となり、同日の夕刻に他界した。享年四十八。

蔦屋重三郎亡き後、財産は番頭が引き継いでその後は四代続いたが、かつての隆盛を取り戻すことはなかった。生前の重三郎を知る作家の一人、曲亭馬琴は「蔦屋は風流も学問も無いが、才は人に優れ人に愛され刊行の冊子は時流に好かれた」と記している。蔦屋は早すぎた天才故、その才を継ぐ者はなかった。

## KEYWORD

### 脚気 かけ

ビタミンB1不足が原因の病。足がむくみ、重症化すれば心臓機能が低下して死に至る。古くから白米を多食した上流階級に流行し、江戸期には白米食を好んだ江戸庶民にも広まる。原因がわからず恐れられていた。

### 須原屋茂兵衛 すはらやもへえ

蔦屋重三郎と同時期に活躍した版元。蔦屋が庶民文化を担ったのに対し、須原屋は武家対象の学問書を出版した。オランダの医学書を翻訳した杉田玄白の「解体新書」を出版したのは分家の須原屋市兵衛である。

## 正法寺

蔦屋重三郎の墓所がある東京都台東区東浅草の寺院。宗派は日蓮宗。本能寺の変があった天正10年（1582）の開山。平成時代にビル型に新築され、現在では蔦屋重三郎関連書籍の閲覧コーナーもある。



撮影 / 上永哲矢

世にふりてけちまふ  
おのゝのせいの  
ふらふらの  
あふんさ  
はりのの  
くいのの  
あふんさ  
あふんさ  
あふんさ  
あふんさ



しんたいかいちょうりゃくえんぎ

薦唐丸自作 北尾重政画 寛政9年(1797)  
国立国会図書館所蔵

# 北尾重政

葛屋のガイドブック『吉原細見』で世に出た葛重。教養に長けた浮世絵師が北尾重政。タッグを組んで描かれた江戸の「みやび」とは？

## 春夏秋冬、花鳥風月 都に並ぶ吉原の「みやび」

### 『青楼美人合姿鏡』

せいろびじんあわせすがたがみ

遊女たちの春夏秋冬のありさまを描いた豪華本。遊女が集まることで生まれる美の空間。演じられる和歌や茶の湯、生け花に香道は日本が室町期から戦国期、江戸に至るまで育んだ美の集大成といえよう。

北尾重政・勝川春章作  
安永5年(1776)  
東京国立博物館所蔵  
出典: ColBase (<https://colbase.nich.go.jp/>)



美人画に長けた浮世絵師は  
南北朝の名門武士の裔

北尾重政(1739~1820)

俗名は北尾佐助。南北朝から戦国期初めに活躍した武家、北畠氏の末裔との説もある。

お江戸は小伝馬町の書店の息子として生まれた彼は環境に恵まれた僥倖か、とくに師につく事もなく独自の画風を編み出していた。長じると父の書店を弟に任せ、自身は浮世絵師として独り立ちする。

さて北尾重政のデビュー期は、ちょうど『吉原細見』の刊行で頭をもたげてきた葛屋重三郎が事業を展開する時期でもある。安永五年(1776)、葛重は日本橋の地本問屋・山本金兵衛との共同事業により『青楼美人合姿鏡』を出版する。吉原花魁の四季折々の美しき姿を花鳥風月とともに描く錦絵本、作画は北尾重政と勝川春章で、のちに「日本印刷史上に残る美麗な傑作」と称され



## 『四遍撮心学草紙』 しへんずりしんがくそうし

寛政8年(1796)、「里見八犬伝」の作者である曲亭馬琴による黄表紙。画は北尾重政が担当した。人生や世間のさまざまな場面に「善玉」「悪玉」キャラクターを登場させ、教訓も込めて描いた作品。

曲亭馬琴作 北尾重政画  
寛政8年(1796)  
国立国会図書館蔵

## KEYWORD

### 黄表紙 きびょうし

安永から文化年間の初期までの約30年間、江戸で流行した絵本。子どもの読みものだった「草双紙」とは一線を画し、知的な笑いを求める大人の読み物である。ときには政治批判も込められたため、弾圧の対象にもなった。

### 善玉・悪玉 ぜんだま・あくだま

山東京伝が文を、北尾重政が画を担当した寛政2年(1790)の黄表紙「心学早染草」に登場するキャラクター。「善玉・悪玉」の概念は江戸期を通じて絵本に登場し、現在でも「善玉コレステロール」などとして親しまれる。

### 東山文化 ひがしやまぶんか

室町時代の後期、京都は東山の地に別邸を立てた室町幕府8代将軍、足利義政の時代に確立された文化。書院造の建築、茶の湯、生け花、香道、能など、江戸期の武家社会で尊ばれた「高尚な文化」はこの流れである。



る。上中下の三巻で春夏秋冬、並びに員外の遊女一六四人を登場させ、彼女らが詠んだ俳諧を載せる。「松葉屋」「角玉屋」など遊女屋は障子をあけ放ち見通しの良い中で遊女が手紙を書き琴を弾じ、双六に興じる。棚には『源氏物語』の注釈書と平安文学の解釈に余念がない。夏には金魚を眺めユリを分け、秋には月を眺め、冬には雪を眺めつつ炬燵にあたり、香を聞く。春夏秋冬に俳諧の遊びはいにしへの都の貴人そのまま、葛屋重三郎は北尾重政の手腕を持って、都のみやびをお江戸に再現したのだ。重政は「書画」に長けていた。書家として、幟に篆書や隸書の筆を振るった。さらに俳人としても活躍している。だが本領は画才であり、浮世絵以外に草双紙の挿絵を担当するなどして、天明期を代表する浮世絵師として活躍した。

だが「本屋の息子」故か、浮世絵師として名声を得た後も葛屋の刊行物の挿絵を後年までも担当している。手がけた絵本は六十点を超え、黄表紙挿絵は一〇〇点以上あるといわれる。さらには若年時代の喜多川歌麿の面倒を見るなどして、葛屋の、そして江戸文化の隆盛に大いに貢献することになった。

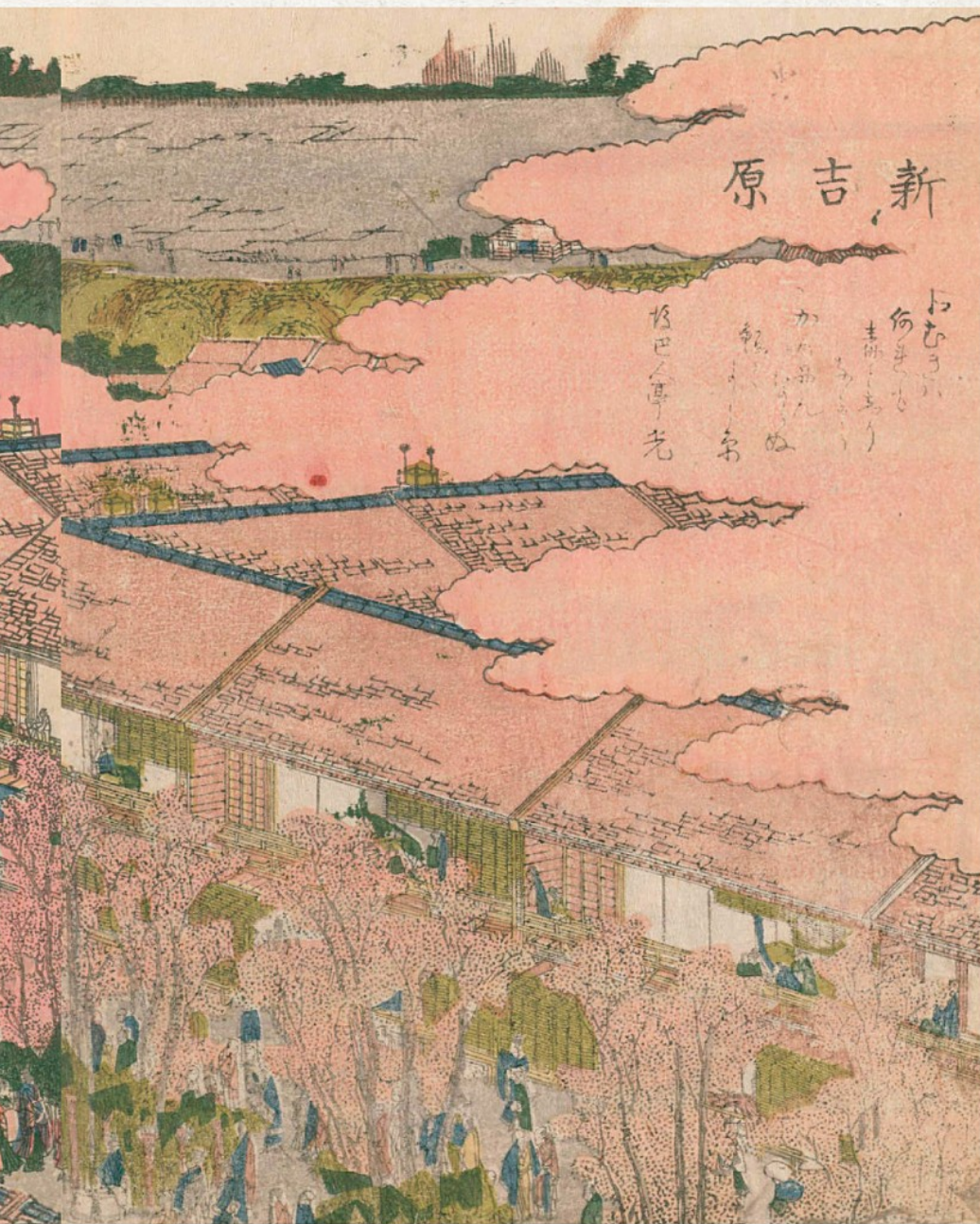
寛政10年

1798年

名プロデューサーが去った後

# 葛屋重三郎以降の江戸文化

幕府の文化弾圧にあらがえぬまま失意のうちに没した葛屋重三郎。だが彼が蒔いた種は数十年後に開花した。それは今日の「クールジャパン」の起源だった。



浅草庵 作、葛飾北斎画 享和2年(1802)  
国立国会図書館蔵

葛屋重三郎が蒔いた種は「化政文化」として開花した

令和の現代は便利な時代である。誰もが自由にネットやSNSで発言できる。音楽なり漫画なりの才能があればネット配信をしてバズれる。だがネット以前、一般人の立場で意見を述べられる場といえば新聞の投書欄、ラジオのお葉書コーナー程度。小説や漫画の新人賞など文字通りの狭き門、ましてや電話はおろか通信手段もなく、民衆の識字率も低かった江戸期。あふれるばかりの才能を芽生えさせることもなく朽ちた不遇の土は多かるう。

そんな江戸期を生きた葛屋重三郎。「江戸市中のみ」という制約こそあれ、吉原細見の執筆で培った取材力をもとに民衆の好みを分析し、パロディ和歌ともいえる「狂歌」の会からは才能を胸中にたぎらせる人士を発掘して一堂に集めた。才能ある者は才能ある者に魅かれ、あるいは嫉妬しあう。その切磋琢磨から、また新たな才能が生まれていく。

葛屋重三郎が没してから二十年ほど後の江戸は浮世絵、滑稽本、歌舞伎、あるいは落語と、「いわゆる江戸文化」が隆盛を極める。当時の元号



## 『二代目坂東三津五郎と 初代中山富三郎』

にだいめばんどうみつごろうとしょだいなかやまとみざぶろう  
歌川豊国(1769~1825)による浮世絵。豊国は  
写楽が姿を消した翌年頃から「大首絵」の制作に  
取り組み、役者絵において不動の地位を獲得し  
た。上作品は写楽の第2期の面影がある。

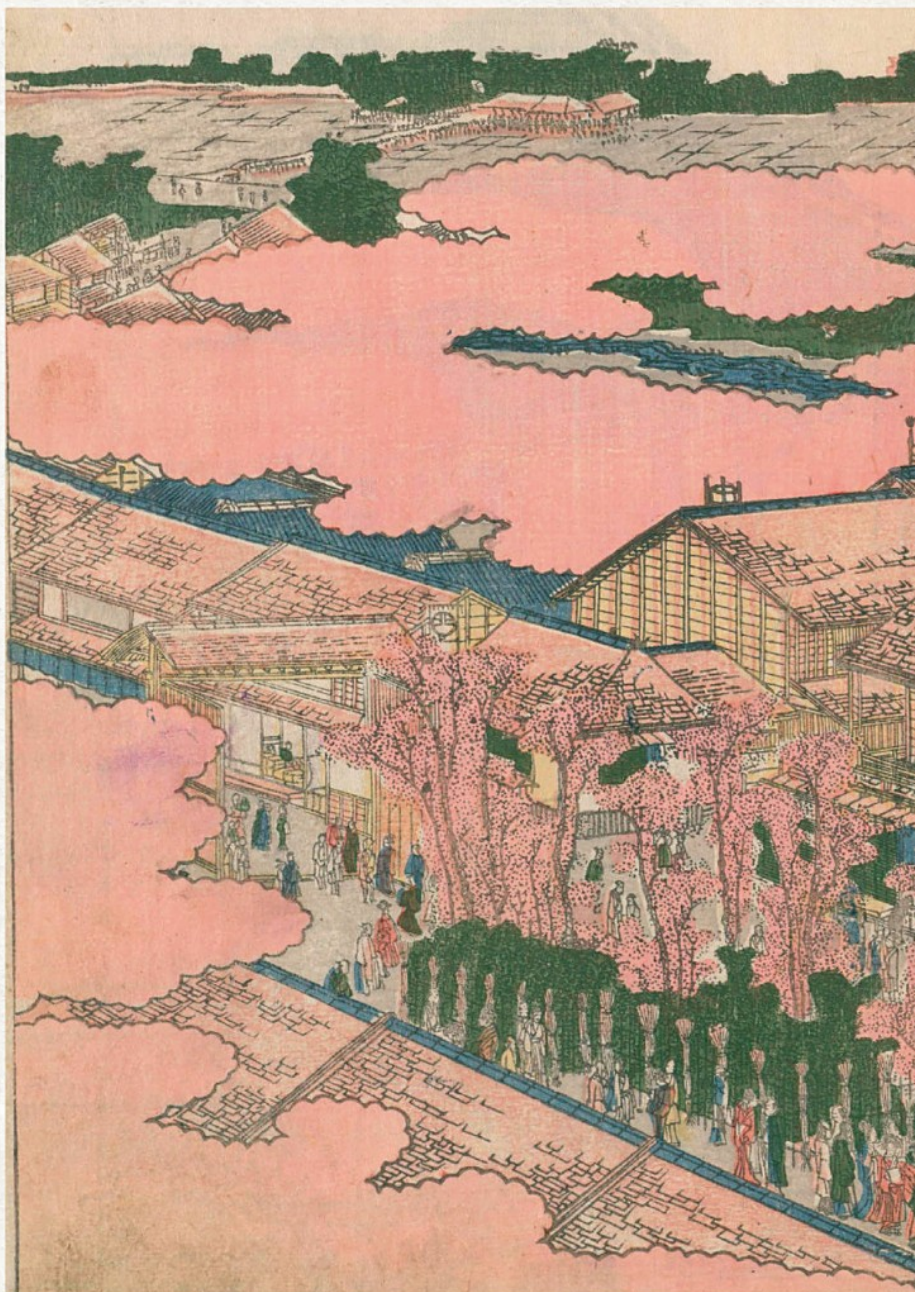
歌川豊国 18世紀  
東京国立博物館所蔵 出典:ColBase(<https://colbase.nich.go.jp/>)



## 『江戸名所百人美女 新吉原満花』

えどめいしよひやくにんびじょ しんよしわらまんか  
歌川国貞(1786~1865)は歌川豊国の門人。20  
代で美人画、役者絵を発表し第一線に躍り出る。  
80歳近い生涯での作品数は1万点以上ともされ  
る。上記作品は、晩年の1857年の作品。

豊国(歌川国貞)、豊久著 安政4年(1857)  
国立国会図書館所蔵



## 『画本東都遊』 えほんあずまあそび

春たけなわ、桜が満開の新吉原。『画本東都遊』は当時のお江戸のガイドブックとして、蕨重死後の享和2年(1802)に発行された。同書には「耕書堂」も載っている。

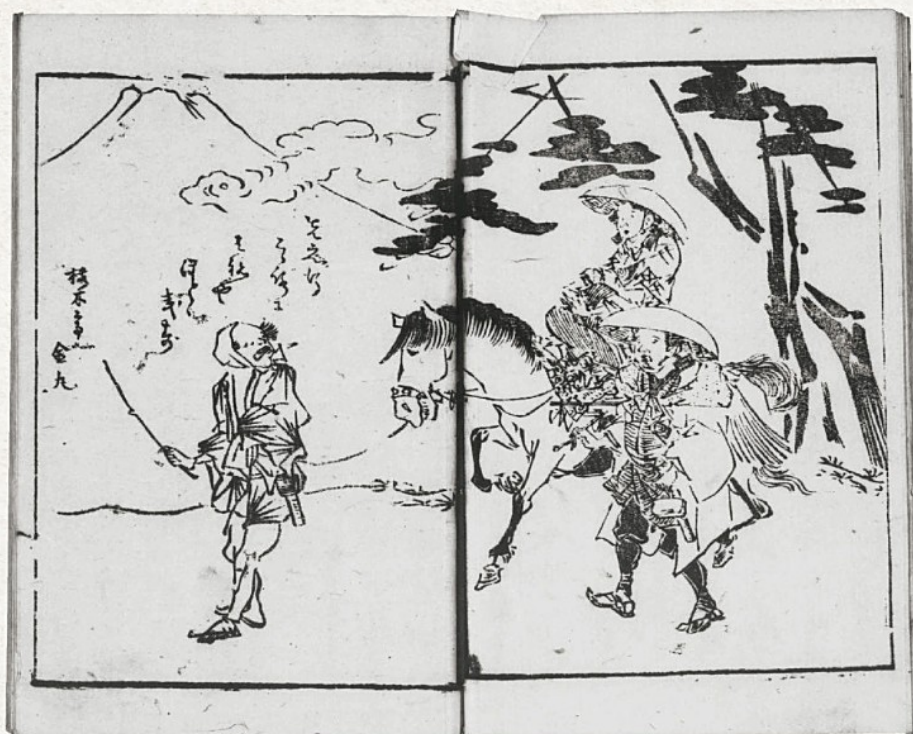
「文化」「文政」にちなんで「化政文化」と呼ばれる江戸時代後期の江戸庶民文化。その担い手である浮世絵師の葛飾北斎、読本作家の曲亭馬琴、滑稽本作者の十返舎一九……、いずれも若き日に蕨重の元で寝食をともにした者たちである。蕨重の才能は、彼の死後数十年後に大きく開花することになるのだ。

このちも歌川豊国、歌川広重、歌川国芳に月岡芳年と高名な浮世絵師が輩出され、やがて彼らの作品は幕末の日本開国をもつて世界にも知られた。欧米各国は「東洋の神秘」に心打たれ、ゴッホやモネほか欧米の芸術家の心を捉えた。

蕨屋重三郎は、今に至る「クールジャパン」の牽引役だったのだ。

# 十返舎一九

『東海道膝栗毛』で二世を風靡した滑稽本作家・十返舎一九。彼も蔦重の元で長年の下積みを積んだのちに才能を開花させた。彼の強みは観察眼、時代を見る目だった。



## 『東海道中膝栗毛』

お江戸は神田八丁堀の住人・弥次郎兵衛と喜多八が伊勢参りへ。続編では讃岐、そして信州から上州草津の温泉を楽しみ江戸へと帰還。「膝栗毛」とは、「膝」を「栗毛の駒」のように用いる徒歩旅行のこと。

文化年間(1804-1818)  
東京都立図書館蔵

## 「弥次さん」「喜多さん」 その産みの親は蔦重の弟子

弥次郎兵衛と喜多八の二人連れが江戸を発ち東海道を西へ。道中のドタバタ失敗談を盛り込んだ滑稽話「東海道中膝栗毛」の作者は、日本最初の職業作家とも称される十返舎一九。彼も蔦重の関係者であった。駿河国で武士の子として生まれた彼は江戸や大坂で武家奉公し、材木商に婿入りするも離縁。その後、大坂で香道や絵を学び、寛政六年(1794)、三十歳の折に江戸にもどって蔦屋に寄宿し、山東京伝の滑稽本『初役金烏帽子魚』の挿絵を担当している。翌年には蔦重の元『心学

## 十返舎一九

本名は重田貞一。駿河国の武家の生まれで幼名は市九。筆名の「十返舎」は香道で用いられる、「十回焚いても薫りが失われない」上等な香木・黄熟香にちなむ。一九自身、若き日には香道の師匠をめざしていた。

【肖像】2之巻  
【野村】文紹著  
国立国会図書館蔵

時計草』など黄表紙を出版するが、文名はなかなか挙がらなかった。

だが蔦屋重三郎死後の享和二年(1802)に出版した『東海道中膝栗毛』が思わぬヒット、初版は江戸から箱根までの路程のみだが以降毎年続編を重ね、文化六年(1809)の大坂見物篇の刊行を見て完結となる。以降も取材と著作を重ね、弥次喜多は讃岐の金毘羅参りに木曾道中を堪能する。一九は教養や観察眼の不備を自覚し、代わりに大衆の好みを読んで創作に生かした。一九は天保二年(1831)、六十七歳で没した。辞世の句に曰くこの世をば どりやお暇に線香の煙と共に 灰左様なら



(滝沢)

# 曲亭馬琴

『源氏物語』に並ぶ日本の古典長編小説『南総里見八犬伝』の筆者・曲亭馬琴。彼の活躍は葛重の人脈、そして取り持った縁結びゆえだった？



## 『南総里見八犬伝』

「八犬伝」は挿し絵込みで読本化されたが、前もって馬琴自身が「下絵」を描いて絵師に提出した。上の図は文政3年刊第四編の下絵。犬塚信乃の人相書きを掲げる小文吾。柳川重信が正規の挿絵を描いた。

文政3年(1820)  
東京都立図書館蔵

## 江戸時代最高の長編小説 葛屋の縁結びが作者を支えた

『南総里見八犬伝』の作者として著名な滝沢馬琴は明和四年(1767)、江戸の深川で武家用人・滝沢興義の子として生まれるが幼くして父を失い、武家に奉公するも自身の尊大さゆえに長続きしなかった。やがて二十四歳の馬琴は戯作者として著名な山東京伝の元に押しかけ、同然で弟子入りし、二年後には京伝の紹介で葛屋に入る。名目は使用人だったが読書を重ね戯作を書いた。やがて馬琴二十七歳の折、葛重は元飯田町の履物屋の娘・お百との縁談を持ち込む。武家身分にこだわる馬



## 曲亭馬琴

武家出身で本名は滝沢興邦。筆名の「曲亭」は史書「漢書」にある山の名、「馬琴」は小野篁の「索婦詞」より「馬卿」にあらずして琴弾くとも能はじに由来するという。

『肖像及伝記(尋常中学校講義録)』 国立国会図書館蔵

琴は悩みつつも話を受けた。結婚後も「滝沢」の姓を押し通した馬琴だったが商家への婿入りで生活が安定し、同時に創作意欲も増した。『南総里見八犬伝』『椿説弓張月』など名だたる作品群は、馬琴自身の学識と文才に加え、キューピット役の葛重の存在なしにはあり得ない。尊大で偏屈者の馬琴は来客を嫌がり、交友関係は狭かった。さらに妻のお百は愚痴まみれ、息子で医者のお宗伯は虚弱体質で父より先に死去した。四十八歳で執筆開始した『八犬伝』が未完の六十五歳頃から馬琴は目を病み、やがて失明する。だが宗伯の妻・お路が口述筆記を担当し、天保十三年(1842)に完結した。

葛重の時代に起きていた天災

# 浅間の噴火と 天明飢饉

葛重が生きた江戸時代、泰平の世でありながら、人々は別の脅威に怯え、戦わねばならなかった。自然災害である。田沼意次の失脚にもつながったという、その大規模災害を考える。

文／上永哲矢 撮影／遠藤純(二部)



浅間山

荒々しい山肌は、江戸時代の鬼押出し溶岩流の跡。鬼押出し・浅間園として整備されている。大自然の恵みを享受して生きている以上、人々はその恐ろしさにも直面しなくてはならない。

## 武田家をも滅亡させた 浅間山噴火が再び……

火山国の宿命というべきか、江戸時代の日本はいくつか大きい噴火に見舞われている。とりわけ宝永四年（1707）の富士の噴火はよく知られている。いまでも宝永山と呼ばれる富士山の肩にある瘤は、そのときにできたものだ。

長野県と群馬県の境に位置する浅間山の噴火歴も古く回数が多い。七世紀から噴火の記録があり、戦国時代の天正十年（1582）に起きた噴火は織田信長の軍勢が武田領への侵攻（甲州征伐）を開始してまもないタイミングだった。武田領国内の国衆や領民は武田勝頼が天から見放されたと考えた。この噴火の日を境に武田領国の諸城は次々と陥落し、武田氏滅亡の要因になったほどである。そして「天明の浅間焼け」と呼ばれる江戸時代の浅間山噴火はそれからおよそ百年が経った天明三年（1783）四月に発生した。

四月の最初の噴火は一度は鎮まっ

たが、五月二十六日に本格的な爆発。前月よりはるかに大規模で、地震のような鳴動とともに天にも届くかのような噴煙があがった。火山灰が広く東方に流れて降下し、草木は白くなり、馬や蚕のエサにも影響した。

続いて六月十八日と二十八日も大爆発が起こり「大地が鳴動し、山の中から赤い雷がしきりに走り出た。身の毛もよだつほどの恐ろしさで、

人々は冷汗を流し気絶せんばかりであった」と伝える人々の手記がある。そして七月、噴火はいよいよ本格化。

噴火口から灼熱した溶岩が浅間山の北側の火口壁を越えて流れ出し、山体東北側の地表を覆う。現在も山肌を覆う「吾妻火砕流」が発生。八日の大爆発では高さ数百丈（約一五〇〇～二〇〇〇メートル）にも及ぶかと思われる火煙を噴き上げ、火口から噴き出た多量の火砕流（鎌原火砕流）が北側の急斜面を滑りおち、利根川の支流の吾妻川までなだれ落ちる。さらに約十五キロメートル北に

ある鎌原村を呑み込んだ。この被害で人口の八割におよぶ四六六名が行方知れず、馬も二百頭のうち一七〇頭がやられた。こうした直接的な被害のほか、煙が偏西風に流されて関東一円に達し、三日もの間、日中から火山灰のために真っ暗に。上州・武州の家々では昼間から灯火をともし、また埼玉県深谷宿では外出するにも提灯を持ち、声をかけあいながら歩いたという記録がある。

### 大規模な噴火が次の災害、 飢饉や打ちこわしを起こす

そして、こうした火山の噴火で引き起こされるのが冷害とそれに伴う飢饉である。江戸時代には三十五回の飢饉があったといわれるが、なかでも「江戸時代の三大飢饉」（享保・天明・天保）がとくに大きかったとされる。ことに天明の飢饉は浅間山の噴火と大きな関わりがあった。

田沼意次のあとに老中の座を継いだ松平定信は「天明午のとし、諸国人別改られしに、まえの子のとしよ



### 『天明三年浅間山大焼画図』

天明の噴火を目の当たりにした人々の伝聞をもとにその様子を記したもの。7月8日の午前10時頃に始まった爆発は最大の規模だったとされ、土石流のような現象を生じ、鎌原村をはじめ多くの集落を埋没させた（鎌原火砕流）。

18世紀 東京国立博物館所蔵 出典: ColBase (<https://colbase.nich.go.jp/>)

# 『天明飢饉之図』

杉田玄白の『後見草』によると南部・津軽では家を捨てて他郷に流れてた者も、行く先々でも同じ飢饉であるため、食を乞うても誰もくれる者がなかった。ために日に千人、二千人の餓死者が出るありさまと綴っている。

福島県会津美里町教育委員会蔵



應需堂漢



## 江戸時代の主な災害

寛永18年(1641)	寛永の飢饉
明暦3年(1657)	明暦の大火 (振袖火事)
天和2年(1682)	八百屋お七の火事
元禄16年(1703)	元禄地震・津波発生
宝永4年(1707)	富士山の噴火
享保17年(1732)	享保の飢饉
宝暦5年(1755)	宝暦の飢饉
明和9年(1772)	明和の大火 (目黒行人坂の大火)
天明2年(1782)	天明の飢饉
天明3年(1783)	浅間山の噴火
天明6年(1786)	関東大洪水
天保4年(1833)	天保の飢饉
弘化4年(1847)	善光寺地震
安政2年(1855)	安政江戸地震
安政5年(1858)	コレラ流行



『天下一面鏡梅鉢』 てんかいちめんかがみのうめばち

当時の情勢を黄表紙として発行した一冊。噴火で金銀が降る描写、打ちこわしをする人々を楽しげな表情で描くなど、攻めた表現方法は絶版の憂き目にあったとも。その経緯もあって作中には作者も版元も明示されないが、唐来参和作・鳶屋重三郎版と伝えられている。

唐来参和作 寛政元年(1789) 国立国会図書館所蔵



### 「天明飢饉の碑」

福島県いわき市の常慶寺にある石碑。飢饉の悲惨さとともに小名浜の代官・蔭山外記の救済策による功績を伝える。浅間山噴火と同年に岩木山(青森県)も噴火していたため、東北はとくに甚大な被害を受けた。

りは、諸国にて百四十万人減じぬ。この減じたる人みな死うせしにはあらず、只帳外となり、または出家山伏となり、または無宿となり、または江戸へ出て人別にもいらずさまよいありく徒とは成りにける」(『宇下人言』と書いてある。本多利明の『経世秘策』には天明三年からの三年間で奥州の餓死者は二百万人とあり、数字でも江戸時代数多であった。さらに恐ろしいのが人災である。

引き起こした。「天明の上信一揆」はこのような状況のなかで起こった。上野の安中藩では食い詰めてこれに抗議する人々が各地の領主の蔵や米蔵の「打ちこわし」を行なう。それが信濃へも広がり、金品や衣類、食糧を強奪するという暴力的な騒動に至る。物価は急上昇し、世情は騒然としてきた。これが全国的にも広がり、五月には江戸でも打ちこわしが頻発したほか京・大坂にも広がる。光格天皇は困窮する庶民の訴えを耳に挟み救済を強く願い、幕府に対応を要請。幕府も腰を上げて支援米を支給するなどの対策をとった。

ついに噴火の三年後に田沼意次が失脚し、松平定信政権へと移り変わる。杉田玄白が「若し今度の騒動なくば御政治は改まるまじきなど申す人も侍りき」(『後見草』)と書いている。さらに、この天明の浅間山噴火の火山灰は成層圏まで上がり、日本のみならず北半球全体に及んだという。1979年にイギリスで催された国際会議では、フランス革命がこの冷害による飢饉で引き起こされたという研究結果が報告されている。つまりは田沼を失脚させ、マリー・アントワネットの処刑まで引き起こしたことになるのか。

美を生み出す伝統の技

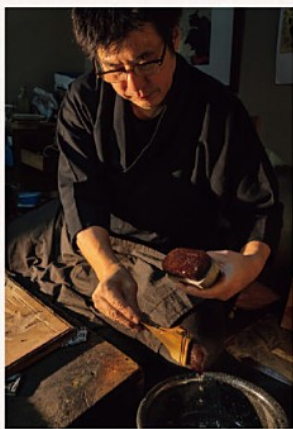
# 版画工房を訪ねる

版元が企画し、戯作者や絵師が筆を振るう。そして印刷される。  
そこには「彫師」「摺師」のたゆみない努力、そして技があった。

取材・文／角田陽、撮影／遠藤純

摺

「長尾版画匠」の長尾雄司さん。3代目として摺りを担当する。視線の先には、今回の仕事である歌川広重の『葛蒲に白鷺』。伝統の摺りを取材させていただいた。



(左から) 版木に色を溶き、糊を混ぜ粘りを持たせ、刷毛で擦って伸ばしてから紙を載せ、バレンで摺る。バレンの動きは、版木の凸部に沿った最小限なもの。一度の作業は必ず200枚以内。それ以上摺れば、人間も、そして版木も「疲れて」しまう。200枚近く刷った版木は半日以上休ませることで長持ちさせられるという。

## 出版は多くの手を経る作業 令和も江戸期もそれは同じ

ここで、江戸時代の「浮世絵の作り方」を今一度おさらいしてみたい。まず葛屋重三郎のような「版元」が企画を考え、喜多川歌麿のような「絵師」に依頼する。絵師は簡単な下絵を描き、相談を重ねて「版下絵」を完成させ、念のため幕府の検閲を受ける。版下絵を版木に貼り付け「彫師」が彫って「摺師」が試し摺りをし、絵師が確認して彩色を指定する。彫師は色の数ごとに再度版木を彫って揃え、いよいよ摺師がすべての色を摺り重ねることで「多色摺りの浮世絵」が完成、版元の店頭を飾ることになる。名声を浴びる版元に絵師だが、彫師に摺師の高度な技なしには成立しえない日本の技だった。

今回は東京都台東区にて、江戸期の、お江戸の技を令和に伝える「長尾版画匠」を伺った。店舗の奥の六畳ほどがそのまま工房、兄弟がそれぞれ彫師と摺師を担当し、差し向かいで仕事をしている。摺りを担当するのは兄の長尾雄司さん。

「京都や上方の版画は白絵の具を用いるので華やかで厚みが出ます。一

方の江戸版画は顔料を水で溶くことで現れる、色の透明感が身上です」

今回の摺りは、歌川広重『葛蒲に白鷺』だ。摺りの基本は、薄い色から徐々に摺っていくこと。まずは墨で輪郭線をかたどり、淡墨を載せる。次いで背景の薄ねずみ色の工程である。雄司さんは版木に顔料を載せ、糊を混ぜ粘りを持たせたうえ、刷毛で版木全体に伸ばす。続いて作業台の下側の黒い包みから紙を取り出す。色の載った越前の手すき和紙、乾燥による縮みを防ぐため、いったん色摺り作業が始まれば紙の保湿作業が不可欠だ。紙はバレンで摺られ新たな色彩が加えられると、次の摺りまで包まれて保湿される。

歌麿や写楽がどんなに優れた原画を描いても、彼らには決して得ない技法がある。それは「ぼかし」だ。空間の曖昧な感覚を、摺師は仕事道具の刷毛に含ませる水量と摺りの技で描く。あるいは細かに彫り込まれた髪の毛をにじませることなく摺る。そして顔料なしの版木に紙を押し当て「立体感」をかたどる。

「画面の端を一直線にほかす『一文字ぼかし』は難しい。でも、それこそが摺師の技ですね」。



左／顔料と墨。墨のかけらを水に漬けて戻し、磨り潰したものに糊やニカワを混ぜ粘りを加えて用いる。右／作業に用いる大小のバレン。小型のものは「ハコ」、大型のものは「十二コ」とそれぞれ呼ばれる。



浮世絵師の描いた「版下絵」を板に貼り付け、色ごとに版木を彫って揃える。写真は富嶽三十六景「甲州石斑澤」の題字を、細かな彫刻刀で彫り込むシーン。



「長尾版画匠」は元々摺師が商売だったが、高齢の彫師の引退に伴い技術を継承すべく、兄弟のうち弟の次朗さんが弟子入りして技を受け継いだ。



版木の中でも初めから色が載らない部分は、大まかに削り落としてしまう。細部から荒削りまで道具は多岐にわたる。

## 江戸期の印刷術を担った 木版彫りの高度な技

今、皆様が読まれている小誌の誌面はカメラマンが撮影し、ライターがパソコンで原稿を書き、編集者やデザイナーがパソコン編集のうえで印刷されたものである。これが明治から昭和後期までならペンで書いた原稿の活字印刷、江戸期では、筆で書いた原画や原稿をもとに「彫師」が版木を彫り上げ、「摺師」が印刷す

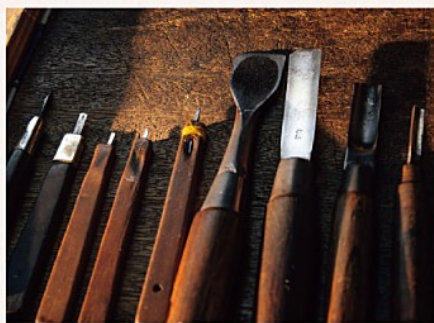
る流れとなる。小学校の図工で習った版画、それは八世紀頃の中国で発明され平安時代の日本に伝わり、江戸期を通じて庶民の娯楽と教育を担ったテクノロジである。

「長尾版画匠」では、弟の長尾次朗さんが「彫師」を受け持つ。今、次朗さんの作業台の上に置かれているのは、葛飾北斎の『富嶽三十六景』から「甲州石班澤<sup>こうしゅういしかざわ</sup>」。富士川の激流の中、漁師が投網を操る。背景に富士、投網が描く三角形と富士の山容が絶妙な構図を描く。この構図とて、彫師が版木に写さなければ世に現れない。さて墨一色摺りなら版木一枚で済むが、多色刷りならばその色ごとに、同じ版木を色の数だけ、六色摺りなら六枚、八色摺りなら八枚用意しなければならぬ。版木に用いられるのは木目が細かく狂いが少ないヤマザクラ。あるいは版木用のヤマザクラとシナノキの合板だ。細かい波間を、岩の皺を、あるいは細かい字体の表現を、次朗さんは彫刻刀

を巧みに使い分けて彫り上げる。「それでも浮世絵一枚の版木すべて、時には十枚以上もそろえるには半月はかかりますね」

大切なことは正確な彫りとともに、摺師が仕事しやすい環境を整えること。色のズレが起らないよう、板にはそれぞれ「見当」と呼ばれる目印を付けておく。好きな浮世絵は『富嶽三十六景』の「神奈川沖浪裏」と語る次朗さん。「川の激浪」に、新たに彫刻刀を入れていく。

## 浮世絵師の筆の冴えを 版木に彫りこんで伝える



平面から細かな文字、水の流れに岩の皺、浮世絵のあらゆるモチーフと絵師の技を板に彫りこむのは、大小10本あまりの彫刻刀にノミの技法だ。

## 三代以上続いた江戸っ子の 技と息を伝える版画工房

東京都台東区元浅草。春日通りに面したビルの一階に「長尾版画匠」はある。店の前部は浮世絵や版画絵葉書を売る店舗、奥の六畳ほどで差し向かいに摺師の長尾雄司さんと彫師の長尾次朗さんが作業台を構える。「うちは明治中期の開業でしてね。爺さんが開業しました。私で三代目になります」

明治の文明開化で最新式の活版印刷や石版印刷が普及しつつも木版の味わいを好む人は多く、数人の摺師を抱えて商売は順調だった。

さて浮世絵の「版木」といえば、江戸期に北斎なり広重なり高名な絵師の指示の元で彫られたオリジナルを、丹念に使い続けるイメージだろう。だが、意外にも版木は消耗品である。無垢板に版を彫って摺れば裏面に別の版を彫り、あるいは古い版を削り落として新たな版を彫るなどして一枚の板を使い込む。そのため古い版木は減多に残らない。そして昭和二十年（1945）の東京大空襲、雄司さんたちの父、直太郎さんが守っていた工房も焼失し、開業以来の



長尾雄司さんと次朗さんの父で2代目の長尾直太郎さん（1920～2013）。昭和20年の東京大空襲で店舗と版木をすべて失うも、戦後復興の中の細かな仕事を重ねつつ、版木を再生して「浮世絵摺師」としての技を復興させた。浮世絵以外に、細かな短冊絵の名工でもあった。

版木はすべて失われてしまった。「それでもね、浮世絵一枚さえあれば、形や色からもともの版木を再現できるんです。戦後しばらくは箸袋やマッチの箱の印刷なんかでつないで、それから版木を還元させたということです」

こうして、江戸浮世絵の摺師としての技はみごと復活された。

だが息子である雄司さん、次朗さんが成人するころ、長年懇意にしていた彫師が高齢を理由に廃業する。

そこで次朗さんが彫師に弟子入りして技術を習得、以降、約三十年後の現在まで、彫師と摺師、兄弟での分業体制を貫いている。現在では新たな浮世絵作品を彫ったり摺ったりすることはなく、北斎や広重など著名な浮世絵師の作品、あるいは神社の千社札の摺りが仕事の中心だ。千社札は一日で版木が彫れ、一度に二〇〇枚は刷れるという強みがある。江戸時代、浮世絵の表現は版元の統制下にあり、職人が自由な表現を試み



2代目・長尾直太郎さん作の短冊絵貼り混ぜ。江戸期の美人画に加え、竹久夢二の美人画、昭和の浮世絵師の作もある。



右は兄で摺師の長尾雄司さん。左は弟で彫師の長尾次朗さん。店舗奥の六畳ほどの小さな工房で、差し向かいで作業をする。互いの工程が理解できるのが制作の強み。

ることは許されなかった。だが千社札は当時から職人の自由な表現が可能だった。多彩な表現を求め、ときに「交換会」まで開かれたという。

版画店舗には、令和七年の千支の蛇の縁起物、『北斎漫画』的一幕を映し取った絵葉書が並ぶ。絵葉書は紙の片面を煮出した茶で染めることで味わい深い表現を醸し出している。

「近頃のインバウンドですか、そのおかげで外国からのお客様も増えました。どこから情報を集めて当店に伺うのか、不思議なものですね」

店の壁には美人画が架けられている。うなじには細かな毛が「一センチにつき二十本近く」描かれている。細密な表現をそのまま板に彫りこみ、一寸の滲みもなく紙面に写し取る。彫師と摺師の技の競演である。



## 長尾版画匠

山手線御徒町駅と隅田川の厩橋を結ぶ春日通りの北側に面したビルの1階。入ってすぐに千社札やポストカードが並ぶ店舗、奥が工房。

東京都台東区元浅草1-1-1

TEL. 03-3847-0772

営業時間 / 10:00~18:00

定休日 / 不定休

アクセス / 都営地下鉄、つくばエクスプレス「新御徒町駅」より徒歩5分



店舗の一隅。現在では大判の浮世絵や千社札に加えポストカードも制作、販売中。お子さんの画をモチーフにしたカードもあり。

葛重時代の

学芸員のお勧めはコレ!

# 名品を観に美術館へ

葛重時代の作品を所蔵する美術館。一目見るべきお勧めを学芸員にお聞きした。

東京都

## すみだ北斎美術館

葛飾北斎が約90年の生涯を過ごした東京都墨田区にある美術館。北斎の業績を長く顕彰し、地域活性化の拠点として開設された。作品の展示、紹介のほかさまざまな普及事業を行なっている。北斎をはじめ浮世絵の資料を、図書室で閲覧することも可能。

東京都墨田区亀沢2-7-2

TEL.03-6658-8936

開館時間／9:30～17:30(入館は17:00まで)

休館日／月曜(祝日または振替休日の場合はその翌平日)、年末年始(12月29日～1月2日)、ほか

観覧料／一般400円(ほか(常設展) アクセス

／都営地下鉄「両国駅」より徒歩5分



©Forward Stroke

学芸員 奥田敦子さん

北斎がまだ勝川派の絵師として「春朗」という名で活動していた頃、初代葛屋重三郎のもとから出版した、吉原夏の恒例行事・吉原俄を描いた中判錦絵の揃物「仁和嘉狂言」の一枚。初々しい筆致が魅力であり、葛重なりに北斎を売り出そうしていたことがうかがえます。



学芸員  
おすすめ

『仁和嘉狂言 三月 花すもう』すみだ北斎美術館蔵

葛飾北斎(勝川春朗)

寛政3～5年(1791～93) 中判錦絵



学芸員  
おすすめ

『名取酒六家選  
大もんじや内浅ぢふ  
木綿屋七ツ梅』

喜多川歌麿

寛政6年(1794)頃 大判錦絵

東京都

## 町田市立国際版画美術館

世界でも数少ない、版画専門の美術館。古くは奈良時代から現代まで、日本をはじめ海外の版画を3万点超収集し、その保存と調査に努めている。見るだけでなく版画を「作る」楽しみを経験してもらうため、本格的な設備を備える。

東京都町田市原町田4-28-1 TEL.042-726-2771

開館時間／10:00～17:00(土日祝～17:30)

休館日／月曜(祝日の場合はその翌平日)、

12月28日～1月4日 観覧料／展示により異

なる アクセス／JR・小田急電鉄「町田駅」

より徒歩15分



学芸員 宮崎黎さん

吉原遊女と銘酒を題材としたシリーズの一作。枕元で物思いに耽るのは、大文字屋の座敷持であった浅茅生。七ツ梅は摂津伊丹の銘酒です。彼女は一体誰を想うのか。思わず考えてしまう所に本作の魅力があります。

東京都

## 太田記念美術館

五代太田清藏に蒐集されたコレクションを公開している美術館。収蔵する1万5000点もの浮世絵をテーマに沿って入れ替え多彩な企画展を通して浮世絵の魅力を発信している。

東京都渋谷区神宮前1-10-10

TEL.050-5541-8600(ハローダイヤル)

開館時間／10:30～17:30 休館日／月曜(祝日の場合はその翌日)、展示替え期間、年末年始  
観覧料／展示により異なる アクセス／東京メトロ「明治神宮前駅」より徒歩3分



千葉県

## 千葉市美術館

「近世から近代の日本絵画と版画」、「1945年以降の現代美術」、「千葉市を中心とした房総ゆかりの作品」の3つを収集方針として活動している美術館。鑑賞だけではなくアート体験も可能。

千葉県千葉市中央区中央3-10-8

TEL.043-221-2311

開館時間／10:00～18:00(金・土は～20:00) 休館日／第1月曜(祝日の場合はその翌日)、年末年始 観覧料／一般300円 ほか(常設展) アクセス／千葉都市モノレール「葭川公園駅」より徒歩5分



学芸員  
おすすめ

### 『当時三美人 富本豊ひな 難波屋さた 高しまひさ』

喜多川歌麿  
寛政5年(1793)  
間判錦絵

学芸員 染谷美穂さん

美人で有名な江戸の評判娘のそれぞれの個性を描き出し、三尊形式に配したもの。もともと大判であったものを少し小さくし、普及版として売り出した作品です。評判娘のプロマイドは、当時一般の人びとにも高い需要があったのでしょうか。

学芸員  
おすすめ

### 『富本豊ひな』

喜多川歌麿  
寛政5年(1793)頃  
大判錦絵

学芸員 赤木美智さん

富本豊雛は富本館の吉原芸者であり評判の美人。歌麿と蔦重とのタッグが打ち出した、上半身を大きく描く「美人大首絵」の趣向でその微笑む様子を捉えた優品です。輝く背景の雲母摺りや黒の小袖が、クールな美貌を引き立てています。

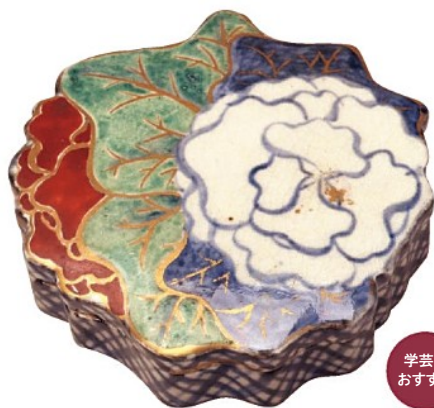
神奈川県

## 岡田美術館

近世・近代の日本画と、東アジア(中国・韓国・日本)の陶磁器を中心に収蔵し、縄文土器などの考古遺品や仏教美術、またガラス器などの工芸品まで、幅広い分野の名品を展示している。

神奈川県箱根町小涌谷493-1 TEL.0460-87-3931

開館時間／9:00～17:00 休館日／12月31日、1月1日、展示替え期間 観覧料／一般2800円 ほか アクセス／箱根登山鉄道「小涌谷駅」よりバスで「小涌園」下車すぐ



学芸員  
おすすめ

### 「色絵立葵図香合」

尾形乾山  
江戸時代 18世紀 陶器

学芸員 塩谷尚子さん

立葵の花を象った小さな香合です。磁器のような白と鮮やかな赤を対比させ、アクセントに金彩を用いています。蓋を開けると、内側には露の光る金色の薄野原が！夏の立葵から秋の薄へ、季節の移ろいを楽しめる1点です。

長野県

## 北斎館

葛飾北斎の専門美術館。北斎の画業の初期から最晩年までの作品が収集されており、季節ごとに変わる展覧会で北斎の世界を楽しめる。北斎が自ら筆をとり制作した屋台天井絵なども間近に見ることができる。

長野県小布施町小布施485 TEL.026-247-5206

開館時間／9:00～17:00

休館日／12月31日

観覧料／一般1000円 ほか

アクセス／長野電鉄「小布施駅」より

徒歩12分



### 学芸員 内藤立子さん

北斎が30代前半に描いた役者絵です。鉄砲を片手に凛々しく構える姿、その足元には葛屋重三郎の版元印があります。天明末から寛政にかけて、葛屋との仕事が増え、北斎の描く人物描写や作品全体の印象が洗練されていくようにみられます。



学芸員  
おすすめ

## 『三代目大谷廣次 新がた二郎』

葛飾北斎

寛政2年(1790) 細判錦絵

長野県

## 日本浮世絵博物館

日本最大の浮世絵博物館として、多岐にわたる浮世絵を収集している。とくに19世紀の浮世絵に関しては世界最大規模の品を収蔵し、北斎、英山、英泉、国貞などの優品を多数有する。

長野県松本市島立2206-1

TEL.0263-47-4440 開館時間／10:00～17:00

休館日／月曜(祝日または振替

休日の場合はその翌平日)、年

末年始 観覧料／一般1000

円 ほか アクセス／松本電鉄

「大庭駅」より徒歩15分



### 学芸員 五味あずさん

細やかな描写と丁寧な彫り、摺りが施された狂歌絵本。柔らかな色味の賦彩も草花や生き物の儚さ、繊細さを引き立てます。時間を忘れて見入ってしまう作品です。



学芸員  
おすすめ

## 『画本虫撰』

宿屋飯盛撰、喜多川歌麿画

天明8年(1788) 狂歌絵本

大阪府

## 大阪浮世絵美術館

浮世絵師の四大巨匠である葛飾北斎・歌川広重・喜多川歌麿・東洲斎写楽をはじめ、大阪や京都ゆかりの浮世絵版画を所蔵。館内ショップでは江戸時代に摺られた浮世絵も販売。

大阪市中央区心斎橋筋2-2-23

不二家心斎橋ビル3F

TEL.06-4256-1311

開館時間／10:00～17:00

休館日／年末年始、展示替

え日 観覧料／一般1000円

ほか アクセス／大阪メロ

「心斎橋駅」より徒歩5分



### 学芸員 木下里菜さん

柱に飾るため極めて細長く描かれた柱絵という特殊な形状を活かした見事な構図で、七福神を描いた大変縁起の良い作品です。葛飾北斎はいろいろな号で作品を残していて、「春朗」と号していた時代のもので。

学芸員  
おすすめ

## 『柱絵 七福神』

葛飾北斎(勝川春朗)

安永7年～寛政6年(1778～94)頃

柱絵



大阪府

## 和泉市久保惣記念美術館

日本と中国の絵画、書、工芸品など東洋古美術を主におよそ1万3000点を所蔵し、うち浮世絵は約6000点。所蔵品を使用した年4～5回の企画展と年1回の独自企画の特別展を開催している。

大阪府和泉市内田町3-6-12 TEL.0725-54-0001  
開館時間／10:00～17:00 休館日／月曜（祝日の場合はその翌平日）、年末年始、展示替え日 観覧料／一般500円（ほか（常設展）） アクセス／泉北高速鉄道「和泉中央駅」よりバス「美術館前」下車すぐ



学芸員  
おすすめ

### 『高島 おひさ』

東洲斎写楽  
18世紀後期  
大判錦絵

学芸員 後藤健一郎さん

寛政の三美人である高島おひさの姿を描いています。襟元はゆったり開き、帯を柔らかく結び、団扇を手にする姿は夏の風情を感じます。団扇に描かれているのは高島おひさの家紋です。

山口県

## 山口県立萩美術館・浦上記念館

萩市出身の実業家である浦上敏朗のコレクションをもとに、浮世絵とやきものを専門とする美術館。浮世絵約5200点を収蔵。ほか、東洋陶磁約500点、陶芸・工芸約750点を収蔵する。

山口県萩市平安古町586-1 TEL.0838-24-2400  
開館時間／9:00～17:00 休館日／月曜（祝日の場合はその翌日、第1月曜日は開館）、年末年始、展示替えなどの臨時休館あり 観覧料／一般300円（ほか（コレクション展）） アクセス／JR「新山口駅」からバス「萩・明倫センター」下車徒歩約5分



学芸員 瀧田恵子さん

寛政6年（1794）5月、桐座で上演された「敵討乗合話（かたぎうちりやいばなし）」に取材した作品です。三代目市川高麗蔵は、当時女性から絶大な人気を得ていた花形役者。懐から出した手は刀を握り、この芝居で起こる殺害のシーンを予感させます。



### 『三代目市川高麗蔵の志賀大七』

東洲斎写楽

寛政6年（1794） 大判錦絵

学芸員  
おすすめ

特別展

### 「葛屋重三郎 コンテンツビジネスの風雲児」

数多くの名品がある東京国立博物館でも葛屋重三郎展を開催する。葛屋が創出した価値観や芸術性に、重要文化財の浮世絵など約250点の作品を通して迫る。誰もが知る歌麿や写楽の「あの絵」も展示予定だ。



『婦女人相十品  
お七を吹く娘』  
喜多川歌麿筆  
寛政4～5年（1792～93）頃  
東京国立博物館蔵

『重要文化財  
三代目大谷鬼次の江戸兵衛』  
東洲斎写楽筆  
寛政6年（1794）  
東京国立博物館蔵

会期／4月22日（火）～6月15日（日）  
会場／東京国立博物館 平成館（東京都台東区上野公園13-9） TEL.050-5541-8600（ハローダイヤル）  
主催／東京国立博物館、NHK、NHKプロモーション  
アクセス／JR「上野駅」より徒歩10分  
展覧会公式サイト <https://tsutaju2025.jp/>

島根県

## 島根県立美術館

約3000件の浮世絵の作品・資料を所蔵。なかでも葛飾北斎に関しては島根県出身の北斎研究者・永田生慈のコレクションを中核に、世界で一点または数点しか確認されていない貴重な作品を収蔵している。

島根県松江市袖師町1-5  
TEL.0852-55-4700  
開館時間／10:00～18:30（3月～9月は～日没後30分） 休館日／火曜（企画展の開催日程にあわせて休館日変更の場合あり）、年末年始 観覧料／一般300円（ほか（コレクション展）） アクセス／JR「松江駅」より徒歩15分



学芸員 大森拓土さん

北斎が「春朗」と名のついていた画業初期における珍しい武者絵の作例です。右下に「葛屋重三郎」とあるように版元は葛屋重三郎。豪力無双の朝比奈三郎が酒樽にもたれて寛ぎ、鬼に肩を叩かせているユーモラスな情景です。



学芸員  
おすすめ

### 『朝日奈三郎平ノ義秀』

葛飾北斎（勝川春朗）

寛政3～5年（1791～93）頃 中判錦絵

## 作品を入れ替えれば毎日がちょっと変わる

ハガキをカンタン入れ替え〈マグネットフレーム〉

8250円(税込) 商品番号 BRD-5628-JT



■サイズ／199×247mm ■仕様／木製枠、紐・立て棒付き、箱入 ※官製はがきサイズ(100cm×148cm)以上のハガキ・写真でお使いいただけます。

展覧会や旅行、寺社に参拝した記念に買うのが楽しい絵はがき。眺めているだけで思い出が蘇り、コレクションのように集めている方も多い。本品はそんなお気に入りの絵はがきを簡単にセットして飾ることができるマグネット式のフレームだ。フレーム裏に設けられた穴から指を入れてマットを押して外せば、すぐに絵はがきを入れ替えることができる。季節や気分で中身を入れ替えて楽しみたい。今回はP112～P115で、江戸の人気絵師たちに困んだ絵柄の「絵はがきセット」も一緒にご紹介。もちろん、お手持ちのお気に入りの一枚や、思い出の写真との組み合わせも楽しめる。

厳選  
グッズ  
通販

時空旅人

# SELECT SHOP

江戸の文化を代表する浮世絵たちの絵葉書。  
フレームとセットで揃えれば、  
その日の気分に合わせて名作を飾れる。

お気に入りの一枚をセットして楽しもう。



## 絵はがき・写真をカンタン入れ替え



フレーム裏にある穴から指を入れてマットを押して外せば、すぐに絵はがきを入れ替えることができる。



紐・立て棒付きのため、壁に飾ることも、立てかけて飾ることもできる。



重文 三代目沢村宗十郎の  
大岸蔵人



重文 初代市川男蔵の  
奴一平



重文 四代目松本幸四郎の  
山谷の肴屋五郎兵衛



重文 市川銀蔵の  
竹村定之進



重文 三代目瀬川菊之丞の  
田辺文蔵女房 おしづ



重文 三代目佐野市松の  
祇園町の白人 おなよ



重文 二代目瀬川富三郎の  
大岸蔵人妻やどり木



重文 三代目大谷鬼次の  
江戸兵衛

## 謎多き天才浮世絵師の 代表作がズラリ

絵はがきセット 東洲斎写楽 名品撰 8枚組  
770円(税込) 商品番号 BRD-5636-JT

当時の人気役者を大胆にデフォルメし、役者の個性を引き出した東洲斎写楽。表情やしぐさ、衣装に至るまで、この絵はがきセットで堪能できる。海外の方へのお土産にもお勧め。



■仕様／絵はがき8枚組 ■所蔵先／東京国立博物館 ■サイズ／タトウ:112×172mm、絵はがき:148×100mm ■印刷方法／オフセットカラー



婦女人相十品・  
ビードロ吹き



當時全盛美人揃・  
瀧川



おひさ、おきたの腕相撲



台所美人



姿見七人化粧・  
びん直し



歌撰恋之部・  
物思恋



江戸三美人・  
富本豊雛、難波屋  
おきた、高しまおひさ



当世踊子揃・  
吉原雀

## 『市井や遊里の美人たちにうっとり』

絵はがきセット 喜多川歌麿 名品撰 8枚組

770円(税込) 商品番号 BRD-5637-JT



喜多川歌麿といえば、なんとい  
っても美人画だろう。髪の毛の  
一本一本まで丁寧に描かれた女  
性たちの優美さには溜息がこぼ  
れる。市井の女性をはじめ、美  
人と評判だった女性たちがそろ  
い踏み。

■仕様／絵はがき8枚組 ■所蔵先／  
東京国立博物館 ほか ■サイズ／タ  
ウ:112×172mm、絵はがき:150×105mm  
が5枚、148×100mmが3枚 ■印刷方法  
／オフセットカラー

## 今日は写楽、明日は歌麿？



猫の六毛撰



鼠よけの猫



猫あそび



金魚づくし・百ものがり



金魚づくし・さいいとんび

## 歌川国芳の 動物愛に心癒される

絵はがきセット 歌川国芳 戯画撰 8枚組

770円(税込) 商品番号 BRD-5638-JT

歌川国芳は武者絵や美人画、  
戯画など幅広いジャンルで才  
能をいかんなく発揮した浮世  
絵師。まるで人間のように生  
き生きと動き回る金魚や猫た  
ちを見ていると、国芳の観察  
眼の鋭さや愛らしいユーモア  
に触れることができる。



金魚づくし・玉や玉や



猫のすずみ



流行猫の曲手まり

■仕様／絵はがき8枚組 ■所蔵先／東京国立博物館 ほか ■サイズ／タウ:112×172mm、絵はがき:148×100mm  
■印刷方法／オフセットカラー

## 緻密な描写に思わず息を呑む北斎の花鳥画

絵はがきセット 葛飾北斎  
花鳥画撰 10枚組

990円(税込)

商品番号 BRD-5639-JT

天才的なデッサン力と想像力、類まれな構成力で世界中で人気の葛飾北斎は、風景画のみならず花鳥画も多くてがけた。その中から、春～秋頃にかけでの色とりどりの花鳥画を10枚集めた。



■仕様／絵はがき10枚組 ■所蔵先／東京国立博物館 ■サイズ／タウ:112×172mm、絵はがき:148×100mm ■印刷方法／オフセットカラー



黄鳥 長春



文鳥 辛夷花



鴉翠雀 虎耳草 蛇莓



鶯 垂桜



鶇 白粉花



芍薬 カナリア



鶇 小薊



翡翠 鳶尾草 瞿麦



藤 鶇



子規 杜鵑花

## 暮らしに溶け込む 小さなアート



日本橋



箱根

### 絵はがきを介して 往時の人々と旅に出よう

絵はがきセット  
東海道五拾三次 8枚組  
770円(税込)

商品番号 BRD-5640-JT

歌川広重の名作《東海道五十三次》から名所を厳選。東京から京都に至るまでの道中の人の様子や名物など、当時の様子が垣間見れて楽しい。

■仕様／絵はがき8枚組  
■所蔵先／東京国立博物館  
■サイズ／タウ:112×172mm、絵はがき:150×105mm  
■印刷方法／オフセットカラー



原



蒲原



御油



四日市



庄野



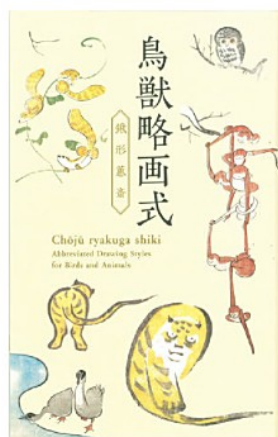
京都

## ゆるい画風が現代人の心も驚掴みに

絵はがきセット〈鳥獣略画式〉  
 鋏形蕙斎(8枚組)

**770円(税込)** 商品番号 BRD-5641-JT

江戸時代の絵師・鋏形蕙斎(くわがたけいさい)。  
 抜け感のある画風で人気の〈鳥獣略画式〉から、愛  
 らしい動物たちを絵はがきセットにした。そのま  
 ま飾るのはもちろん、空いたスペースに文字を書  
 き加えて、世界で一枚の作品にするのも楽しい。



■仕様／絵はがき  
 8枚組 ■所蔵先  
 福岡市博物館  
 ■サイズ／タ  
 トウ:112×172mm、  
 絵はがき:148×  
 100mm ■印刷  
 方法／オフセット  
 カラー



## 記念的な両面屏風を“元の姿で”扇子に

扇子〈風神雷神図・夏秋草図〉尾形光琳・酒井抱一(男女兼用)

**6600円(税込)** 商品番号 BRD-5635-JT

《夏秋草図》は、酒井抱一が一橋治済(ひとつばしはるさだ)のために尾形光琳筆《風神雷神図》の裏  
 面にあとから描いた作品(東京国立博物館蔵)。現在は保存のために表裏は別の屏風に改装されてい  
 るが、本商品は2作品の元の姿をイメージして制作した。雷神図の裏には雨に打たれた夏草が、そし  
 て風神図の裏には風神が巻き起こした風に吹かれているかのように、秋草が描かれていた。

■サイズ／22.7cm(7寸5分)  
 ■仕様／和紙、唐木骨30  
 間 ■仕立／宮脇賣扇庵  
 ■印刷方法／オフセットカ  
 ラー ■備考／作品解説  
 書入、化粧箱入



## 金魚たちの笑い声が 今にも聞こえてきそう

扇子〈金魚づくし〉歌川国芳(女性用)

**4400円(税込)** 商品番号 BRD-5634-JT

歌川国芳は江戸時代末期の浮世絵師。14歳で画壇  
 デビューを果たし、風景画・美人画・役者絵・花鳥  
 画・武者絵など、幅広い作域で活躍した。《金魚づ  
 くし》は擬人化された金魚たちがまるで人間のよ  
 うに動き回る様子が楽しい作品(東京国立博物館  
 蔵)。水中で戯れる金魚たちの笑い声が扇子の風  
 に乗って今にも聞こえてきそう。

■サイズ／19.6cm(6寸5分) ■仕様／和紙、唐木骨25間 ■  
 仕立／宮脇賣扇庵 ■印刷方法／オフセットカラー ■備考  
 ／作品解説書入、化粧箱入





## 卯年生まれのお守り本尊

十二支のお守り本尊  
文殊菩薩(卯年)

2万6400円(税込)

商品番号 NGE-4509-JT

卯年のお守り本尊は文殊菩薩。「文殊の知恵」といわれ、知恵と戒律を司る菩薩。日常生活に普遍的知恵と悟りを導くとされる。

■カラー／古美青銅、古美金、古美茶  
■サイズ／幅7.5×高さ15×奥行6cm  
■重量／約900g ■材質／亜鉛合金  
※ご注文の際、カラーをご指定ください。カラーイメージは「千手観音菩薩(子年)」をご参照ください。

## 辰・巳年生まれのお守り本尊

十二支のお守り本尊  
普賢菩薩(辰・巳年)

2万6400円(税込)

商品番号 NGE-4510-JT

辰・巳年のお守り本尊は普賢菩薩。人々を生死の苦しみから救い、理性と知性、慈悲の徳によって人々に幸福な人生を授ける。

■カラー／古美青銅、古美金、古美茶  
■サイズ／幅7.3×高さ15×奥行6cm  
■重量／約900g ■材質／亜鉛合金  
※ご注文の際、カラーをご指定ください。カラーイメージは「千手観音菩薩(子年)」をご参照ください。



## SELECT SHOP's BEST SELLER

新たに迎える令和7年(2025)は巳年。  
新年に合わせて、守り本尊を傍らに置けば、  
きっと今年も良い年が過ごせるはず。



古美金



古美青銅



古美茶

## 子年生まれのお守り本尊

十二支のお守り本尊 千手観音菩薩(子年)

2万6400円(税込) 商品番号 NGE-4507-JT

生まれの干支ごとに定められている「お守り本尊」。ここでは400年以上の歴史を持つ日本有数の銅器産業の町、富山県高岡市で丹精を込めて作られている本格仏像を紹介する。千手観音は広範囲にわたり人々を救うとされる万能の菩薩。千の手と千の眼は、救う手段の豊富さを表す。



アンティークな風合の古美色は、高岡の工房に相伝する技法で一点一点着色している。

■カラー／古美青銅、古美金、古美茶 ■サイズ／幅7.5×高さ15.5×奥行6.5cm ■重量／約740g ■材質／亜鉛合金 ※ご注文の際、カラーをご指定ください。

## 午年生まれのお守り本尊

十二支のお守り本尊  
勢至菩薩(午年)

2万6400円(税込)

商品番号 NGE-4511-JT

午年のお守り本尊は勢至菩薩。偉大な知恵の力で人々の迷いを除き、光明であまねく一切を照らし人々を苦難から救い出す。

■カラー／古美青銅、古美金、古美茶  
■サイズ／幅6.5×高さ15×奥行6.5cm  
■重量／約570g ■材質／亜鉛合金  
※ご注文の際、カラーをご指定ください。カラーイメージは「千手観音菩薩(子年)」をご参照ください。



## 丑・寅年生まれのお守り本尊

十二支のお守り本尊  
虚空蔵菩薩(丑・寅年)

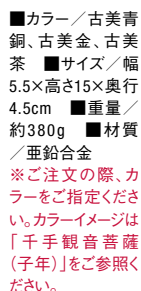
2万6400円(税込)

商品番号 NGE-4508-JT

丑・寅年のお守り本尊は虚空蔵菩薩。虚空が限りない智慧と慈悲を備える。願いを叶え、福德を司り、知恵を授けるとされる。

■カラー／古美青銅、古美金、古美茶 ■サイズ／幅6.5×高さ15×奥行6.5cm ■重量／約580g ■材質／亜鉛合金  
※ご注文の際、カラーをご指定ください。カラーイメージは「千手観音菩薩(子年)」をご参照ください。





十二支のお守り本尊 阿弥陀如来(戌・亥年)  
**2万6400円(税込)**

**商品番号** NGE-4514-JT

戌・亥年生まれのお守り本尊は阿弥陀如来。無限の寿命と限りない智慧で人々を救い続ける。加護を祈れば穏やかに暮らすことができる。

十二支のお守り本尊 不動明王(酉年)  
**2万6400円(税込)**

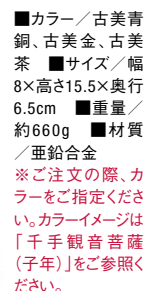
**商品番号** NGE-4513-JT

酉年生まれのお守り本尊は不動明王。種々の  
 煩惱を取り除き一切の災いを焼き払うとされ  
 る。人々を救うため、あえて厳しい姿をとる。



■カラー／古美青銅、古美金、古美茶 ■サイズ／幅6×高さ15.5×奥行3.6cm ■重量／約420g ■材質／亜鉛合金

※ご注文の際、カラーをご指定ください。カラーイメージは「千手観音菩薩(子年)」をご参照ください。



十二支のお守り本尊 大日如来(未・申年)  
**2万6400円(税込)**

**商品番号** NGE-4512-JT

未・申年生まれのお守り本尊は大日如来。密教において宇宙の真理、すべての現象の根源とされる仏。全世界の平和と繁栄を司る。

料金受取人払郵便

赤坂局承認

7242

差出有効期間  
2025年9月  
30日まで

切手はいりません

1 0 7 8 7 9 0

112

東京都港区赤坂2-16-20  
トリオ赤坂ビル4F  
(株)ジャパンクリエイティブワークス  
歴史プラス  
「時空旅人」係行

キリトリ線

24時間

## インターネット

歴史プラス

<https://rekishiplus.com>

PC、スマートフォンからアクセス可能。

郵送

## 切手不要、ポスト投函

左のハガキに必要事項をご記入の上、  
キリトリ線で切り、ハガキの大きさの厚紙  
に貼って投函してください。

## フリーダイヤル

0120-007-818

受付時間／月～金曜日、10:00～18:00  
土日祝は休み

24時間  
受付

FAX

**0120-002-506**

ご希望の商品番号・商品名・数量と、お届け先のご住所・お名前・電話番号をご記入の上、FAXしてください。

左のハガキに必要事項をご記入の上、FAXしていただくこともできます。

## ●お支払い方法について

インターネットでお申し込みの場合は、代金引換、クレジットカード決済、Amazon Pay、コンビニ決済(前払い)がご利用いただけます。

フリーダイヤル、ハガキ、FAXでお申し込みの場合は、代金引換のみとなります。

●送料について

1回のご注文につき880円(税込)の送料がかかります。また、代金引換でお支払いの場合、別途代引き手数料が必要となりますのであらかじめご了承ください。 ※沖縄・離島の送料は1830円(税込)となります。

### ●代引き手数料について

税込合計金額が、1万円以下の場合は330円(税込)、3万円以下は440円(税込)、10万円以下は660円(税込)となります。

## ●その他

商品は申し込み後、10営業日前後でお届けいたします。メーカー在庫切れの場合、納期までお時間をいただく場合がございますのでご了承ください。お客様のご都合による返品・交換は原則として受け付けておりません。なお特別な理由がある場合には、返品をお受けする場合がございます。その際の送料はお客様にご負担いただきます。

※ご注文をご希望される商品がハガキに書ききれない際は、  
余白またはハガキ裏面（ハガキに貼り合わせた厚紙）にご記入ください。

依頼主様	ふりがな			
	お名前			
	お電話番号	-                      -		
	ご住所	<div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; width: 30px; height: 30px; margin: 2px;"></div> <div style="border: 1px solid black; width: 30px; height: 30px; margin: 2px;"></div> <div style="border: 1px solid black; width: 30px; height: 30px; margin: 2px;"></div> <div style="font-size: 20px; margin: 0 5px;">-</div> <div style="border: 1px solid black; width: 30px; height: 30px; margin: 2px;"></div> <div style="border: 1px solid black; width: 30px; height: 30px; margin: 2px;"></div> <div style="border: 1px solid black; width: 30px; height: 30px; margin: 2px;"></div> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-top: 5px;"> <span>都 道</span> <span>府 県</span> <span>市 区</span> <span>町 村</span> </div>		

商品番号	商品名	個数	価格
-    -			円
-    -			円
-    -			円
-    -			円
-    -			円

11 島屋重三郎とお江戸お茶屋 初加子



「男の隠れ家」  
公式オンラインショップ

# 男の隠れ家 PREMIUM

老舗雑誌「男の隠れ家」が厳選した、  
全国各地の「匠」な逸品を紹介。  
ラインナップ随時拡大中、ご期待ください。

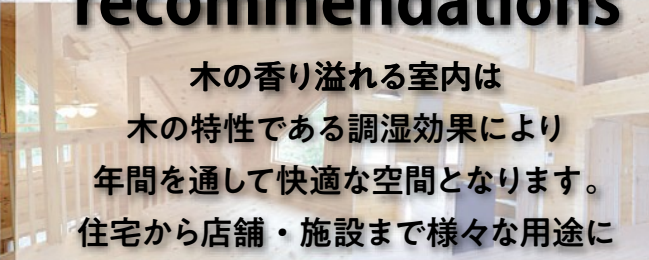
<https://otokonokakurega.shop/>





# Log house recommendations

木の香り溢れる室内は  
木の特性である調湿効果により  
年間を通して快適な空間となります。  
住宅から店舗・施設まで様々な用途に  
ログハウスをおすすめします。



## いろいろなおしゃれな小屋 オリジナル製作致します！

※キット価格の目安1帖11万円～



Garden House



Bike House



Bicycle House

### ★本場フィンランドログのドックカフェ



長年の夢であったドックカフェを本場フィンランドログで実現。  
ワンちゃんも喜ぶ贅沢な木の香り漂う空間で、ゆったりとした時間  
が過ごせます。

★施工事例や現場の様子、ログ工場やお買得情報もある当社ホームページをご覧ください

URL: <http://www.ms-log.com>

E-mail: [info@ms-log.com](mailto:info@ms-log.com)

ログハウスの事なら、何でもご相談下さい。貴方のご要望に合ったログハウスを提案します。

### セルフビルドでログハウス



森を切り開き、セルフビルドでログハウスを建てました。  
完成後、都会から移住し田舎暮らしを満喫中！



有限会社 アトリエ エムズ

本社: 滋賀県近江八幡市安土町常楽寺423-4  
大阪事務所: 大阪市城東区放出西2-19-25-1005

お問い合わせ

06-6969-7988

# 蔦屋重三郎

～江戸のメディア王と波乱万丈の生涯～

## Staff

### Publisher

鈴木賢志 Satoshi Suzuki

### Editorial Division

Creative Director

栗原紀行 Noriyuki Kurihara

Editor in Chief

末松敏樹 Toshiki Suematsu

Editor

紅林 怜 Rei Kurebayashi

長谷部汐美 Shiomi Hasebe

白玉海史 Hirofumi Shiratama

山崎源柱 Genju Yamasaki

Writer

阿部文枝 Fumie Abe

上永哲矢 Tetsuya Uenaga

角田陽一 Yoichi Tsunoda

### Photographer

遠藤 純 Jun Endo

米屋こうじ Koji Yoneya

### Design Staff

Hiroshi Takahara Design Office

高原真人 Masato Takahara

黒羽拓明 Hiroaki Kuroha

城島希美 Nozomi Jojima

NOEL DESIGN OFFICE

久保田りん Rin Kubota

### Map Design

ZOUKOUBOU

### Illustrator

菊馳さしみ(北伐) Sashimi Kikuchi

### Advertising Division

三栄広告部

### Producer

株式会社三栄

遠藤和宏 Kazuhiro Endo

## サンエイムック

時空旅人別冊 蔦屋重三郎 ～江戸のメディア王と波乱万丈の生涯～  
2025年2月19日発行

発行人:鈴木賢志 編集人:末松敏樹

発行所:株式会社三栄

〒163-1126 東京都新宿区西新宿6-22-1 新宿スクエアタワー 26F

TEL:03-6773-5250(販売部)

TEL:048-988-6011(受注センター)

編集部:株式会社ブラネットライツ

〒160-0002 東京都新宿区四谷坂町2-18

TEL:03-5369-8780

©2025ブラネットライツ SAN-EI CORPORATION

PRINTED IN JAPAN TOPPANクロレ株式会社

『時空旅人』のバックナンバー好評発売中です。

お求めは、株式会社三栄書房・販売部 TEL:03-6773-5250もしくは<http://www.sun-a.com>

本誌掲載の写真、イラスト、記事の無断転載を禁じます。

内容についてのお問い合わせは株式会社ブラネットライツ(編集部)までお願い致します。

PRESENT

## 読者プレゼント



高橋克典『青樓にて 喜多川歌麿「雪月花」異聞』(未知谷)  
3名様

- 【応募要項】 下記の必要項目をご記入いただき、  
官製ハガキにてご応募ください。  
当選者の発表は発送をもってかえさせていただきます。
- 【必要項目】 氏名／年齢／性別／住所／電話番号／  
本誌を読んだ感想や読んでみたい企画(イラストもOK!)
- 【応募宛先】 〒160-0002 東京都新宿区四谷坂町2-18  
株式会社ブラネットライツ  
時空旅人編集部 別冊「蔦屋重三郎」読者プレゼント係
- 【応募締切】 2025年2月7日(金) 必着(当日消印有効)

※ハガキにご記入いただいたお名前や年齢などの個人情報は、誌面作りの目的以外では一切使用いたしません。

## 『箱入娘面屋人魚』

はこいりむすめめんやにんぎょう

蔦屋重三郎の有名なワンシーン。幕府に目をつけられ、筆を折ろうとしている山東京伝に、版元である蔦重が本作の依頼した経緯を「まじめなる口上」として読者へ説明。さらに購入を勧める。

山東京伝作 寛政3年(1791)  
国立国会図書館所蔵



【主な参考文献】『図説 吉原事典』永井義男(2015・朝日文庫)／『[新版] 蔦屋重三郎』鈴木俊幸(2012・平凡社)／『江戸の本づくし』鈴木俊幸(2011・平凡社新書)／『吉原はこんな所でございました 廓の女たちの昭和史』福田利子(2010・ちくま文庫)／『歌麿・写楽の仕掛け人 その名は蔦屋重三郎』(2010・サントリー美術館)／『江戸の教育力 近代日本の知的基盤』大石学(2007・東京学芸大学出版会)／『日本人なら知っておきたい 江戸の商い一朝から晩まで』歴史の謎を探索会編(2007・KAWADE夢文庫)／『江戸吉原図説』三合一馬(1992・中公文庫)／『田沼意次の時代』大石慎三郎(1991・岩波書店)／『川柳吉原風俗絵図』佐藤要人編(1973・至文堂)



毎日が“森林浴”  
—hinoki no mori—

「1,000万円台で建てる、オール国産」  
ストレスが消えていく  
「ひのきの家」誕生  
木の家っていいね！



木の温もりに“ホッ”と癒やされる◎  
ビルトインガレージのある古民家風の家♪

GOOD DESIGN AWARD  
2014 2015 2年連続受賞

所なら抽選で当たる！  
毎月50名様  
KOKUSAN HINOKI  
キャンペーン  
実施中！

国産ひのきの柱  
新築一棟分  
PRESENT



詳細はこちら  
今すぐCheck!



日本の伝統を科学するひのきの家  
サイエンスホーム

お問い合わせは/本部お客様係  
0120-025-152

日本全国108店舗拡大中！

サイエンスホーム 検索

理想の木の家づくり 5点セット 差し上げます！



家づくりの  
はじめDVD



住まいの実例集  
Rクラス・Sクラス



ひのき  
づくりの家



平屋  
実例集



家づくりの  
アイデア満載！  
資料請求は  
こちらから

※建築価格は、延床面積や建てられる地域、仕様等によって異なります。詳しくはお近くの店舗までお問い合わせください。

# 天の一郭に開けた紀州万葉の郷 和歌山県かつらぎ町

古の歌人たちが愛した山姿に抱かれた、  
自然と文化の地

和歌山県かつらぎ町は、古の詩に響く妹山・背山の麓に抱かれ  
変わらず流れ続ける紀ノ川と共に時を超えた美しさを継いでいます。  
万葉集に讃えられた15首の詩は、この地の静かで力強い象徴であり、  
今も変わらない山々の姿が映し出されています。四季折々に色づく豊かな自然は果物の宝庫で、  
高野山への参詣道や丹生都比売神社などの世界遺産がその歴史と文化の深さを物語っています。  
かつらぎ町は、万葉の詩が息づく、歴史と自然が調和した美しい地です。

妹山、背山、船岡山の雄大で美しい自然に囲まれ、文化遺産と共に暮らす。移住に最適のまち。

冬



穴伏川を渡る通水橋  
「龍之渡井」

秋



雄大な紀ノ川から望む山々  
左から妹山、背山、船岡山

夏



背山からJR和歌山線と  
かつらぎ町笠田地区

春



道の駅 紀ノ川万葉の里から  
背山を望む

Photo by Takaaki Konishi



かつらぎ町役場・観光協会

〒649-7192 和歌山県伊都郡かつらぎ町丁ノ町 2160 番地  
0736-22-0300



かつらぎ町は高野山の麓に  
位置する人口16,000人の  
まちです。



9784779651687



1929476012821